

---

# 流星のロックマン Arrange The Original

悲傷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン Arrange The Original

### 【Nコード】

N5860W

### 【作者名】

悲傷

### 【あらすじ】

他人と関わることを恐れてしまった一人の少年。

彼は憎しみにとらわれ全てを捨てた一人の異星人と出会う。

その出会いは二人の運命を大きく変えていく。

これは、一人の少年が、見えない父の背中を追いかけて、仲間と大切な人との絆に支えられ、

対称的な相棒と共に、ヒーローへと成長していく物語。

CAPCOMの隠れた名作、『流星のロックマン』の原作ゲームス

トリーを完全(?)小説化!

原作を知っている方でも楽しめる!

原作を知らない方でも楽しめる!

そんな小説を目指して行きます!

ストーリー展開が遅いです。気長に見守ってやってください。

## 第零話・旅立ち（前書き）

あらすじにもありますが、この作品は原作沿いストーリーです。

見えているストーリーを面白く見せるため、オリジナルの場面を入れたり、

原作にあった場面をカットしたり、細かい部分を変えたりします。しかし、原作のキャラとストーリーの大筋は極力変えない方針です。

それでも宜しければ、ごらんください。

では・・・どうぞー！

## 第零話・旅立ち

整備された道路を走る車の音がする。

そのすぐ近くで驚いた小鳥達が羽ばたく。

都会とまでは言えないが、ちょっと大きい街だ。

緑も多く、魚が泳いでいる川も流れている。

すぐ近くの公園では子供達の遊ぶ声が毎日のように聞こえてくる。

この町が好きだ。

なにより、ここには自分の家族がいる。

「行ってくるよ」

まだ10歳に満たない我が子を抱き抱える。

いつの間にこんなに重くなったのか。

鍛えた自分の体なら持ち上げられないことは無い。

しかし、予想以上の重量に唸ってしまった。

それにしても、この子の髪癖の悪さはどうにかならないものか。

自分以上に堅い髪質がちょっとかわいそうに見えてくる。

「ねえ、帰ってきてね?」

自分と対象の表情をする妻に目を向ける。

彼女が抱えているのと同じ物。

それが己にそれが無いわけではない。少なからず存在している。

けれど、それを見せるわけには行かない。

今ここで見せたら、この人は立ち上がれなくなるかもしれない。

そこまで弱い女を選んだつもりはない。しかし、彼女の心を支えて

いるのは自分だ。  
だから、胸に渦巻く黒い靄を無理やり踏みつぶした。

「おう！待っていてくれよ！必ずお前のニンジングラタン食いに戻ってくるぞ！」

「ええ！僕ニンジン嫌い！」

冗談を交えた笑みを返すと、息子が泣きだした。  
母である彼女が「めっ」としかりつける。

自分が帰って来た時には克服してくれていることを願うばかりだ。  
どこの家庭でも見られる普通の光景。でも、これが自分が最も大切にしているもの。

守り切りりたい、いや、守りきらなければならぬ物。  
だからこそ、心に決める。

「あかね」

妻の名を呼ぶ。息子から手を離すと、二人揃って振り向いた。

「必ず帰ってくる」

自分の目をはつきりと見返して、うなずいた。  
そして、その隣に目を移す。

「俺がいない間、母さんを頼んだぞ。スバル！」

「うん。任して！お母さんは僕が守るから！」

多分、自分の真剣さは伝わっていない。無邪気な笑みを返してくる。  
でも、これで良い。この子はまだ背負わなくて良い。

その小さすぎる背中には重すぎる。でも、いつかは・・・誰かを・・・

・  
母親だけじゃない

友達も

いずれはできるであろう”ブラザー”も

いつか出会う、大切と思える女の子も

全てを守ると言える男に

できれば、地球を背負えるほどの男に・・・

最後は過剰かな？と顔の下で笑った。

最後にもう一度二人の顔を見る。

妻は今にも泣きだしそうだが、気丈にふるまう。

もう片方は、純真な笑顔で送り出そうとしてくれていた。

「行ってくる！」

それを忘れない。

改めて誓いを立て、玄関のドアを開けた。

自分達3人の集合写真を片手に・・・

父親がドアを開けると、まぶしすぎる光が差し込む  
真っ白だ。いや、そこに何かはある。けど、見えない。

なぜなら、まぶしすぎるから。

光を放っているのは外にあるお日様ではない。

目の前にいる。

その大きな背中が憧れだ。

大好きで、尊敬している父親の物だ。

今の彼に尊敬と言う単語は分からないだろう。

それを知るのもう少し先だ。けど、その感情はもう宿っていた。

自分にとって、一番のヒーロー。

そのたくましい背中を見送った。

いつもどおりに、毎朝繰り返し返していたそれが、今日は特別なのは知っている。

けれど、何も不安は無い。

なぜなら、彼の父はヒーローなのだから。

憧れのヒーローが負ける道理などない。

そう彼は信じていた。

だから、いつもと同じだ。

いつもと同じく父を見送った。

それがこの家の、いつもの光景だった。



## 第零話・旅立ち（後書き）

いかがだったでしょうか？原作とは違うOPにしてみました。

感想&アドバイスをいただけたら嬉しいです。  
待っています！

## 第一話・キズナプロジェクト（前書き）

ここからが原作のプロローグとなります。  
短い・・・

小説と言えるかすら微妙。

## 第一話・キズナプロジェクト

その年は、人類にとって歓喜に満ちた年であり、哀惜にさらされた年だった。

世界最高の技術を持つ、NAXAが世界に世紀の発表を行ったからだ。

地球外生命体の存在を確認した

人類が宇宙に足を運べるようになって、2000年。

夢、幻とされていた物が現実になったのだ。

そして、星河博士が発明した、“ブラザーバンドシステム”をその惑星に向かって送信し、コンタクトを取る計画が立ち上がった。

キズナプロジェクト

人類の夢を託された宇宙ステーション『絆』は地球の軌道外に飛び出し、長い未知なる冒険へと旅立った。

しかし、その数ヶ月後だった。人類の夢は簡単に碎かれた。『絆』が消息を絶ったからだ。

NAXAは総力を挙げ『絆』の捜索を行った。

捜索開始からさらに数カ月がたったとき、世界中の人々の夢を乗せた『絆』の一部が二ホン海に落下。

これを機に、NAXAは捜索を断念。

キズナプロジェクトの永久凍結と、乗組員全員の殉職を発表した。

その中に、星川大吾の名前が記されていたのを、少年は昨日のように覚えている。

## 第一話・キズナプロジェクト（後書き）

今回は世界観説明ですね？

一章はこのような内容が多くなります、

## 第二話・星河スバル（前書き）

前回は短かったので、次を投稿します。

追記：キャラを誤認していたため、一部を編集し直しました。

## 第二話・星河スバル

そこは3年前とはあまり変わらない。ここは都会から少し離れた郊外だ。

観光名所と言ったら、NAXAに引けを取らない技術力を持つ天地研究所くらい。

それも、この町からちょっと離れている。

自然は前よりも少なくなっただかもしれない。

けど、あの緑のある公園と、綺麗な川は健在だ。

あの有名な宇宙飛行士であり、科学者だった彼がこのコダマタウンを見たら、

変わっていないかと安堵の声を漏らすだろう。

しかし、それが来ることは永遠にない。

その彼が住んでいた家では、一人の男が機械をいじくっていた。

その隣では、まだ若さの残る一人の女性が心配そうに覗きこんでいる。

男はちょっと小太りで、帽子から覗いている髪が八方に広がっている。

いじくっているのはテレビだ。壁に取り付けられたそれを慣れた手つきで分解している。

「これが原因か」

小さな部品を手に取り、器用に交換していく。

それが終われば残りはあつという間だ。動作確認を終え、組み立てなおした。

「修理完了ですよ。あかねさん。」

「ありがとう、天地君。」

「いえいえ、これぐらいなんてことないですよ。」

あかねと呼ばれた女性は、直してくれた男性に礼をいう。

愛想の良い言葉を返し、天地は立ちあがる。

そのとき、テレビのそばに飾られている写真が眼に入る。

あの日の朝、一人の男が手にして行った物と同じだ。

すぐそばにいる女性が映っている。その隣に筋肉質な男性が一人。

そして、二人に挟まれるように幼い少年が一人。

この家に住んでいた家族3人の写真だ。

悪気があったわけではないが、その男性を見て、表情が曇ってしま  
う。

これは誰にも攻めることはできない。相手が相手なのだから。

「大吾先輩が消息を絶って・・・もう3年なんですね？」

「・・・ええ・・・」

あかねも返事を返す。喉から絞り出したような悲しみがこもった声  
だ。

「すみません。あの時・・・僕達にもつと力があれば！」

温厚そうな彼とは思えない悔しさに満ちた低い声上がる。

当時NAXA職員であり、無力だった自分が許せなかった。

尊敬する先輩を救えなかった自責の念。いつまでたっても晴れない。

「NAXAは、天地君達は全力を尽くしてくれたんでしょう？仕方  
なかったのよ・・・」



世界最高の技術力を持ち、組織としてもトップレベルのNAXAですら手に負えなかったのだ。

誰にも彼を、夫をはじめとする乗組員達を救うことなどできなかった。

そう、自分に言い聞かせてきた。少なくとも、彼らを恨むことなどできない。

大吾の仲間であり、仲間を失って悲しみに暮れていた彼らを攻めることなど、

あかねには到底できなかった。

暗くなつていく話題を変えるように、天地は拳を開き、声の調子を元に戻した。

「そう言えば、お子さんは今日から5年生でしたよね？」

写真の真ん中に映っている少年を見ながら思いついた話題だ。けど、それもあまり良い話題ではないことを天地は思い出した。

「相変わらず、学校には行っていないのよ。」

そうだったと心中で自分を責めた。

「無理もないですよ。大好きだった、尊敬していた父親が眼の前からいなくなつてしまつたんですから。」

あえて、亡くしたという言葉は使わなかった。

多分、今もこの家のどこかにいる少年にフォローを入れる。

でも、これは本心から来るものだった。

大人である自分たちですら、この事実には耐えられなかった。

自分も嘘だつづばやき、涙を流したのを覚えている。

それを、当時8歳だった少年に強いることなど誰にもできない。

「勉強の方は、通信教育や”ナビ”のティーチャーマンのおかげで何とかなってるんだけど・・・」

機械いじりや宇宙の勉強の方を優先しているのよ。  
宇宙飛行士になって、父さんを探しに行くんだって・・・」

天地は下唇を噛んだ。ひたむきな純粹さが逆に悲しかった。

ガチャリ

不意にドアが開く。リビングに入ってきた少年に二人の視線が集まる。

後ろ髪が逆立ち、アンテナのようになっていた茶色い髪の少年だった。

長袖の赤いシャツの手元はリング状に広がっている。最近の服の流行だろうか？

その服の真ん中あたりでは、星の形をしたペンダントが揺れている。たしか、星河大吾がつけていたものだ。父の遺品なのだろう。

膝あたりまでの紺色のズボンに、左腕には青色の”トランサー”をつけている。

ちよっと見かけない格好をしているが、比較的整っているその顔もあり、意外と似合っていた。

彼はこちらに見向きもせず、玄関へと歩みを進めていく。

「スバル。こっち来てご挨拶なさい。」

静かだが叱りを込めた母親の声に、立ち止まり、茶色い目をこちらに向ける。

別に気づかなかったわけではない。

気づかないわけが無い。

ただ、関わりたくなかっただけだ。

けど、母親の叱責を受ければ、ここは無視できなかつた。

横に立っている30前後と言ったその男に近づく。

「星河 スバルです。」

## 第二話・星河スバル（後書き）

感想&アドバイスをお待ちしております。

### 第三話・逃亡者（前書き）

一章がものすごく長くなります。  
いつになったら戦闘に入るのやら・・・

### 第三話・逃亡者

逃げる！

ただその言葉のみを自分に言い聞かせていた。

自己暗示と言うものなのかもしれない。

途方もない時間を、ただ駆け抜けることにのみ集中した。

長時間の移動による疲労も睡魔も全てを投げ捨てた。

そして、今も自分のはるか後ろにいる追跡者達への意識を完全に絶った。

逃げる。ただそれだけを果たす。

戦士としての誇りなどいらぬ。あるのはこの憎しみだけで良い。

そして、あの男の・・・友人の頼みを聞く。

本来ならあいつが使うはずだったこの道を自分が使っている。

運命という言葉があるなら、これがそうなのかもしれない。

だから、自分はこれを使った。行かなくてはならない。

あいつの故郷に。

そして、果たすんだ・・・

「星河スバル君か。僕は『天地 守』と言っただ。NAXAで君のお父さんの後輩だったんだよ。」

もうおじさんと呼べる年だろう。しかし、人を和ます不思議な魅力

がその笑顔に込められていた。

星河大吾は誰からも慕われる存在だったが、彼もその類だろう。性別問わず、この人と話していると誰もが笑みを返してしまっただ。

「……………」

一人だけ例外がいた。星河大吾の息子、星河スバルはただむっつりと黙っていた。

「じら、返事なさい！」

母、星河あかねの言葉にもだんまりだ。

「はは、緊張しているのかな？」

そうではないと分かっているが、彼はそうやって笑い飛ばした。今この少年に必要なのは、説教では無いということ。彼は理解していた。そんな事よりも、彼は持って来ていた鞆に手を入れる。

「そうそう、今日はお土産があるんだよ。これだ！」

とりだしたのは緑色のレンズに、白い枠でできたサングラス。まず、店頭では見かけないデザインだ。

「これはね、”ビジライザー” って言って……君のお父さん、大吾先輩が使っていたものなんだ。」

少年は少しだけ興味を示したみたいだ。眼で分かる。

「僕がNAXAを退社したときに、思い出にっってもらってきたものなんだ。

この前研究室の整理をしているときに見つけてね。僕よりも君が持っている方が

良いと思って持って来たんだ。」

そう言いながら、スバルの額にかけてくれた。

天井に向かって真つすぐに立つ後ろ髪と、ビジライザーが綺麗にマツチしていた。

「うん、似合ってる。使い道は分からないんだけど、ファッションに使うだけでも十分だよな？」

天地は笑って言っている。あかねも満足そうにそれを見ていた。スバルも左腕につけているトランサーを開く。

暗くなっている画面を鏡代わりにして確かめる。確かに、悪くはない。

そう思ったときに、あかねが口を開いた。

「ちょっとスバル！あなた、トランサーの電源入ってないじゃない！」

しゅしゅとスバルはこの時代の携帯端末の電源を入れた。ディスプレイに明りがともる。

「トランサーは通信手段や、情報収集だけじゃない。個人情報の証明にもなるのよ！」ブラザー”だって・・・」

「知ってるよ。それに、ブラザーなんていないし。いらないよ。」



機械に関しては自分の方が分かっていると、ぶっきらぼうに母親の言葉をさえぎる。

「それより、展望台に行ってくるから。」

もう用は無いだると、天地に一応の礼を言う。

「僕は、今は天地研究所っていうのを立ち上げているんだ。

宇宙についても詳しく研究している。良かったら遊びにおいでよ？」

適当な返事をして、赤色のブーツに足を突っ込み、スバルは玄関のドアを開けた。

3年間父がこの場所を通っていない。それを意識するとノブが少し重く感じた。

「今日はちょっとピリピリしていたけど・・・いつもあんな感じなの。」

大吾さんがいなくなってから、ずっと・・・」

天地は黙って聞いていた。別段気を悪くしたわけではない。

彼はこの程度のことでは気分を損ねるような器の小さい男ではない。

ただ、今のこの家族が悲しかった。尊敬していた先輩の奥さんと子供さんだ。

「ダメよね？前に進まなきゃって、分かっているのに・・・」

3年間ずっと、私達の時間は止まったままなのよ・・・」

この二人を目に入れると、胸が痛い。返す言葉一つ、思いつけなかった。

そして、そんな自分にまた情けなさを感じていた。

「見えた！」

間違いない。あいつが言っていた通りだ。

周りの星々とは違う。その青さは生命の輝きを、眼も眩まんばかりに放っていた。

黒を主に染められたその世界において、荒っぽい自分ですらその惑星に神々しささえ感じてしまう。

「あれが・・・地球！」

あそこがあいつの故郷。そして、やつの矛先にあるものだ。

「思い通りにはさせねえぞ・・・」

無理やり抑え込んでいた疲労も睡魔もどこかに消えていた。加速する。見えた目的地に向かって。

そして、その残虐さを秘めた爪を巻き込むように、拳を握った。

「俺は、必ず果たして見せるぞ！復讐をな！」

### 第三話・逃亡者（後書き）

スバルがちょっとキャラが違うように思った方もいらっしゃるでしょう。

あまり気にしない方向でお願いします。

母親にあんな態度は無いですよ？

感想&アドバイスを待っています。

面白かったの一言でも良いんです！励みになります！

よろしく願います。

#### 第四話・三人組（前書き）

作品説明にも書いてありますが、

『原作を知らない方にも楽しんでもらいたい』

その目標を立てて、この作品を書いております。

そのため、今回は用語説明が多くなります。

原作を知っている方にはちよつと読むのが辛いかもしれませんが、  
復習程度に考えていただければ助かります。

## 第四話・三人組

インターネット。それは人類の英知の結晶。・・・だった。そうだったのは200年ほど前の話。

時の英雄であり、優秀な科学者だった光熱斗博士の理論を元に、今はそれに代わる物が世界中に駆け廻らされていた。

### 電波

有線のインターネットと違い、無線で使用できるこれは、半無限に伸ばすことができる。

世界中に張り巡らされた電波は、情報ネットワークの多様化と高性能化に大きく貢献し、様々な電子機器の操作と、それぞれの専門分野をこなす疑似人格プログラム、“ナビ”の制御に使われ、世界の基盤を支えている。

そして、その電波は地球の周りを回っている三つの人工衛星。ペガサス、レオ、ドラゴンによって管理されている。

この三つが今の地球を支えていると言っても過言ではない。

公園の隅っこに設置された自動販売機が見えた。

様々な冷たいジュースや暖冷に分けられたコーヒーなどが並べられている。

この自動販売機も電波と繋がっており、温度のコントロールや売り上げデータの送信に利用されている。

その前を通り過ぎようとした直後に、それはビービーと嫌な音を立てた。

「故障？いや、電波ウイルスだな？」

機械オタクなスバルにはすぐに故障の原因が分かった。

電波ウイルス。3年ほど前に突如出現し、

この便利な電波で支えられた世界の妨げをするようになったお邪魔虫だ。

「バトルカード キヤノン！」

この時代の携帯端末、トランサーに大砲のような絵がプリントされたカードを通す。

バトルカード。ウイルスを退治するために作られたデータだ。

データがトランサーに読みこまれる。

トランサーから電波を放ち、目の前で騒ぐ機械にさっきのデータを送信した。

とたんに不快な音は止み、おとなしくなった。

正常に動き出したことと、ウイルスをデリートしたことを再確認し、ちよつと満足した様子だった。

「さてと、展望台に行こう。」

辺りが順調に暗くなってきている。星がちらつき始めた空模様を見て、足を速めた。

展望台の入口が見えてきたとき、ちょうど良い天気だとつぶやいた。雲も月も見えない。絶好の天体観測日和だ。

「これなら、父さんを・・・」

淡い期待を持つが、すぐに首を横に振る。  
大きすぎる期待を持って、それが裏切られたら・・・  
それがこの少年の考え方だ。さっさと入口をくぐるうとする。

「ちよつと待ちなさい！」

甲高い声が静かな夜に響いた。

「あなたが星河スバル君ね？」

聞いたことのない声に自分の名前を呼ばれた。  
振り返ると、妙な三人組がこっちに近づいてきていた。

先頭に立って歩いてくるのは自分と同じくらいの年齢の女の子だ。  
蛇を思わせるようなきつい目をしている。

それ以上に目を引くのが、その金色の髪型だ。  
どうやってセットしているのだろう。

後ろ髪を綺麗に二つの縦ロールにしており、二つのドリルがぶら下がっているように見える。

先ほどの声と口調からすると、声をかけたのはこの女の子だろう。  
その両脇を二人の男の子が固めている。

片方は・・・中学生ぐらいだろうか？見上げるような身長と、負けずと飛びでたお腹に目が行く。

逆隣には、小学校低学年の子がいる。身長からすると、多分2、3年生だろう。大きいメガネが特徴的だ。

腰巾着つばいその二人は見事なまでに対称的だった。  
そんな子分を連れた女の子は、スバルの前まで来るとどこか優雅さを感じさせる歩みを止める。

近くで見ると、自分よりも少し身長が高い。

この態度と最初に声をかけた時の命令口調から高圧的な女のようにだ。  
威圧感のある目が射抜いてくる。

「あなたが、私のクラスの不登校児ね？」

私は白金ルナ。あなたのクラスの学級委員長よ。

こっちは『同じクラス』の牛島ゴン太と最小院キザマロ。」

なんと3人とも自分と同じ小学5年生だった。

そのことに驚きながらも、目の前の学級委員長に目をやる。

めんどくさい。眼でそれを全力で表現してやる。

「おいこら！何か言えよモヤシ！」

ちよつと低い声でゴン太という肥満児が言う。

スバルの線の細い体格と堅過ぎて治らない寝癖を、

細長いモヤシとそれから生えているひよろつとした毛をかけたらしい。

見かけと違って頭の回転は良いのだろうか？

「せつかく委員長が声をかけてくださっているのに！」

隣のちつちゃい奴がキーキーと声を上げる。こっちは女の子と間違えそうなくらい声が高い。

どこまでも対称的な子分その1とその2だ。

「なんのよう？」

次は声も交えて表現する。めんどくさいと。

「明日から学校に来なさい！」

「・・・ハア！？」



なんか命令された。初対面の人にだ。  
多分、今日一番となる大声を上げてしまう。

「私はね！何事もパーフェクトじゃなきゃ気が済まないの！  
その私が学級委員長を務めるクラスに欠員がいるなんて許せないの！  
って言うわけで、明日から学校に来なさい。」

無茶苦茶だ。自分勝手にもほどがある。  
どうやら最初の認識は間違っていたようだ。それ以上だった。  
いつの時代のお嬢様かと疑ってしまう。

「嫌だよ。ほつといて。」

「なんだとこのモヤシ！」

「委員長がせっかく誘ってくださいっているんですよ！」

それしか言えないのか？この二人は。  
ギヤーギヤー騒ぐ二人をルナは抑えた。

「と言うわけで、明日から来なさい。」

こっちの言うことには一切聞く耳持たないらしい。

「僕に関わらないで」

この三人とは関わらない方が良く。なにより、本当にめんどくさい。  
そう判断し、逃げるように展望台の階段を駆け上がった。

「星河スバル・・・」

「一筋縄ではいかなみたいですね？」

ようやく小さい方、キザマロが眼鏡を上げながら別の言葉を口にした。

「どつするんだよ、委員長？」

こっちもようやく別の台詞が出た。

どうやら、モーとしか言えない牛よりは知能があるようだ。

「とりあえず、今日は引き下がりましたよう？」

そのとき、最小院キザマロの眼鏡がキュピーンと光を放った。

「そうです！今日学校で習った”ブラザー”の宿題を送りましょう！？」

「なるほど！」ブラザー”に興味を持ってくれれば、あの子も友達欲しさに学校に来てくれるかもしれないわね！」

「はあ？どついうことだ？」

前言撤回。やっぱり牛島ゴン太の知能は低かった。

そんなデカブツはほっといて、白金ルナは小さいほうの子分と相談を始めていた。

#### 第四話・三人組（後書き）

ここで、しっかりと謝罪と言いつきをしておきます。

ルナ、ゴン太、キザマロが好きで、気を悪くした方々、すいませんでした。

いや、私はこの三人大好きですよ！

けど、途中まではこの三人ギャグ担当じゃないですか？

と言うわけで、文章で散々けなしました。

途中からはかつこよく見えるように書いて行きたいです。

その時は、キザマロが書きにくそうなので、しっかりと書いてあげたいな。

感想&アドバイスお待ちしております。

『面白かった』『読んでます』『がんばってください』

こんな一言だけでも良いのです。私達作者には励みになります。

返信は必ずさせていただきます。

どうぞ、よろしく願います。

## 第五話・出会い（前書き）

今回もちょっと説明があります。

そして、やっつっつっつと物語が進み始めます！

## 第五話・出会い

あと少しだ

長い旅だった

どれぐらい駆けていただろうか

やつらはどこまで来ている

そんな考えが頭に浮かんでくる。

それは、自分に余裕が出てきたということだろう。

目的地となる惑星の人工衛星のそばを通る。

ペガサスの形をしたオブジェを取り付けたそれに軽く目をやり、すぐに目的地を見直した。

安堵の息が漏れる。だが、すぐに後ろを振り返る。

大丈夫だ。

まだ誰も来ていない。

・・・行こう、休んでいる場合ではない。

「そうさ、ここで俺は果たして見せるんだ。待っているよ・・・」

自分の体内に隠したその存在を確認し、牙をかみしめ、再び宙を駆けはじめる。

青の光になったそれは、惑星の一点へと吸い込まれていった。

階段を上がりきると、ちょっとした広場に出た。

きれいに並べられた花壇には黄を主とした花々が咲いている。

その隣には、年代物の機関車が一台、途中で切れたレールの上に乗っかっている。

これは一切使用されていない。

この町では空中を少し浮いて走るバスが主流だ。

そのため、展示品として置かれている。

「あゝ、めんどくさかった」

3人組をまき、ほっと一息ついた。

「行きたくないよ。学校なんて」

学校に行ったら・・・

そう考えた時に、ピリリと左腕の青い機械がアラームを鳴らす。

ディスプレイが、メールが来ていることを知らせていた。

開いてみる。

「ゲッ！」

送り主の覧に書かれているこの名前は・・・自分が先ほどのでかいやつ、

『牛島ゴン太』程度の知能でなければ、自分の記憶は正しいことになる。

言うまでもなく自分はその程度ではないことを確信し、中身を開いた。

音声メールから高い声が発せられる。

「今日学校で”ブラザー”について教わったの。宿題もあるわ。明日までにやっつけてきなさい。」

私がこの音声メールで自動で説明をし・・・」

ブチッ

すぐにキャンセルキーを連打して消した。冗談じゃない。

あの傲慢委員長、白金ルナの音声を聞きながら宿題なんてやってられない。

メールをすぐにゴミ箱に移動させた。

無駄に容量がでかい。予想以上にかかる時間にいらだちすら感じた。何よりも・・・

「それぐらい知ってるよ。誰が”ブラザーバンド”を作ったと思ってるのさ」

”ブラザー”。それはこの世界で親友の中の親友を意味する言葉だ。そして、これに類似する言葉が”ブラザーバンド”だ。

信頼できる相手の呼称が”ブラザー”なら。その者と結ぶ絆が”ブラザーバンド”だ。

これは『本当に相手を信じられる』。そういう絆を感じた者同士で結ぶ物だ。

一人一台持っている、互いの携帯端末、トランサーを通じてそれは結ばれる。

結んだ相手はトランサーのリストに載せられ、相手の個人情報を見ることがだってできる。

そうして、互いの絆を視覚化することにより、信頼をより強固なものとするのが目的だ。

今は世界中で使用されている。

これを作ったのは、スバルの父、星河大吾だ。

彼は、電波ネットワーク理論を作った光熱斗博士のもう一つの理論をもとに、これを完成させた。

だからスバルは人一倍このシステムについて詳しくかった。でも、彼個人にとっては無用のものだ。

「絆なんて・・・ブラザーなんて、いらない」

一人が良い

あんな思いをするのなら・・・

完全に辺りは夜になった。

予想通りだ。月も雲もない。気温と気圧も最高と言って良いだろう。澄んだ星空のおかげで、肉眼でも遠い星を見ることができた。

「父さん。今日はカシオペア座がきれいに見えるよ」

今もこのどこかに父がいる。

彼はそう信じていた。彼が愚かなのではない。どうしても、彼にはそう思えない。

「今日さ、天地さんって人が来たよ。父さんの後輩だって言ったよ。」

・・・それとさ、その時、母さんとケンカしちゃったんだ」



喧嘩なんて言えるほどの物ではない。

ただ、ちよつと母にきつい口をきいてしまっただけだ。

けど、女の身一つで、3年間自分を育ててくれた母に対する自責の念があつた。

「帰つたら、ちゃんと謝らなきゃね・・・ごめんね、父さん。

あの時、僕が代わりに母さんを守るって言ったのに」

父が去つた時の朝を思い出す。

あの時の自分は幼すぎた。父の言葉の意味を理解していない自分は安請け合ひした。

けど、父は託してくれた。自分の信念を。

だから、父に代わって自分が・・・

「けど、僕は・・・父さんみたいになれないよ。

・・・あ、それとね。その天地さんって人が、ビジライザーって物をお土産にくれたんだ」

気持ちを切り替えて、一方的に語る話題を変える。でも、声のトーンもその表情もずっと暗いままだ。

「何に使うのか分からないって言ってたけど、何に使うものなの？これをかけたら・・・父さんを見つけれられる？」

額にかけたビジライザーをゆっくりとかける。

耳の上にかかる圧迫感がちよつと嫌だった。

眼前に広がるのは・・・ビジライザーのレンズ色が加わつた夜の世界だ。

「そんなわけないよね？」

分かり切っていた結果に落胆する。

「ねえ、父さん・・・今どこにいるの？母さんも、僕も・・・会いたいよ。父さん」

ピーッ！ピーッ！

「・・・またメール？」

またトランサーが鳴った。

気乗りはしないが、開いてみる。

同時に、暗かった表情が大きく変化した。

「・・・え？父さんの・・・アクセスシグナル!？」

目を疑ったが、間違いなかった。

トランサーに表示されていたのは、父のトランサーが発する信号だ。

「まさか、父さん？つて、なんか強くなってる!？」

アラーム音どんどん大きくなり、それに合わせて小刻みになる。

最早アラームではなく警報だ。

同時に表示される数値が上がって行く。

あり得ない現象に頭が追いつかない。

ビジュライザーを取ることすら忘れ、情報を集めようとする本能が眼と首をあちこちに向ける。

「何!?! なんなの!?!」

けど、肝心の場所には注意が行かなかった。彼は気づいていなかった。頭上に近づいてくる青い光に。それはまっすぐにスバルに向かってくる。気配に気づき彼が上を仰いだときは遅かった。青が眼前を支配していた。

「うわあああああああ！！！」

声を上げるより早く、それはスバルの正面から激突した。体中に青い筋がバチバチと走る。周りが見えない。手足の感覚もない。白だ。何もない純白の空間に放り出される。頭がそれを整理する前に、体は地面にたたきつけられていた。触覚が戻っていることを確かめるより早く、聴覚が反応した。

「ここが・・・地球か・・・」

## 第五話・出会い（後書き）

やっつと、物語と二人の運命が動き始めました。

スバルと母親の喧嘩はこの作品のオリジナルです。

でも、オリジナル展開と言うほどの物じゃあないです。  
ちよつとしたアレンジです。

感想&アドバイスよろしくお願いします。

## 第六話・ウォーロック(前書き)

もう、さっさと次投稿しちゃいます！

さあ、どんどんストックが無くなって行くぞw

## 第六話・ウォーロック

体の感覚が戻っていることを確認した。

手は動く、足も動く、首も動く。

そつと目を開け、声がした方に動かした。

「ぎゃあああああああああああああ!!!」

ドリル委員長のわがままを目の当たりにして、確かにスバルは大声を出した。

その日一番の叫びだと自覚した。しかし、その宣言は撤回しなければならぬ。

今はそれをはるかに超える声だった。

「おばけええええええええええ!!!」

出た! ついに! 出た! 出た! 出会ってしまった!

ニンジン以上に苦手な物に、この世で最も恐ろしい者に出会ってしまった。

11年間の人生において、最も大きい絶叫だったと自負出来る。

多分、今の自分はムンクの叫びと言う名画とそっくりだっただろう。恐怖の象徴は、青を基本とし、そこから緑色の波打つ何かで体が構成されている。

スバルは確信した。魂だ! 幽霊だ! 犬かライオンかよく分からないが、多分動物の幽霊だ。

「お前、俺が見えるのか?」

「しゃべったああああ!!!」

その動物の幽霊が話しかけてきた。自分でも驚くスピードで後ろに飛びのいた。ガンと背中が金属にぶつかり、手すりが悲鳴を上げた。多分、自分かもう少し成長していたら、これを突き破ってまっ逆さまだっただろう。

「おかしいな、電波の体をした俺は、地球人には見えないはず・・・」  
顎をさするようなくさで気がついた。その手に付いた爪に。それは緑で構成されている。この幽霊の容姿からしたら別に普通だろう。

しかし、その形が問題だった。熊を思わせるほど大きく、鋭かった。触れるだけで切れてしまいそうだ。刃渡りは包丁以上かもしれない。スバルの脳内が危険信号を発した。幽霊は人の生き胆を食らう。特に子供のをだ。色々異説はあるだろうが、スバルはそう信じていた。この動物の幽霊には獲物を狩って喰らうための、爪と牙が付いている。

そして、今ここにいる人は自分だけだ。しかも、幽霊の大好物の子供だ。

そこまで考えるのに、おそらく2秒もかからなかっただろう。

逃げるという選択肢を一瞬で選択した。

生命体が持つ、生存本能がなした結果なのかもしれない。

すぐに展望台の出入り口を確認するため、全神経を視覚に集中させ、逃げ道を探すことに全力を尽くした。

そして、ようやく気付く。

「な、なにあれ!？」

空に幾筋もの道が見えた。天の川ではない。もっと低いところにそれは敷かれている。見たことのない形をしたオレンジ色だ。何者かの手によって整備されたようにも見える。

「夢・・・そう！これは夢だよ！」

現実逃避。誰もが一度は通ってしまう道だ。

一気に頭に流れ込んできた未知なる情報に、彼の脳と精神はその道を選んだ。

さっきからずっとかけているビジライザーをとり、目をこすった。

「あ、ああ・・・消えた・・・良かった・・・」

しかし、少年の賢い頭はある仮説を立ててしまった。

夢ではなく、ビジライザーが原因ではないか？

そう思ってしまうと、試さずにはいられないのがスバルの性質だ。

止めておけという本能に逆らい、恐る恐るもう一度かけて見る。

・・・目の前には・・・

「また出たああああ！！！」

本日四回目の悲鳴。しかも、あの謎の道々も復活していた。

「なるほどな、その眼鏡は電波を見ることができなのか。俺が見えるのもそのためか。」

半泣きになっているスバルに対し、その青い幽霊は冷静に分析していた。



「なんで？さっきまで・・・これをかけても、何も見えなかったのに！」

「俺との接触で本来の機能を取り戻した・・・そんなところだろうか？」

人を襲うはずの、今すぐにも、その牙と爪で自分を喰らうはずの幽霊が親切に解説してくれた。

それはスバルの『恐怖で曲がりまくった幽霊の概念』から大きく逸脱している。

彼の謎がさらに深まって行く。

「き、君は誰なの？」

「俺か？俺はウォーロックだ。『ロック』と呼んでくれ」

なんか気安い幽霊だ。失礼な感想がスバルの頭に浮かんだ。

「FM星から来た宇宙人だ。まあ、俺から見ればお前らが宇宙人なわけだが」

「・・・え？幽霊じゃないの？」

「なんだ？ユウレイって？」

幽霊と呼ぶことすら失礼だったようだ。

自称宇宙人をマジマジと観察する。いつの間にか、怖れよりも好奇心がスバルを支配していた。

「あのさ・・・どうなってるの？電波がどっこっつって・・・」

「俺の体は電波でできているんだ。本来なら、お前ら地球人には見えないはずなんだがな」

ウォーロックつと名乗った青い宇宙人は、スバルがかけているビジライザーを指さした。

「その緑色の眼鏡のおかげだろうな。多分、それをかけると電波世界を見ることができるところだろうよ。」

あれはウェブロード。電波でできた道だ。あれが束になって出来上がった世界が電波世界だ」

続いて、先ほどのオレンジ色を指さした。良く見ると、道はもつとたくさんあった。

それは自分たちの頭上だけでなく、ここ展望台全体に張り巡らされていた。

そこから、すぐそばにあるコダマ小学校や、コダマタウン全体。そして、遠くに見える天地研究所にまで伸びている。

「これが、今の世界を支えている、電波の世界？」

今の情報社会の基盤を構成する世界が目の前にある。科学に強い興味を持つスバルにとっては、神秘的で貴重な体験だった。

「理解できたか、星河スバル？」

落ち着いてきた気持ちがまた大きく撥ねた。

「なんで僕の名前を知ってるの!？」

「聞いたんだよ。宇宙で出会った地球人にな。周波数があいつとそっくりだ」

あっけらかんと答えられた。

グルグル。グルグルとスバルの思考が回る。

自分の名前を知っている。

一日中家にいる彼の名を知っている。そんな人はこの町でもあまりいない。

にも関わらず、宇宙にいる地球人で、自分を知っている人物。一人しか思いつかなかった。

「もしかして、父さん！」

たまらず、グイッとロックに顔を近づけた。

「どこにいるの！？ねえ、父さんを知ってるんでしょう！父さんはどこにいるの！？」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「うわ！」

彼の質問はさえぎられた。聞いたこともない大きな音に。たまらず耳をふさいだ。

「ちっ！もう来やがったか！」

恐る恐る目を開き、ウォーロックの視線の先をみた。

「……ええ！？」

## 第六話・ウォーロック（後書き）

はい、まだ戦闘に入りません。

今回はギャグっぽく書きたかったのですが、そっちに力入れ過ぎてしまった。

次回もまた説明が入ったりします。

感想&アドバイス待っています。

## 第七話・電波変換（前書き）

やっつと、電波変換します。

もつちよつと進行を早くしたいな。

## 第七話・電波変換

黒い物体が動いていた。

一目でわかった。広場に展示されていた機関車だ。

さっきまであったはずのレールの上に目をやると、やっぱり機関車はいなくなっていた。

疑うべくもなく、今動いているそれが、飾られていた奴だ。

「なんで？動かないはずなのに！」

「FM星から放たれた電波ウィルスのせいだ。あいつら、あれを町に突っ込ますつもりみたいだな。」

嘘でしょ！と叫んだ。

古い乗り物ではあるが、質量はある。

それがスピードをつけて町中に突っ込んだら・・・

簡単な物理法則だ。大惨事は免れない。

「と、止めなきゃ！母さんが危ない！」

「止める方法は一つしかないぞ？」

「もしかして、ウィルスのデリート？」

「ああ。」

「分かった！」

「あ、おい！」

手を伸ばすウォーロックに構わず、階段を飛び降りるように駆け下りた。

ウィルス退治なら自信がある。今日もここに来るまでに自動販売機のウィルスを倒したのだから。

機関車のそばまで行き、トランサーを構える。

「バトルカード、ヒートボール！」

赤い球が書かれたカードを読み込み、機関車に送信した。

「これで・・・え？」

これで機関車は止まる。そう確信していた。

しかし、それは裏切られ、予想外の展開が起きる。

機関車が大きくUターンし、先端をスバルへと向けた。

「う、うわっ！」

慌ててまた階段を駆けのぼった。さっきと逆だ。巻き戻した。

どうやら先ほどよりも強いウイルスがいるようだ。

もしかしたら、単純に感染しているウイルスの量が多いのかもしれない。

「どうしよう・・・止まんないよ・・・」

機関車はこの段差を登れない。階段のすぐ下で獲物を見失ったかのように動いている。

だが、町へと降りる階段はそこまで段差が無い。

もしかしたら、あの機関車でも降りれるかもしれない。

このままだと、機関車が町に向かうのも時間の問題だ。

「嫌だよ！まだ母さんに謝っていないんだよ！」

家を出るときのやり取りが脳裏をよぎる。怒ってはいなかったが、悲しそうな母の目。

自分が情けないせいだと分かっている。けど、どうしても学校に行く勇気が出ない。

だから、せめてそれ以外の場所で悲しませなくなかったのに・・・謝りたいのに。

「おい、スバル!」

さっきの宇宙人だ。ウォーロックがそばに来て話しかけてくる。

「おふくろさんを助けたいんだよな? なら、手を貸せ!」

具体的な指示は無い。

しかし、母親を救える方法があるのなら・・・それを彼が知っているのなら・・・

「何をすれば良いの?」

「お前の体を貸せ!」

「・・・え?」

「異星人の俺は、地球じゃあ本来の力を発揮できない。だから、地球人と融合する必要がある。」

「だからだ、星河スバル。お前の体を貸してくれ!」

「・・・えと、融合って?」

「迷っている暇は無いぞ?」

見ると、機関車はスバルをあきらめて、町へと方向転換しようとしていた。

手段とか言っけいられる状況ではないのは彼にも理解できた。

「やるよ! 僕の力が必要なら、使ってよ!」

「よく言った!」



そう言った直後、ロックの体は青い光に変わり、トランサーの中に入って行った。

「ちょ、何してんの!？」

ディスプレイにウォーロックの姿が映っている。

「このままトランサーを頭上に掲げる!そして、こっぴうんだ・・・」

まだ何をすればいいのかよく分からない。言われた言葉もちょっと恥ずかしい。

けど、状況は待つてくれない。

もう一度機関車を見て、スバルはウォーロックの言うとおりにした。ウォーロックが入ったトランサーを、それをつけた左手を、めいっばい星空に突きつけた。

「電波変換 星河スバル オン・エア!」

スバルの体を青い光が包み込んだ。

体が重量を無くし、足が地面から離れるのをかるつじて察することができた。

その青い光がウォーロックだということを理解するのに、時間はか

からなかった。

頭から足まで。文字通り全身をウォーロックの光が覆う。

いきなり青い光が消えたと思った時には、体は投げ出されていた。しかし、すぐに地面に足がつく。

今いる場所は・・・さつきと同じだ。

「・・・なにこの格好!？」

ようやく彼は自分の体の違和感に気付いた。

赤かった服は青一色に染まっていた。いや、もう来ていた服の名残が一切ない。

あるとすれば、父の遺品である星型のペンダントが胸に模様となつてくっついているくらいだ。

鎧と言えばいいのだろうか。それとも、SF映画とかに出てくる戦闘スーツだろうか。

口では説明できない格好していた。とにかく恥ずかしいという気持ち湧きあがってくる。

あの宇宙人に文句を言ってやろうと、まだトランサーにいるはずのロックを見ようと、左腕を持ち上げ・・・

「げええええええええええ!!」

「うるせえぞ!!」

左手の先にウォーロックの頭が付いていた。しかもそれが文句を言った。

言葉を発する自分の左手に顔をしかめる。

「なんだよこれ!聞いてないよ!!」

「さつきから叫ぶことしかできねえのかよ!!」

確かに、今日のスバルは久しぶりに叫んでばかりだ。だが、文句は言えないだろう。これだけの異常事態が続いて起きたら、叫ばない方がおかしい。宇宙人に出会っただけでも驚きなのに、そいつと融合とかしてしまっているだから。

「簡単に説明するぞ！お前は電波の体を持つ俺と融合した。だから、今のお前の体も電波だ。電波体っていやぁ良いか？」

「良いか？と聞いたが、スバルが何かを言う前に、ウォーロックは続けて口を開く。

「とりあえず、今から二人であの黒い奴の中にいるウィルスを倒すぞ？」

「えっ？君が戦うんじゃないの？」

スバルが聞いたのは体を貸すとかいう部分だけだ。

「バカ野郎！俺はお前に力を貸してやるだけだ。戦うのはお前だよ！」

「嘘でしょう！」

「お前の体だろうが！」

スバルは3年間学校に通っていない。つまり、ろくな喧嘩経験すらない。

「詐欺だ！こんなの詐欺だよ！」

「グダグダ言っつな！良いのか？おふくろさんを助けるんだらう！？」

「う……」

また機関車を見た。段差のある階段を、安全に、ゆっくりと降りようとしているみたいだった。

「もっ!」

こうなったらやけくそだった。

「どうすればいいの!?!」

「あの黒い奴を制御しているコンピュータ・・・電脳世界ってやつがあるはずだ。そこに入るぞ?」

「え?入るの?機械の中に?」

言葉の意味が理解できない。

ハテナマークがスバルの頭上に掲げられる。

「ああ、今のお前は俺と同じ電波の体だからな。可能だ。」

スバルは夕方の自動販売機の事を思い出した。

トランサーから電波でデータを送信した。

おそらく、あれと同じ要領なのだろう。

「どうやるの?」

「どうやるのさ!」

「え?わああああ!」

左腕・・・ロックに引っ張られるように、スバルの体が細くしぼんだ。

機関車の中に吸い込まれている。と、なんとか理解できた。

また地面の感触だ。今日は何回も空中に体が浮いてるなと思い、顔を上げる。  
と、景色が一変していた。

「なに？この世界？」

水色の世界の中に、浮島のようにポツンとある地面。  
辺りでは電気信号が生まれては消えていくような渦がいくつも確認できた。

良く見ると、その世界は波を打っているように見える。色もゆっくりとではあるが変わっているようだ。

不安定さを感じさせる。これが電波で出来上がった世界なのだろうか。

けど、この世界において、自分が立っている足場だけはしっかりと形を保っていた。

強く踏むと、しっかりと反発力を返してくれる。

その大地の上には色々とか何か物体が配置されている。

これが何なのか良く分からないが、何か目的や役目があるから配置されているのだろう。

「前を見るー！」

「え？」

左腕にくっついているロックに言われて前を向く。

「うわー！」

びっくりし、横っ跳びにそれを避けた。

ガツンとたたきつける音と、えぐられた地面の破片が飛ぶ。

見ると、黄色いヘルメットをかぶった黒い顔に、ペンギンのような足をとりつけた  
簡単なフォームをした奴が、つるはしを振りおろしていた。

「なに、これ!？」

「そいつが電波ウイルスだ!」

ひと際声を荒げ、ウォーロックは叫んだ。

「戦え!スバル!」

## 第七話・電波変換（後書き）

次回でようやく、ようやく戦闘に入ります。

感想&アドバイス、よろしくお願ひします。  
いつまでも待ってます。

## 第八話・初戦闘（前書き）

ようやく戦闘です。

ウィルスの台詞はいらなかったかな？

ちなみに、初戦闘なのでグダグダな戦いになっています。



## 第八話・初戦闘

どこか愛嬌も感じさせるそいつは鳴き声のような物を上げ、ヒョコツと一歩足を踏み出した。

「ひっ！」

スバルは一步引く。

それを見て、寄り添いたいがように再び詰め寄ってくる。

「ひっっ！」

さっきと逆側の足を引く。

またしても黄色いウィルスが近づいてくる。

「ひっっっ！！」

一歩一歩踏み出すそれに合わせるようにスバルは足を下げていく。

「おい！メットリオ程度でビビるな！」

「だって、怖いんだもん！」

一見かわいいとも言えるそれを指さし、怖いと言うスバルの姿はかなり滑稽だ。

子犬を見て、怖いと泣きさげぶ幼い子供のそれと重ねてしまう。

だが、彼はさっきのつるはし攻撃を忘れたわけではない。

あれをいきなりされたらかわいいと感じる方が難しいかもしれない。そんなやり取りをウォーロックと交わしているうちに、そのメット

リオがスピードを上げた。  
ピョンピョンと両足でジャンプし、距離を詰めてくる。  
左手に意識を向けていたスバルは反応が遅れる。  
慌てて視線を戻すと、大きく飛びあがったそいつは眼前でつるはしを振り上げていた。

「わあああああ！」

「むごっ！」

後ろに下げている片手と、前に出しているもう片方の手。

とっさに手を出すとしたら、どっちの手だろう？

一瞬が運命を左右するこの状況で二択を迫られたら・・・  
大半の者は前に出している方の手と応えるだろう。

だからスバルも同じだった。前に出していて、なおかつ胸元に構えるようになっていたその手を出した。

良い具合にそのパンチはメットリオに炸裂した。同時に、ウォーロックが声を上げる。

そう、スバルが出したのはボクシングで言うところの左ストレート。  
ウォーロックは顔をいきなりたたきつけられた感じになる。

綺麗なウォーロックパンチを食らい、吹き飛んだメットリオは地面にたたきつけられ、

体は粒子へと分解されて跡形もなく消滅していった。

おそらく、データが破壊され、バラバラになって電波の海に溶けて行ったのだろう。

「てめ・・・いきなり何すんだ！」

「だって、しょうが無いじゃん！怖いもん！」

「ち・・・まあ、良い」

今のは油断していた自分が悪い。力を貸すと言った以上、これぐら

いは仕方ない。  
さっきの敵が消滅した場所に目をやると、釣られて見たスバルはあつと驚いた。

「やった！倒した！」

「まだだ！」

「え？」

ウォーロックが見ていた場所は違った。その少し隣だ。その場所で地面が盛り上がる。

中からピヨコンと、さっきと同じ奴が出てきた。それに続くように、周りから・・・もう二か所。やはり地の下からメットリオが顔をのぞかせた。

「また出たよ！どうしよう!？」

「落ち着け！いちいち慌てるな！俺を前に出せ！」

「前？何？」

「あゝ、つたく、こつだよ！」

あたふたするスバルにうつとうしさを感じる。言葉より行動する方が早いと判断を下した。

スバルの左手がウォーロックの意志で持ちあがる。まっすぐにのばされた手の先には・・・新しいメットリオ達の内、一番前にいる一体がいる。

「食らえ！」

ウォーロックの口に緑色の光が集まる。

それをスバルが確認した途端、それは放たれた。

光の弾丸だ。標的のメットリオを吹き飛ばし、バラバラの粒子へと

変えた。

「すごい！何これ！」

「俺達が電波変換した時の力だ。まあ、言うなら『ロックバスター』ってところか？」

それより、今ので使い方は分かっただろうか？なら、やっちなえ！」

説明もほどほどにして、スバルに促した。

これならいける！スバルはウォーロックが付いた左手を構え、標準を合わせる。

「いつけえ！」

連続して放たれたそれは残りのメットリオ達に降り注ぐ。

彼らをデリートするには威力が充分すぎた。

またたく間に電波の海の一部と化していった。

「こ、今度こそ・・・やったよね！？」

もう戦うのはうんざり。その気持ちを表情と口調であらわにする。

「・・・いや、もうちょっと踏ん張ってもらうことになりそうだぜ？周りを見て見る」

左手にとりついた彼の言葉を聞き、慌てて辺りを見渡す。

気配に気づいて振り返ると、真後ろから一体のメットリオが近づいてきていた。

いや、一体じゃない。加えてまだ数体以上いる。

とっさに左手を構えようとすると、右からポコッと音がした。

こちらからもメットリオだ。しかも、まだ穴がいくつか穴を穿とう

としているのが確認できた。

そして、反対側からも。数が半端ではない。

20は超えようという目に囲まれる。いくら一つの個体は弱くても、これだけ数が増えると怖い。

一体がつるはしを地面にたたきつけた。

そこから生まれた衝撃が、地面を伝って波を描き、スバルに襲いかかってきた。

予想外の遠距離攻撃にとっさに体が動かない。

避けなきゃ！

そう頭が判断したときには、もうそれに吹き飛ばされていた。

「うわあああ！！！！」

地面に背中から叩きつけられた。

苦しい。背中から受けた衝撃は胸をも突き抜けた。息を吸うだけで体の中が痛い。

「立て！来るぞ！」

「え、ええ！？」

見ると、数体のメットリオがさっきと同じようにつるはしを振りおろそうとしていた。

「うわ！うわああ！！！」

安全圏と思っていた場所からロックバスターを撃つ。それだけで終わる予定だった。

けど、今いる場所は安全では無くなった。

攻撃にさらされる。またさっきの痛みが来る。しかも、今度はその数倍だ。

頭を抱え、体を丸めこんだ。  
それでも、相手は無慈悲に攻撃を開始した。いや、もともと感情すらないのだろう。  
無機質に行われたそれは数本の筋となり、スバルとウォーロックに襲いかかってくる。

「くそが！」

今度も動いたのはウォーロックだった。

自分の顔を無理やり前に出した。

迫りくる波の束を前に、自分の体の緑の光を大きく広げ、硬質化した。

それは六角形の盾となり、スバルとウォーロックの前に構築された。メットリオ達の攻撃はそれに遮られる。

激しい衝撃に地面がえぐられ、轟音が響く。粉状になった地面の破片が二人を覆った。

だが、二人を隠していたそれはすぐに薄れ、徐々に晴れていく。そこには無傷のスバルがうずくまっていた。

「・・・あれ？僕は・・・って、なにっ!？」

「俺が盾になっただ。有効に使えよ？」

「あ、ありがとう。けど、こんな便利なものがあるなら、最初に言っつてよ！」

「防げる攻撃には限界があるんだよ。それに、お前ならむやみに使っつて、俺を危険にさらしそうだったんでな」

確かにと自覚してしまう。

「それより、あの大群をどうするかだな」

改めて見るとやる気を削がれる数だ。

「ねえ、逃げようよ・・・」

さつきはウォーロックがシールドを張ってくれたおかげで助かった。しかし、次はどうか分からない。今更だが、命がけなのだと認識した。

死

このときに初めてこの文字が浮かんだ。

指が、足が、がくがくと小刻みに揺れ始めた。力が入らない。

「何言つてやがる、戦うんだろう?」

「嫌だよ!怖いもん!死にたくないよ!なんで僕がこんなことしなきゃいけないんだよ!

僕は逃げ・・・ブアッ!」

言いきる前に、自分の左手が飛んできた。顔が横に跳ぶ。

今は顔しかないウォーロックが、スバルの体を使って殴ったのだ。頭に星が飛ぶ。

「お前の親父は、星河大吾はそんな感じじゃなかったぜ」

「・・・父さん?」

やっぱり、この宇宙人は父さんのことを知っている。

「少なくとも、お前見たいに泣き言は口にしなかった。おふくろさんを助けるんじゃないのか?」

痛い。殴られた左頬がじゃない。ウォーロックの言葉が痛かった。  
あの時に託された父の言葉と今日の母とのやり取りを思い出し、か  
みしめた。

守らなきや

父さんとの約束を

謝らなきや

ちゃんと母さんに

そして

教えてもらわなきや

「勝つたら教えてよ？父さんのこと」

雰囲気が変わった。それをウォーロックは感じ取った。

ゆっくりとスバルは立ち上がる。

ちよつと腫れた頬が放つ熱にも、歯を食いしばった。

まだ涙は残っているけれど、距離を詰めてくる大群をしっかりと見据えた。

「へえ、やりやあできるじゃないか。まあ、親父さんのことに関し



「ちやあ、考えといてやるわ」  
「約束だよ？」

逃げちゃだめだ

僕はこいつらに

勝つ！

## 第八話・初戦闘（後書き）

はい、この戦闘を盛り上げるために、母親との喧嘩設定を加えました。

戦闘は次回で終わらせます。

あと少して一章も終わりです。

もうちょっとだけ、お付き合いください。

感想&アドバイスをいただけたら幸いです。  
よろしく願います。

## 第九話・初勝利（前書き）

今回、ようやくバトルカードを使用します。

## 第九話・初勝利

まずは深呼吸だ。吸い込めるだけの空気を肺に流しこむ。その量が増えるにつれて、胸の痛みが増していく。限界まで痛くなった胸をなでおろし、全てを吐いた。渦を巻いていた脳内は幾分か落ち着きを取り戻していた。そして、もう一度奴らを見据えて、数を確認する……12体だ。

「ロックバスターでいける？」

「倒しきれない。ってわけじゃないが、面倒だな。」

何か別の攻撃手段が欲しい。

スバルはもう一度深呼吸を行う。焦ってはいけない。

敵はまだ攻撃してくるそぶりを見せない。

綺麗に行進しているだけだ。

にしても、無機質さを感じさせる表情だ。

まあ、ウイルスなのだから仕方ない。

「……ウイルス？」

そう、忘れていた。相手にしているのは電波ウイルス。

今日倒した自動販売機にいたやつと同じだ。

ならば……ごそごそと腰に手をやった。

「ロック、これ使えないかな？」

とりだしたそれを左手の前に持って来る。

「こいつは……バトルカードってやつか？」

どうやらある程度は知っているらしい。星河大吾から聞いたのだからか？

「ナイスだ！それを貸せ！」

貸せと言うが早いか、スバルのカードに食いついた。牙の一部が右手の指をかすめる。

「いつつ！」

自分の左手に噛まれるという、人類史上初であり、最後となる経験をした。全然うれしくないが。

一方、バトルカードを啜えたウォーロックはそれを体内に吸収した。その途端、彼の体はカードのデータを読み取り始めた。封じられていたプログラムが解放される。螺旋状に連なつた無数の記号群が駆け巡る。

「力があふれてくる・・・こいつは、良いぞ！」

こみあげてくるそれを抑えることなく解放した。緑と青の光がウォーロックから発せられ、一瞬で消える。しかし、そこにあつた左手は、一瞬前とはまるで違つていた。

「おおっ！！」

先ほどのカードに描かれていた物と同じだ。小さい銃口と丸いふくらみをもつたフォルム。敵が目の前にいると言つのに、それに見とれてしまった。

「さあ、俺達の新しい力だ！使え！」

「うん！バトルカード、エアスプレッド！」

姿を変えたウォーロックを眼前に構え、放った。

それは先頭のメットリオに当たった。

そこを中心に周りに爆発が伝わって行く。

密集していたこいつらはひとたまりもなかった。

悲鳴を上げて消滅していく。

「もう一発かましてやれ！」

「うん！」

二発目、三発目、弾切れになるまで、一心に撃ち続ける。

巻き込まれたメットリオ達は次々と消し飛んでいく。

それから逃れた、生き残った数体がつるはしを地面にたたきつけた。蛇のように唸るそれが、ショックウェーブが、二人に迫る。

今度は正面からだけじゃない。前方、右、左の三方向からだ。

奴らが狙ったのか、偶然なのかは分からないが、綺麗な挟み打ちになっっていた。

ウォーロックのシールドで防げるのは前方のみ。防ぎきれない。

だが、スバルは慌てなかった。冷静にこの状況にあったカードを選びだす。

「バトルカード、バリア！」

右手から投げたそれに再びウォーロックが食いつく。

途端に、スバルを青い球状の光が包んだ。

飛んできた攻撃を代わりに吸収し、消滅する。

「どンドン行こうぜ！」

「うん！後は・・・3体だね！」

そこに、もう少年のおびえはない。  
倒すべき相手を睨みつける。戦士の顔だ。

「バトルカード ヒートボム！」

先ほどと同じく、ウォーロックがカードを吸収する。  
5本の指を持つ右手に野球ボールくらいの赤い玉が握られる。  
それを左にいる一体に投げつける。

「バトルカード キャノン！」

次はウォーロックの姿が角ばった、鈍重なフォルムへと変わる。  
大きい砲口を右側のメットリオに付きつけ、放った。  
二種類の爆発音が同時になる。  
両脇の二体が消えたことを気配で確認し、ウォーロックの合図で目の前の一体に駆けだした。

「後一体！」

まっすぐに相手に向かっていく。ぐんぐんと距離が近くなっていく。  
迷うことなく、相手はその武器を頭上に持ち上げる。

「スバル、突っ込め！」

「分かった！」

今さっき会ったばかりの得体のしれない宇宙人。

けど、いつの間にか、ウォーロックの言葉にはもう疑いを持たなかった。

「バトルカード ソード！」

ウォーロックの体が大きく変化する。

緑色の鋭い剣だ。左の手首から先に剣が取り付けられた形になる。

「俺の突進力は半端じゃないぜ？お前の力の一部になってるはずだ。たたき切っちまえ！」

「うおおお！」

鉄塊が振り下ろされようとしている。

それよりも早く！地面をひときわ強く蹴飛ばした。

「これで、終わりだ！」

左手をがむしゃらに、けど大きくなぎ払った。

最期のメットリオはピシリと綺麗な切れ目にそって割れる。

二つに分かれたそれは、例外にもれず粒子に変化していった。

「はあ、はあ……」

右、左、恐る恐ると後ろを振り返り、最後に足元、頭上と目に映る範囲を変えていく。

「もう……いないよね？」

「ああ、もう敵の周波数は感じない。終わったな。こいつも止まっ  
たみたいだぜ。」

言われて思い出した。ここは暴走した機関車のコンピュータの中だ。  
ウォーロックの言葉からするとそれも収まったらしい。



「ねえ、被害とかは・・・」

「町への被害は0だ。まだ階段を下りる途中だったみたいだぜ？」

「そっか・・・良かった。」

母親を救いたい。これが一番の理由だった。けど、それ以外の誰かが傷つくことのも嫌だった。

その結果にほっと一息をついた。

## 第九話・初勝利（後書き）

戦闘が下手糞だった？

文句畜生上等！罵ってください！

素敵なアドバイスになります。

今後の参考にさせていただきます。

感想&アドバイス待っています。

どうぞ、よろしく願います。

## 第十話・コンビ結成(前書き)

今回で、や~~~~~と、原作のプロローグが終わります！  
なんでこんな長くなったかな？

## 第十話・コンビ結成

戦いを終えたスバルにはまだもう一仕事残っていた。機関車を元に戻すということだ。

階段の途中にこんな大きな物を置かれたら邪魔だ。なにより危ない。誰かに任せるわけにもいかず、結局スバル達が元に戻すしかなかった。

もう仕事帰りのサラリーマンの姿すら見かけない。

そんな寂しい道を、スバルは疲れた足取りで歩いて行く。

「ほつといても良かったんじゃないのか？」

「ダメだよ。これで誰かが怪我とかしたら、僕たちのせいじゃん」

スバルはまじめで責任感が強い子だ。

仕事をやり遂げた彼の顔は満足そうだった。

「にしても、お前って意外と格闘センスあるじゃねえか。気に入ったぜ。」

これからしばらくはお前のところで世話になることにするわ。

そうしたら、また暴れられそうだしな！」

ウォーロックの爆弾発言で、それは一気に失われる。

緩んでいた頬の筋肉がアングリと硬直する。

「え？ちよ、嫌だよ！それって、またあんな目にあうってことでしよう！？」

今日の委員長と言い、この宇宙人と言い、自分勝手が多い。

いや、自分がそうやって押されてしまう性格なのかもしれない。

「なんだ。さっきあれだけやる気だったじゃねえか。」

『うおおお!』とか『これで、終わりだ!』とか言ってたくせによ  
「イワナイデ、ハズカシイヨ」

別に誰かが見ていたわけではない。

けど、あの時のテンションに任せた自分の行動と台詞を思い出すと  
むずがゆいようだ。

顔を赤くしてその場に座り込んでしまった。

「とにかく、僕はもう戦いたくない!それに『電波変換』もね。あ  
んな恥ずカシイカツコウ・・・」

変身した時のことを思い出し、またうずくまってしまつう。

「じゃあ、良いんだな。親父さんのこと分からなくても」

「ちょ、話が違つよ!」

「じゃあな」

「待つて!」

これはウォーロックの作戦勝ちだ。

ずるいと言えばずるいが、賢いとも言えるだろう。

「・・・分かつたよ、もう・・・」

「おう!じゃあ、よろしくな!」

ピュンとトランサーの中に入って行つた。

「俺は普段からこうやって、ここに居候させてもらつてぜ。」

まあ、どっち道、地球人には見えないんだけどな」

居候と言う自覚はあるらしい。  
返事の代わりにため息を返し、家路を急いだ。

「スバル！今何時だと思ってるの！？」

当たり前だが、母のあかねから雷を落とされた。  
もうとつくに天地は帰っているので、遠慮が一切ない。

「ごめん、母さん！星が綺麗で見とれてたんだ！」

機械&宇宙オタクの自分にとっては、もっともらしい言い訳をした。  
実際、星を眺めていた時間なんて、左腕のトラブルメーカーと出会う前までのわずかな時間だけだ。  
潔い謝罪ぶりにあかねも矛を丸く収めてくれた。

「さあ、ご飯温めなおすから、お風呂入ってきちゃいなさい」

「うん。後・・・」

「なあに？」

普段の優しい母の声だ。

3年前もこの声とあの言葉に救われたことを思い出し、  
スバルはずっと思っていたことを口にした。

「今日、天地さんが来ていた時・・・あんな嫌な態度をとって、ごめんなさい」

もう一度、頭を深く下げた。

「ちゃんと謝れたわね？偉いわよ」

頭を包み込んでくれる温もりに首がちよっとくすぐったく感じた。

お風呂も遅い夕食も済ませ、スバルは自分の部屋に戻った。

疲れてはいたが、まだあの戦闘の興奮が残っている。

寝付けない。満足に見れなかった今日の星空を、自分の天体望遠鏡で覗いていた。

展望台の時とはちよっと気候が変わったらしい。少し雲がかかり、見れない部分が出ていた。でも、彼にとっては充分だった。

「ねえ、起きてる？」

「ああ」

レンズから目を離し、そばに置いていたビジライザーをかけた。見えるようになった居候宇宙人が側にいた。

いつの間にか、トランサーから出てきていたらしい。

「寝ないのか？」

「うん。ちよっと寝付けなくてね」

「そうか。早く寝た方が良くぞ？そこは宇宙人も地球人も変わらねえはずだ」

「うん。そうだね」

少しのばかりの沈黙が流れる。それをスバルが断ち切った。

「ねえ、教えてよ。父さんのこと」

「そのうちな。ふあゝあ、俺は寝るぜ？疲れてんだ」

スバルには話していないが、あの場所から地球に来るまでの間、ウォーロックは一睡もしていない。それどころか、小休止すらしていない。

それに加えて、地球人との電波変換に、ウイルスとの戦闘だ。

疲労が溜まっていないわけが無い。

スバルの文句の言葉も無視して、再びトランサーに戻ってしまう。こうなるとスバルにはどうしようもない。がっくりと肩を落とす。そして、改めて胸に誓う。いつか、父の話を聞くと。

「ふあ、ああああ！」

急に睡魔が襲ってきた。

先ほどのウォーロックの言葉を思い出し、逆らうことをやめて、ベッドへと潜り込んだ。

すぐに、スースーと寝息が上がる。

その様子をトランサーからウォーロックはうかがっていた。再び中から出てきた彼は、スバルの寝顔を覗きこんだ。

似ている

素直な感想だった。あいつと違って、臆病で消極的だが、顔も、周波数も、堅い髪質もよく似ている。



言えない

あのことは、今は絶対に言えない。

この少年にあれを話せば・・・彼は持ちこたえられない。

それは、あいつとの約束を破ることになる。

まあ、約束と言っても、一方的に押しつけられたような物だ。

だから、あまり守る気はない。それに、自分にはやるべきことがある。

だが・・・彼の願いの言葉が脳裏を過ぎる。

「悪いな」

夜が生み出す影に隠され、感情は読みとれない。

誰に、何に謝っているのか。それは彼にしから分らない。

ただ、謝罪の一言を述べて、自身もトランサーで眠りに着いた。

静かな夜だった。

耳を澄ませば、川のせせらぎや木々のざわめきが聴き取れそうなどだ。

この夜が嵐の前の静けさだと言うことは誰も知らない。

とある宇宙人を除いて、誰も知らない。

けど、そんな彼すら知らない。

この二人の出会いが

この星のたどる運命を

そして、互いの運命を大きく変えていくということ

第一章・出会い（完）

## 第十話・コンビ結成（後書き）

やっと、原作のプロローグが終わりました。

こんな長い物はプロローグ言わないな。

もうちょっと、原作展開をいじくって、アレンジしよつか考え中です。

感想&アドバイス待ってます！

## 第十一話・君には分からない(前書き)

第一章が終わり、ここからメインストーリーになります。  
では、ぜひぜひじっくり読んでください。

## 第十一話・君には分からない

朝だ。

いつも通りのお日様が、コダマタウンの一日の始まりを祝福している。

照らされる舗装された道を多数の足が踏んで行く。

仕事に向かう会社員、制服を身にまとい、友人と談話している中学生が見える。

開店の準備を始めていた店の主人が、顔見知りにお決まりのあいさつをしている。

その手前には自転車に乗って学校に向かう高校生の姿も見えた。

この中で、なにより一番目立つのは小学生達だ。

疲れを最も知らない世代と言えばこの子達だろう。

徹夜でレポートを仕上げたのだろうか？眠そうな目を擦って歩いて行く大学生の隣を、

鬼ごっこをしながら走り抜けていく。そして、この後も学校で遊ぶのだ。

その姿は元気がそのまま形になったかのようだ。

しかし、この家の少年は違った。

同じ世代の子供達が最寄りの学校へと通うこの景色に加わっていない。

本来はとっくに着替えているはずのパジャマのまま、ベッドにもぐりこんでいる。

昨日はあんなことがあったため、寝るのが遅かった。

だから、窓から差し込んでくる光を遮るように、布団を頭まで持ち上げる。

あのピンと立った髪の毛がはみ出ているのはご愛嬌だ。

だが、夜ふかししてしようが、いなかろうが、結果は同じだっただろう。

ドアをノックをする音がする。返事をする前にノブが回された。入ってきたのは母親だ。簡単な化粧と小さい鞆を手に持っている。

「スバル。お母さん、パートに行ってくるわね？朝と昼のご飯はできてるから」

「・・・うん」

眠い目を閉じながら生返事をする。

これがいつものこの時間の、この家庭の絵だ。母と息子のやり取りだ。

外からわずかに聞こえてくる子供達の無邪気な声。

壁一枚向こうにあるその世界が、永遠に遠い物に感じる。

「ねえ・・・スバル。そろそろ学校に行ってみない？」

あかねは窓から見える外の景色に目を向けた。

子供達の一人が意地悪をしているみたいだ。

友達の帽子を取り上げて追いかけてっこをしている。

別の子供は公園の側に立っているお店の中を覗き込んでいる。

近々開店予定のバトルカード専門ショップだ。

興味津々と、数人でポスターを見てはしゃいでいる。

「あなたには、友達が必要だと思っの」

黙っていた。布団を隠れ蓑にして、ばれないように体の向きを変え、母に背中を向ける。

本人は隠しているようだが、はみ出した髪の毛の向きが変わったの

ですぐに分かる。

それを理解したうえで、気付かないふりをして、あかねは続ける。

「友達ができたら、きっとあなたの世界も変わると思っの」

「無理はしなくていいわ。ただ・・・そろそろ、考えて見てほしいの」

背中を向けたからって、母の言葉が小さくなるわけじゃない。

だからと言って、堂々と仰向けになる度胸もない。

体を丸め、母の言葉をじっと聞いていた。

「じゃあ、行ってくるわね」

足音が遠ざかり、ドアが閉まる音がする。階段を下りる音も小さくなっていた。

「ごめんね、母さん・・・」

しばらくそのまま布団の温かさにくるまっていた。

しかし、一度冷めてしまった目と、もやがかかったような胸を抱えて眠る気にはなれなかった。

結局、数分後には体を起こしていた。

バス停までの道のりの途中、もう一度家を振り返る。

今頃、まだベッドの中だろうか。

すぐ隣を子供たちが走って行く。

あの輪の中に息子がいれば・・・

今、自分が彼に望むのはそれだけだ。

晴れ渡る空の下で、友達と一緒に学校に行く。

ただ、それだけで良いのだ。

今はその時ではないのかもしれない。

けれど、どうしても期待してしまう。

そこまで考えて、首を軽く横に振る。

「・・・何落ち込んでるの？今は私が、大吾さんの分まで、スバルを守らなきゃ行けないんだから」

大吾との約束を思い出し、バス停へと歩みを再開した。

太陽がそこそこ高い位置にまで来た。

ちょうど、ティーマンから出された今日のカリキュラムも終わった。

どうやら、学校の授業よりも進んでいるらしい。

いじくっていた機械のパーツ交換も終え、一休憩と窓まで足を運ぶ外はずいぶん静かになっており、道を行く人の数も種類も変わっていた。

そこから見えるのは散歩をしている老人や、犬を連れた主婦っぽいおばさん。

買い物へと出かける人の姿も見える。

誰かの家の前にはトラックが止まっている。郵便の配達か何かだろうか？



賑やかさは失せて、町は静かな時間を奏でていた。

「おい、良いのか？その学校とかに行かなくてよ」

朝からずっと黙っていたウォーロックが口を開いた。  
ビジライザーをかけていないため姿は見えない。

「・・・あれ？」

そう思っていると、ウォーロックが側にいた。  
ビジライザーはまだおでこの上だ。

「体の周波数を変えりゃあ、地球人にも見えるようにはなる。  
ちよつと疲れるし、目立つから、あまりしたくないんだがな」

丁寧に説明してくれた。ウォーロックの気持ちを察し、おでこのそ  
れをかけた。

すつと、周波数を変え、また普通では見えない体になる。

「なんか、お前ぐらいの子供が毎日行く場所なんだろう？」

ここに来て調べたのか？それとも、父から聞いたのか？  
少しは知っているようだった。

視線を隣から窓の向こうへと戻した。  
緑色が混じった景色だ。

「学校に行ったら、友達ができるかもしれないでしょ？」  
「それが嫌なのか？」

意外そうに尋ね返してきた。

「変だな。お前ら地球人は、友達とか、ブラザーとか、そういう絆つてもんを大切に作る生き物だと聞いたんだがな」

やはり情報源は大吾らしい。

「そうやって、大切と思える人ができるのが嫌なんだ。その人がいなくなる。僕は、それを想像しただけで・・・怖いんだ」

あの日を思い出す。

大好きだったたくましい背中は今も鮮明に覚えている。逆に、それがスバルの心に重くのしかかる。父親にはあの日以来一度も会えなかった。

「その人との絆が強くなれば強くなるほど、それを失った時の悲しみは大きくなるんだ。

だったら、大切な人なんて、最初からいない方が良いよ」

「ふ〜ん、そう言うもんなのかね？」

理解できないと言った感じにウォーロックは言葉を返した。

「君には分からないよ」

別段、なにかをこの宇宙人に期待したわけではない。だから、次の一言も何気なく口にした。

「ロックは大切な物を失ったことが無いからそう言えるんだよ」

沈黙。ウォーロックは何も返さなかった。

スバルはこの静けさを気にすることもなく、大して変化の無い景色をじっと眺めていた。

「そう見えるか？まあいいや」

昨日から今までと同じく、そっけない態度で彼はトランサーへと戻って行った。

## 第十一話・君には分からない（後書き）

今回は情景描写と心理描写にこだわってみました。

すれ違って行く3人を楽しんでいただけただけでしょうか？

感想&アドバイスをいただけたら幸いです。

## 第十二話・ウィルス人間（前書き）

今回はちょっと長いです。

「この時点じゃあ、このバトルカードまだ持ってないだろう！」  
って意見があると思いますが・・・

バトルに制限を設け、幅を狭めたくなかったので、無視しました。  
ご了承を。

## 第十二話・ウイルス人間

世界中に張り巡らされた電波。

それによって構成された道、ウェブロード。

オレンジ色のそのの上を青い影が歩いていた。

「昨日はゆっくり見れなかったけど・・・こんな世界なんだね？」

「新鮮だろ？」

スバルとウオーロックだ。電波変換し、今はあの恥ずかしい青い格好をしている。

この体は電波そのものだ。

よって、今のスバルは、本来なら歩くことのできないこの道の上を歩いていた。

「それにしても・・・」

改めて周りを見て見る。

「電波世界って、僕が想像していた世界とだいぶ違うな・・・」

電波は人間が作り出した『物』だ。そして、道具だ。道具は意志など持たない。

機械的に、ただただ人に利用され、人に尽くすものだからだ。

当然、電波世界もそのようなものだとスバルは考えていた。

目の前では色々な『者』がうごめいていた。

「メールハコバナキヤ、メールハコバナキヤ」

灰色の丸みを帯び、愛くるしさを含めたそいつは、体内に取り込んだメールアドレスを運んでいる様子だった。その隣を、トラックに目と手が付いたような奴が通りかかる。

「おう！あんたも運搬のお仕事かい！」

「ハイ、アナタモデスカ？」

「おうよ！まあ、こっちはコンビニの売上データだがな」

「ナラ、オモイデスネ？」

「まあな、だがおれっちの働きっぷりの見せ所よ！」

そんな会話を交わしている。

前者はデンパ君という存在らしく、後者は重いデータ運搬用のナビらしい。

辺りを見ると、何体ものデンパ君が忙しく動き回り、他の種類のナビ達もせわしなく仕事をしているようだった。中には仕事をさぼっているのだろう。

人間の生活を観察し、談笑している奴や、昼寝をしている奴までいる。

だが、そいつらはすぐに仕事仲間と思われるナビに見つかり、長い時間が始まっていた。

「・・・なんか・・・人間世界みたい・・・」

良く考えたらそうかもしれない。ナビ一体一体に人格がプログラムされているのだから。

彼らもまた生きていえるのだろうか。

「ところで、もう気は済んだ？僕、そろそろ作業に戻りたいんだけど」

いじくつていた機械の事を思い出す。  
人間の生活を見てみたいとわがままを言う居候宇宙人に無理やり付き合わされているのだ。

「うーん、おかしいな・・・」

「何が？」

「いや、気配がしたんだが・・・」

ウォーロックの言葉は悲鳴でかき消された。

電波世界の下に広がる人間界を見降ろすと、一台の車が暴走していた。

右往左往と蛇行運転をしている。

その近くでは、一人の男性が「俺の車が！」と叫んでいる。

良く見ると、その車の座席には誰もいない。

「故障？運転ナビの暴走？」

「スバル！行くぞ！」

「え？ええ！？」

スバルの疑問に回答が返ってくることは無く、昨日の機関車と同じく、

二人は車の電脳世界に吸い込まれていった。

そして、昨日と同じくあの足場に降り立った。その周りに電波の海がある。

昨日と同じだ。違うと言えば、海の色が赤いことぐらいだろう。

どうやら、電脳世界ごとに色が違うらしい。

観察もそこそこに、口から文句をはきだした。



「いきなりなんなのさ」

「こっちの台詞だ！」

「え？」

低い声に顔を上げると、凶悪そうなナビが立っていた。

車の操縦を担うと思われる装置から離れ、ドスドスと近づいてくる。黄土色のボディに、肩からはとげが生えている。黒いアイマスクをつけ、いかにも怪しそうだ。

「俺が盗んだ車に、いきなり入ってきやがって！こっしてやらあ！」  
拳を作り、足を速め、その右手を容赦なく振ってくる。

「うわー！」

かろうじてそれを避ける。

「戦え！そいつはナビじゃねえ！」

「じゃあ、何なの！？」

とりあえず、応戦するしかない。昨日の戦いを思い出し、左手を前に出す。

「ロックバスター！」

銃声と共にそのナビではない何か悲鳴を上げる。  
胸を射抜かれて宙を舞ったそいつは、そのまま地を滑っていく。

「くっそ、行け！サラマンダ！」

起き上がった相手の左手から、赤い光線が放射状となって地面に放たれる。

その光の中で何か徐々に形作られていく。

それを、ろくに観察する暇もなく、光線は止んで中のそれをあらわにした。

「なにあれ？」

「電波ウイルスだ！」

「あれもなの！？」

昨日の奴とは違う奴がそこにいた。蜥蜴みたいな姿に赤い色がつけられている。

サラマンダと呼ばれたウイルスが口を開いた。

「シールド！」

危険を感じ、スバルは左手の肘を相手に向けシールドを展開した。その直後に炎の柱が二人を包み込んだ。

シールドの上からでも感じる熱に身の毛がよだつ。

ウイルスの口から放たれたそれが途切れ、スバルも腕を下ろした。

「あぶなかつ・・・」

「らあ！！」

「ぐあー！」

隙を狙われた。細かい光の粒がスバルとウォーロックを打ち抜く。

「へっへっへっ！」

ウィルスを召喚したそいつの左手には、ガトリングのような銃が取り付けられていた。

してやったりと笑いながら、左手は光を放ち、銃から手に戻る。

しかし、二人との距離は遠い。つまり、態勢を立て直すチャンスだ。

「バトルカード　アイスメテオ！」

手をかざし、相手に振り下ろすように下げる。

頭上に複数個の氷塊が姿を現し、隕石となって一体と一匹に降り注ぐ。

「ギャアア！」

「ギイイイ！」

頭を抱えるそいつの隣で、召喚されたウィルスは消滅していった。

「よっしゃー！」

「属性勝ちだね？」

歓喜するロックに対し、スバルは冷静に分析していた。

ウィルスが持つ四属性に対応した攻撃だ。

水＞火＞木＞雷＞水

この法則はどれだけ強いウイルスでも逃れられない。無属性も含めれば五属性だが、無属性はどの属性の効果も受けない。それを熟知していたスバルは、さっきの火属性のウイルスに、水属性のアイスメテオで対抗したのだ。その効果がもたらす威力と結果はみでの通りだ。

「ねえ、あいつ何なの？」

攻撃を受けてよろけている、正体不明のそいつを指さす。

「ウイルスと電波変換した人間。いわば、ジャミンガーって奴だ。今の俺とお前と同じだ」

「え・・・人間なの？」

戦っている相手が人間。

その事実がスバルの胸を大きく揺らす。

自分は、人を傷付けている。ウイルスを消滅させるほどの攻撃を相手にしていたのだ。

「このくそガキが!!」

両手を握り拳にして襲いかかってくる。

右、左、右・・・

二つの手が交互に降ってくる。

「うわ、わ、わぁ!!」

大ぶりだ。軌道は簡単に読める。その途中に腕を出し、振り払うように捌く。

しかし、体格差が作り出す重い拳は、少しずつスバルの腕を浸食し

ていく。

ビリビリと、痛みが腕の動きを鈍くしていく。

このままでは生殺しだ。けど、スバルは反撃ができない。

もしかしたら、それで人の命を奪ってしまうかもしれない。

そう思うと、何もできない。

ただ、攻撃をしのぐしかできなかった。

「調子に……のんなぁ！」

「うごあつ！」

不意にスバルの左手が持ち上がり、ジャミンガーの顎を打ち抜いた。体が垂直に浮く。その間に相手とは逆方向に自分の体を跳躍した。

「あいつの意識はほぼウイルスそのものだ。だから、倒したとしても人間は無事だ」

「そ、そうなの？」

「ああ、だから遠慮はするな？分かったな！？」

「う、うん！」

父のことはなかなか話してくれないが、ウォーロックがバトルでいい加減な事を言った事は無い。

彼の言葉を信じ、意を固めた。

「逃げんな〜！」

ウイルス人間、ジャミンガーはまた起き上がり、右手を大きく振りかぶって突っ込んできた。

「逃げないよ！バトルカード スタンナツクル！」

スバルの右手が大きく変化し、黄色の巨大な拳になる。

「げえ！」

予想外の巨拳に驚くジャミンガーに、スバルは容赦なく右手を振り切った。

## 第十二話・ウィルス人間（後書き）

スバルがちょっと戦い慣れました。

まだ二回目で、早いと思うかもしれませんが、

前回みたいなグダグダ戦闘を毎回書くわけにもいきませんからね？

それに、もうすぐボス戦ですし・・・

感想&アドバイス、待ってます。

### 第十三話・ウォーロックの目的（前書き）

今回も長めです。

ストーリーの流れを良くするために、色々と説明を加えています。

・ 強引な流れと思つかもしれませんが、気にしないでいただければ・



### 第十三話・ウォーロックの目的

ぐったりとした顔をして、スバルは歩いていた。もう少ししたら町はオレンジ色に染まるだろう。

普段はその時間に展望台に向かうのだが、足は家へと向けていた。

ウイルスに取りつかれた人間、ジャミンガーは無事に倒した。それにより、とりついていていたウイルスは無事にデリートされ、後には生身の人間だけが倒れていた。

電脳世界に放り出されたその男をどうしようかと悩むスバルに、ウォーロックはほっとけと鼻を鳴らした。

説明によると、時間がたつと勝手に人間世界に戻るらしい。

一応気になって見守っていたが、ウォーロックの言うとおりだった。しかし、彼が車を盗もうとしていたのは事実。

事件の容疑者として、駆け付けたサテラポリスに連行されて行った。

「なんか、あのおじさんの頭変だったよね？アンテナみたいな頭につけてたし」

「いや、お前も人のこと言えないと思うぞ？」

鶏冠のようなスバルの髪を指差して言う。

「僕のこれは寝癖だよ。堅くてどうやっても治らないんだから、仕方ないよ」

「寝癖だったのかよ！」

すさまじすぎる寝癖にロックはちよつと驚いたみたいだった。

「ところで、ロック。さっきはウイルスだけが消えたけど・・・」

僕らが負けたら、君だけが消えちゃうの？」

心配そうにスバルはトランサーの中の住人を覗き込んだ。  
今のところ、父親の情報を持つ唯一の存在だ。  
なにより、昨日今日会ったばかりのそいつが、なぜか消えて良いな  
んて思えなかった。

「いや、それはない。その時はお前も消える」

ほっとしていいのか、緊張すればいいのか分からない答えだった。  
何とも言えない表情を返す。

「さっきの奴は、意識のほとんどをウイルスが支配していたからな  
人間は無事だった。

だが、俺らの場合は、互いの意識がしっかりとある。だから、やら  
れたら二人ともお陀仏だ」

「そうなんだ・・・」

どういう理論なのかと問おうとしたが、止めた。  
多分、理解できない範囲のことだろう。

「ねえ、そういえばロックはなんでこの地球に来たの？」

今更の疑問が浮かび上がった。

昨日は色々ありすぎた上に、父のことが気がかかりだったため、そ  
こまで気が回らなかったのだ。

少し黙ったのち、ロックは話し始めた。流石にこれについて口を閉  
ざすのは止めたようだ。

「俺は、俺が住んでいたFM星を裏切ったんだ。で、地球まで逃げ

て来たってわけだ」

「なんで裏切ったの？なんで地球に？」

ウォーロックは目と口を閉じ、スバルの視線から顔を反らした。

「ちょっと、ロック！父さんのこと教えてくれないなら、せめてここは教えてよ！」

しばらくだんまりを決め込んでいたが、ロックはスバルに向き直った。

「裏切ったのは、FM星王が憎いからだ。あいつをぶっ殺してやりたいからな。」

俺の最大の目的は奴への復讐だ。だが、今は無理だと判断し、ここまで逃げて来た。

逃亡先にはこの地球を選んだ。唯一、今も生命体の存在を確認している惑星だったからな」

あれ？とスバルは思った。何か胸に引つ掛かる。

さつきから、彼の言葉のどこかに・・・

しかし、別の疑問に気が向いてしまい、流してしまった。

「逃亡ってことは・・・もしかして、追手とか来る？」

「おう！」

「『おう！』じゃないよ！」

久々にふざけるなとスバルは怒鳴りたくなかった。

偶々そこに現れたウイルスを退治するぐらいならともかく、敵が意図的に自分達に襲いかかってくるというのだ。

偶然遭遇するのと、標的にされるのでは違いが大きすぎる。

「なんで僕が巻き込まれなきゃならないの！？嫌だよ！トランサーから出て行ってよ！！」

「どの道同じだぜ？F M星は地球を滅ぼそうとしているんだからな」

「ええええええええっ！？」

たった二つの文章の意味を理解するのに、スバルの良質な脳がフル回転した。

文章は簡単だが、現実として受け入れられなかったのだ。

「地球を滅ぼすだって！？」

「何を滅ぼすの？」

危険信号が体を駆け廻った。

自分の脳が鈍っていたわけでも、故障したわけでもないことにちょっと安心した。

嫌そうな表情を隠そうともせず、声の方向に顔を向けると、無意識に大きなため息が出た。

昨日の三人組だ。学級委員長のルナが、でかい子分のゴン太と、小さい子分のキザマロを連れている。

「学校に来ないで、ゲームでもしていたの？」

どうやら、都合の良いように誤解してくれたようだ。

さりげなくスバルはトランサーを閉じて、ロックの身を隠した。踵を返し、止めていた足をまた動かす。

この人達は無視する。昨日のやり取りでそう決めたのだ。

「ちょっと、何無視しているんです!？」

キザマロが高い声を上げる。

足の速度は緩めない。むしろ速める。

「ゴン太！」

続いて甲高い声が上がリ、どすどすと重い足音が近づいてきた。

振り返ろうとすると、それより早く体が斜めに突き飛ばされ、体の左側が持ち上げられた。

太い腕が襟を掴んでいる。

「おら、もやし!委員長を無視するって、どういっつもりだ!？」

「.....」

「黙ってんじゃねえよ!！」

スバルが黙秘をしている内に、ルナとキザマロも追いつき、やり取りを嫌な笑みで眺めている。

しかし、スバルは相変わらず顔をそむけて黙したままだ。ウォーロックがひそひそとスバルに声をかける。

「なんでやり返さねんだ？」

「ほっといたら良いんだよ。こんな奴ら」

これではまるでいじめられっ子だ。

トランサーの中でぎりぎりと言音がたつ。

ウォーロックの機嫌が悪いようだ。

そして、それはゴン太も同じだった。

腕を大きく動かし、顔を近づける。

「無視してんじゃねえぞ！もやしいためにして食ってやるっか!？」  
「……………」

無視。スバルの目は明後日を見ている。

「この！も……………」

「っち!」

「きやあ!」

ルナの悲鳴が上がる。キザマロの眼鏡の下では、大きく目が見開かれていた。

その先では、自分の3倍近くの体重があるであろうゴン太が倒れている。

「もやし……………いため……………て……………」

大の字になり、意識から解放されたように目がうるうるしている。それを見下ろすように、左拳を高く上げたスバルが立っていた。なぜか、一番驚いた顔をしている。

「い、ごめん！」

後ろから二つの声が聞こえる。

けど、それに振り返らずにただ地面を蹴ることに集中した。

息が切れそうになったところで、ようやく立ち止まった。

後ろを確認してみる。どうやらあいつらは追いかけていないようだ。

「なにしてるんだよ！ロック！」

「お前が悪いんだよ！一方的にやられるなんざ、かつこ悪いだろうが！」

「ほつといたら良いって言ったでしょ！」

「へっ、知らねえな！俺のいたFM星では、自分の身は自分で守るもんなんだよ！」

「あれが僕なりのやり方なんだよ！」

「あれで状況が良くなるわけねえだろ！戦わなきゃ何にも守れねえぞ！」

さっきのアップパーはウォーロックの物だ。ジャミンガーと戦っているときにやったものと同じだ。

大人しいスバルには彼の乱暴さが理解できない。頭が痛くなる。

話すと余計に痛くなりそうだ。口論をそこに終わらせる。

「……で、話の続きだけど、本当なの？」

「あ？……ああ、FM星人が地球人を滅ぼそうとしてるって話か？」

あり得ない単語が平然と返ってくる。

やっぱり本当だったとまた脳が悲痛に悶えた。

「今、FM星から地球滅亡計画の刺客達が向かって来ているはずだ。同時に、裏切り者の俺を殺すためにな」

「……ねえ、もしかして……僕に戦え……と？」

「そういうわけだ！ついでに復讐も手伝ってくれ。よろしくな、相棒！」

「誰が相棒だよ！嫌だよ、なんで僕が！？」

「良いんだぜ？親父の話は無かったことで……」

「……っああああああああ！！！」

ぐしゃぐしゃと髪をかきむしった。

しかし、この程度で彼の立派な寝癖は形を崩さない。

「止めよう！考える止めよう！」

一度リセットすることにした。

今日も非日常的なことがありすぎた。

でも、これだけは忘れなかった。

「今度、あの牛島君って人に謝らないと……」

マジマジとトランサーの先にある手のひらを眺めた。



一日の終わりの予鈴。

晴れの日に限り、それを太陽が人々に知らせてくれる。

夕方

白かった雲はそれ色に染まり、そばでは黒い翼が空に模様をつけている。

いつの時代でも、この国の、この光景は変わらない。

少なくとも、このコダマタウンではそうだ。

この景色の元、それぞれが自宅への道を歩いて行く。

ここに3人、帰宅を中断している者達がいる。

「どついうことかしら？」

赤黒いオーラが炎と化し、その二本の金色の束を持ち上げている。

ちょうど頭から飛び出たそれは角と錯覚してしまいそうだ。

「め、めんぼくねえ・・・」

肩をすくめ、目の前の、自分より小さな鬼を見れないで。

いや、オーラの大きさを身長にカウントするならば、相手の方がでかい。

彼の大きい体は幾分か小さく縮こまる。

それでも、その半分くらいの大ささしかないもう一人は、グンと距離を置いて、少女の後ろで小さい体をさらに小さくしている。

「ゴン太！あなたのそのでかい図体は何！？ただの飾り！？」

返事の代わりにびくりと首を肩にうずめた。

「あなた、弱いんだったらなんか修行でもしたら？」

『モヤイクレープ食べに行きたい』だなんてほざいてる場合かしら？」

今日、ゴン太が学校に持ってきた雑誌をペラペラとチラつかせる。最新グルメ10000件なんて文字が見える。

「あんな、もやしか青ネギみたいな奴に負けるなんて、あなたに何の取り柄があるの？」

「私がいなかったら、乱暴なだけの嫌われ者のくせに！分かってるの！？」

「う、うん・・・」

「今度あんな醜態をさらしたら、ブラザーを切るからね？」

「そ、そんな！」

「帰るわよ、キザマロ！」

「は、はいいい！」

ゴン太を置き去りにし、ルナはキザマロを連れて展望台の広場から去って行った。

途中でキザマロが足を止めたのだが、二人がそれに気づくことは無かった。

立ち去って行く二種類の足音を背中に受け、ただ茫然とゴン太は立ち尽くしていた。

夕方と夜の間。今はそんな時間だ。

あれからずっとゴン太はここで立っていた。

展望台から見えるのは空だけではない。視線を下げれば町々が見下ろされる。

もう、黒い鳥の姿も鳴き声もない。

夜に活動する虫達が起き出したのだろう。その声が代わりに、ひっそりと空気を震わせる。

でも、それに耳を傾ける気にはなれない。

大きなため息を吐き、手すりにもたれかかる。

ギシリと鈍い悲鳴が上がるが、さびてもいない限りは大丈夫だろう。

「俺があんなもやしに負けるなんて・・・もし、委員長に必要とされなくなったら・・・」

また、一人ぼっちになっちまう・・・」

委員長のわがままに連れまわされることが多いが、別段嫌じゃなかった。

乱暴者と称され、皆に避けられ、一人でいたころより、よっぽど良い。

なにより、一人だった自分に声をかけてくれたのは委員長だ。

キザマ口を含めた三人で遊びに行き、笑っていられた今日の時間が懐かしいと思えてしまう。

グスリという音を聞いている者は誰もいなかった。

「言い過ぎたかしら・・・ゴン太、落ち込んでないかしら？」

展望台からの帰路の途中、ルナがぼそりと口にした。

「委員長？」

「べ、別に心配しているわけじゃないわよ！

誰があいつの心配なんてするもんですか！

ただ、私が心配してあげなきゃ、誰が心配してあげるのよ？  
だから、心配してあげてるのよ！」

結局心配している。

しかし、さっきの怒りを思い出し、キザマロは口を紡いだ。  
代わりに、トランサーを使って何かを探し、ルナに見せる。

二人のやり取りはその場でしばらく続いた。

## 第十三話・ウォーロックの目的（後書き）

この三話で、今後のフラグを色々と立てました。  
まあ、回収しきれるかは分かりませんが・・・

感想&アドバイス、お待ちしております。

## 第十四話・夜の始まり（前書き）

アニメではレギュラー。ゲームでは微妙。

けど、明らかにスタッフに愛されているあの人が登場します。

まあ、顔見せ程度ですが。

## 第十四話・夜の始まり

ひどいありさまだ。

素直な感想と共に、大きく息を吐きだした。

頭をかくと、髪の間から生える白いアンテナがぐらぐらと揺れる。

一応言っておくと、これはヘッドギアのパーツであり、本当に頭皮から生えているわけではない。

その男の目の前には今は使われていないポストだったものがある。

今はただの鉄クズだ。

足は大きく湾曲し、体は半分からひしゃげ、残り半分はごろりと地に転がり落ちている。

その周りを彼の部下と思わしき者達が右へ左へとそれぞれの作業をしている。

「警部、科学捜査班からの報告が来ました」

現場に新しく部下が駆けよってくる。

トランサーの電波を使い、データを渡される。

それに目を通す。

「やはりな」

「何か分かりましたか？」

「このポスト、素手で壊されている」

部下は目を見開いた。あり得ないと。

「俺もあり得ないと思ったのだが・・・あの壊れ方は道具や機械で壊したのとは違う。」

色々な角度から力を加えられている。跡形も様々だ」

ただの事故なら、力は一方向からしか加わらない。道具を使えば、跡形は統一されるだろう。複数の道具を使っても、似たような跡形がいくつか残るはず。しかし、そんなものはほとんどない。

「しかも力任せだな。あの断面」

ポストの本体ともいえる、二つになってしまった箱を指差す。断面には統一性がまるでない。

ティッシュをびりつと引き裂いたような形だ。

「あれは無理やり二つに開いたってところだな」

障子をあけるようなしぐさを両手でやって見せる。

「でも、これができるなんて・・・」

「ああ、よっぽどの大男だろうな。それを踏まえて言う。人間の力じゃない」

「な、何かの間違いでは？」

「サテラポリスの科学捜査班はNAXAにも引けは取らん。事実だ」  
「なら、どう捜査するのです？この一連の事件」

トランサー内の写真をいくつか開き、部下に見せた。

「もう1週間ほど続いているこの事件だが・・・破壊されたものはすべてが赤いものだ。

これが唯一の共通点。今はこれしか手掛かりがない。これを中心にして調べていく」



敬礼を返す部下に行けと促し、サテラポリスの刑事は再び部下達への指示に回った。

夕陽の光を浴びるそれらから目が離せなかった。

頭を太い両手で挟み、ぶんぶんと横に振る。

スクツと立ち上がり、近くにあった四角い物に近づいた。

中身をひっくり返し、代わりにさっきの物々を放り込んだ。

そして、中身だったものを上に重ねるように詰めていく。

散らかっている部屋が片付いたわけではない。

しかし、彼はそれだけの作業で一息ついた。

続きをやるうとはしない。

どの道、作業を続けていても中断していた。

彼のトランサーが鳴りだしたからだ。

音声メールが、「遅刻よ」と文句を言ってくる。

玄関を出て、重い体を懸命に前に出す。

「俺は・・・委員長の役に立つんだ！」

辺りはもう暗い。

ちよつと星が綺麗に見える時間だろう。

しかし、この宇宙大好き少年は展望台を後にしていた。

いつもよりは早い時間だ。けれど、これぐらいが良い。

先日、あかねに怒られた事を思い出すと、これ以上外出する気にはなれなかった。

今はちよつと公園の中を歩いているところだ。

「まあ、良いよね？母さんに心配かけられないし。『赤い物破壊事件』って物騒な話もあるし」

「俺は物騒大歓迎だぜ！」

「止めてよ。ただでさえ、FM星人って厄介者がいるんだから」

「おい、俺のことか？別の奴らか？」

「さあね？」

今日も父のことは教えてはもらえなかった。  
なので、こつちもスルーしてやった。

「ところでよ、その事件、俺達で解決しないか？」

「嫌だよ。それに僕には関係ない。どうせ、サテラポリスが解決してくれるよ」

他人と関わりを持たない彼らしい意見だろう。

今日も捜査していた、アンテナ刑事を思い出しながら口にした。

サテラポリスは今の時代の特殊警察だ。エリートのみで構成されている。

だから、この事件も彼らがさっさと解決してくれるだろう。

「少なくとも、子供が出しゃばる必要はないよ」

「誰が子供かしら？」

「ゲエツー!!」

もはやおなじみとなった反応を返した。

相手はもちろん、学級委員長のルナだ。  
今日も綺麗な二本のドリルをぶら下げている。  
横にキザマロを連れて公園の敷地内に入ってくる。

「・・・なんのよう？白金さん・・・最小院君も・・・」

不愉快感を前面に出してやる。

「別に、あなたに用事は無いわよ。

私たちが用があるのは、『赤い物破壊事件』の犯人よ！」

「・・・犯人？」

スバルの質問に、待つてましたとキザマロの眼鏡が光る。

「ふっふっふっ、僕の発案です！委員長がこの事件を解決すれば・・・」

「そう！次期生徒会長は私の物！この私、白金ルナがコダマ小学校の頂点に君臨するのよ！」

「流石委員長！次期生徒会長は委員長しかいません！」

「オーホッホッホッホッホ！」

いつも携帯しているのだろうか？扇子を優雅に構えている。

公園の街灯をスポットライトとして使い、キザマロが横で紙吹雪を飛ばしている。

今更ながら、自分を学校に来させようとしている本当の理由も明らかになった。

冷めた目を彼らから反らす・・・と、もう一人のルナトリオのメンバーが近づいてきていた。

「ゴン太！何していたの、遅刻よ！」

不満を漏らす友人達にすまねえとだけ謝り、彼はスバルに憎悪で満たされた目を向けた。

しかし、それにルナは気づいていないようだった。

「あんたも来る？仲間に入れてあげるわよ？」

「遠慮しておくよ」

そっけなくそう答え、ゴン太の前にたつと、頭を下げた。

「牛島君、この前は殴ってごめん」

心からの謝罪を言い残し、家路へと走り出した。

「もう・・・休み明けも、また彼の家に行かなきゃね？」

「そうですね？休み中はヤシ・・・」

「ちよっと、キザマロ！」

「あ、すいません！」

二人はゴン太に目をやり、ゴニョゴニョと話を収束させる。

もう一人の友人には会話に参加する時間すら与えてくれないらしい。

「委員長、キザマロ、何を話して・・・」

「あなたには関係ないことよ！それより、遅れて来たんだから、しっかり働きなさい！」

口もはさませてくださいない。

キザマロに無言の視線を向けると、プイッと反らされた。

「さっさと行くわよ！」

「はい！」

二人はスタスタと歩いて行く。

けど、それを追いかける気になれなかった。  
足が酷く重い。

開いた距離が遠い。空しいくらいに……

ウォーロックが口を開いたのは、公園を出てから角を二つほど曲がったところだった。

「怪しいな」

「え？何が？」

「あのゴン太って奴だ」

「牛島君が、どうかしたの？」

意味が分からない。ますます顔をしかめる。

「俺達電波生命体が地球では本来の力が出せない。それは覚えているか？」

「うん。だから僕と電波変換する必要があるんでしょう？」

「ああ。で……だ、俺らの場合は違うが、本来、FM星人は人の孤独の周波数につけ込むんだ。」

「つけ込む？」

「考えても見る。命がけで戦うために、『ただで体を貸してくれ』なんて言われて、承諾する奴がいるか？」

首を横に振った。自分も父の情報をもらえることを条件にウォー口ツクのがままを聞いている。

こっちの条件を飲んでくれる様子は見えないが・・・

「そして、体を借りるにしても、相手の意識を奪って自分の傀儡に  
してしまう方がやりやすい。」

ウイルス人間、ジャミンガーを思い出した。

あれの意志はほぼウイルスの物だった。

自分達と違い、行動に迷いが無かった。

確かに、効率が良いと言える。

「その方法としていちばん簡単な方法が・・・孤独や悩みを持つ人  
間につけ込むのさ。」

孤独を持った奴、悩みを抱えて誰にも相談できない奴。そういう奴  
の心は驚くほどもろい。

触れただけでぶっ壊れちまいそうならいにな。」

「・・・その心が壊れたら、どうなるの？」

「暴走する。理性も制御もあつたもんじゃねえ。」

心を抑えることができなくなった人間は、取りついたFM星人の操  
り人形だ。

言われるがままに破壊行動を行い、地球人を傷つけるだろうな」

ごくりと喉を唾が伝った。気付くと背中が濡れていた。

「で、なんで牛島君が？」

「ああ、あいつから孤独の周波数を感じた。もしかしたら・・・」

叫び声が聞こえた。

夜を引き裂くような、少女の悲鳴だ。  
背中から受けたそれに振り返る。

「・・・え？」

「公園の方だ！もしかしたらが当たっちゃったかもしれない！」

「え、えと・・・！」

「行くぞ！」

ウォーロックが走り出す。トランサーの中に入ったまま。

よって、スバルは左手に引っ張られるように走るしかない。

一つ、二つ、角を曲がると公園が見えてくる。

街灯とは違う何かがある。赤い光を放っている。

「畜生、やっぱりか！」

彼の舌打ちにまさかとスバルは息をのんだ。

「待って、心の準備が・・・」

言い終わる前に入口についてしまった。

「あ・・・ああ・・・」

光の発信源を見て、スバルは愕然とした。

そこには赤が広がっていた。

炎

砂利で満たされているはずの公園に広がり、火の海が出来上がっていた。

その一か所、まだ炎が少ない一部分で、やはりルナとキザマロがいた。

二人の視線の先を見て、さらに驚愕は絶望に変わる。

「化け物……」

巨人がいた。三メートルはあろうと言う巨体の両肩には鋼鉄の円盤が取り付けられ、

そこからは太い胴体と同じぐらいの幅を持つドラム缶のような腕が生えている。

なにより目を引くのはその頭だ。闘牛を思わせる鋭い二本の角が君臨していた。

「ブモオオオオツ！」

雄たけびと共に背中と肩付近から噴き出していた炎が出力を上げる。

うねり、のたうちまわる蛇のようにその炎を広げていく。

地獄絵図。少年の眼前にはそれが築かれていた。

「……あれ？」

ゴン太がいない。このあり得ない状況。しかし、すぐに結論が出される。

さっきのウォーロックの言葉を聞いた後だから。

「まさか……ロック？」

「ああ、うれしくないが、大当たりだったみたいだ」

口調から歯を食いしぼる様子が容易に伝わってきた。

そして、彼女がそれを肯定した。



「なんで・・・ゴン太が化け物に・・・」

「ブロロロ、それをお前が言うのか？」

二人の前に炎とは違う、別の赤が突然現れる。  
まるで最初からそこにいたかのように。

「ひい！」

「だ、誰なの!?!」

暴走しているゴン太に似ている。

大きな角を始め牛のような容姿だ。

違う点といえば、幽霊のような足をしていることと、腕があることだ  
おびえるキザマロをよそに、果敢にその何かにルナは聞き返している。

「俺はあいつの味方だよ。ブロロロロ！」

「ロツク、あれは・・・」

「ああ、あいつはオックス。FM星人だ！」

## 第十四話・夜の始まり（後書き）

はい、ようやく一人目のボス戦です！

原作では、トラックの電腦内で闘ってましたが・・・  
FM星人の怖さをより引き出すために、現実世界で暴れてもらいます。

・・・本当に引き出せるかは分かりませんがね？

・・・よく考えたら、南国さん（カードショップの店長）涙目だな・・・

序盤に登場した刑事さんは、個人的に好きなキャラです。  
活躍させてあげたいけれど・・・無理だろうな。ネタがなにも思いつかない。

どうがんばってもギャグキャラで終わりそうです・・・

感想&アドバイス、待っています！

第十五話・炎洞の中で（前書き）

初めてのボス戦。

よって、本格的バトルに初挑戦です。

## 第十五話・炎渦の中で

ゴン太は夜になるまでその場所にいた。

大きく膨らんだその頬からはしょっぱい雫がぽたぽたと垂れている。

「俺が、もっと強かったら良かったのかな？」

一人にならずに済んだのかな？」

「ブロロロロ、力を貸してやろうか？」

「・・・え？」

不気味さを放つ、赤い光が後ろに立っていた。

「ひ！？な、なんだよ？」

「俺はお前の味方だ。強くなりたいんだろっ？なら、俺様がお前の力になれる」

「だ、誰がてめえなんか・・・」

「一人で良いのか？」

こんな正体不明の、胡散臭い言葉。誰も信じない。

いくら良い意味で単純なゴン太でも、さすがに信じない。

けれど、それは普通の彼ならばの話。

孤独でもろくなった彼の心は、迷ったあげく屈してしまう。

「俺・・・一人は嫌だ・・・」

それが、1週間前の話。

ゴン太がルナにブラザーを切ると言われた、あの日の出来事・・・

野太い雄たけびが上がる。

それは大きく空気を押しつけ、振動を起こし、公園の木々を揺らす。その様を、赤いFM星人、オックスはご機嫌な様子で観賞していた。

「ブロロロ！さあ、ゴン太！存分に暴れろ！お前の力を見せつけてやれー！！」

「あ、あんたがゴン太を！許せない・・・私達のゴン太を返しなさい！！」

「良く言っぜ！あいつがああなつた原因はお前だよ！」

「・・・え？」

闘牛をも退けそうなるルナの気迫が珍しく止まる。

「お前があいつを見捨てたんだろつが。あいつ言ってたぜ？

『委員長に捨てられたくない』ってな。だから俺は力を貸してやってただけさ。

こうなることを望んだのはあいつ自身の意志だ」

オックスの言葉が進むにつれ、手と足がぶるぶると震えていくのを自覚していた。

そんなに傷ついているなんて。気付けなかった自分が許せなくなっていく。

「あたしが・・・ゴン太を・・・」

「だ、だからって・・・」

キザマロがルナとゴン太をフォローしようと口を開く。けど、それ以上は何も出てこない。言葉が思いつかない。

「さあ、お前らは邪魔だ！失せる！」

オックスの体から光が放たれる。

「きゃあ！」

「うあ！」

それに意識を奪われ、二人は糸が切れたかのようにその場に倒れた。

「さあ、ゴン太！いや、オックス・ファイア！！

全部壊せ！全部焼け！そして、委員長に認めてもらうんだ！」

「ブモオオオオオオオオオオオッ！！」

先ほど以上の蛮声。

二輪車お断りの看板を掲げる公園の出入り口。

そんな遠いところにいるスバルの元にまで圧力が届いてくる。

服もズボンも後方へと引っ張られる。立つのがやっとだ。

飛ばされそうになるビジライザーを慌てて押さえつける。

「スバル！」

「う……うう……」

もう一度、炎の中心にたたずむ彼を見る。  
やはり大きい。自分の倍くらいありそうだ。

「言っただろう？あいつらは地球を破壊しようとしている。なら、奴を倒すしかねえぞ！？」

「……僕しか、いないんだよね？」

トランサーの中にいる彼と目を合わす。

「いや、『俺とお前』……二人しかいない！」

「二人……」

数秒目を閉じた後、大きくうなずいた。  
もう一度相手を見る。

興奮しているようだ。いつ破壊活動を始めてもおかしくない。  
きつと目を据え、トランサーを高く持ち上げた。

「電波変換 星河スバル オン・エア！」

青に緑を交えた光が螺旋を描き、スバルを包む。

光はすぐに役目を終えて、周囲に溶けていく。

身軽な装甲に身を包んだ青い戦士の姿がそこにあった。

「まずは手始めに、この町を火の海にしちまえ！」

「させない！」

「ん？」

声に振り返ったオックスが体を大きく仰け反らせる。

そのすぐそばを凝縮された緑の光が通り過ぎる。

飛んできた方向には、左手を構えている少年がいた。

その手にいる顔には見覚えがある。

「ウォーロック！てめえから来てくれたのか、手間が省けたぜ！」

「てめえが最初か？」

「ああ。だが俺がこの星に着いたのは一週間くらい前だ。

今頃もう何人が来ているはずだぜ？」

お前に勝ち目はない。さあ、”アンドロメダの鍵”を返しな！」

「誰が渡すか！」

顔見知りらしい二人のやり取りを黙って見ていた。

しかし、交じられていた、とある単語が気になった。

「ロック、”アンドロメダの鍵”って？」

「今は気にするな、来るぞ！？」

「ゴン太！こいつらは俺達の邪魔をしようとしているみたいだぜ？」

お前が委員長に認めてもらうのを邪魔したいんだとよ。

さあ！ねじ伏せてやろうぜ！」

オックスは赤い光に代わり、ゴン太・・・オックス・ファイアの体内に入っていく。

「ブオオオオ、お前も邪魔するのか！？」

「っ！ウォーロック、倒しても牛島君は・・・」



「大丈夫だ！消えるのはオックスだけだ。ためらうなよ！」  
「うん！」

身構え、臨戦態勢に入る。

以前までのような迷いはなかった。

目の前の悲惨な現状が彼の背中を押す。

「ファイアブレス！」

ガスマスクのような口から大木のような炎が吐きだされる。  
上方に大きく跳躍する。

「バトルカード ガトリング！」

宙を舞いながら、ウォーロックの体を変形させる。

4つの銃口を持ったそれは体を回転させ、次々と弾丸を放っていく。  
しかし、堅い装甲がそれを阻み、キンキンと空しくはじき返した。

「いまだ、タツクルをかませ！」

「ブオオオ！！！」

オックスの合図で、オックス・ファイアが肩を突きだして飛びこんでくる。

まだ空中に身を残しているスバル達はよけられない。

「えっと・・・これだ！バトルカード パワーボム 3枚！」

「え？おい！？」

反論の間を許さず、3枚のカードを無理やり押しこんだ。

左手も右手と同じく5本の指を備えた、元の形へと解放される。

手元に召喚された緑の弾を掴み、交互に全力で振るった。耳を張り裂く三つの爆発がオックスを巻き込む。勢いを殺された突進はスバルの着地と退避を許してしまう。しかし、回避は許さなかった。逃げ遅れた右足を巻き込む。スバルがシーソーに叩きつけられるには充分だった。木片が空を飛び、鉄製の部品がスバルへのダメージをさらに大きくした。

背中を突き刺すダメージがスバルの動きを鈍らせる。それを逃さない。即座に追撃の炎を吐く。

倒れるスバルの周辺にあるもの、全てを灰に変えるかのごとく炎が爆散する。

勝った。敵をたたきのめした快感が、一人と一体の口元を緩める。直後に緑の壁が炎を突き破り、その後ろにいるスバルがカードを取り出した。盾を収めたウォーロックがそれを受け取る。

「バトルカード ワイドソード！」

「ぐう！」

とっさの拳を交わし、すれ違う。胸元から肩にかけてぱっくりと割れたような傷が付く。

着地したスバルは前のめりに倒れた。拳は当たっていない。右足が先ほどのタツクルの強さを訴える。

すぐに逃げようと振り返るが遅かった。頭の角を前に出し、距離を詰めてきていた。

動けと脳が言う前に、体は動かされていた。

鉄棒をなぎ倒し、ブランコの柱を大きく歪ませようやく停止する。

指一つ動かせない痛みが全身に走る。

触覚以外の感覚器官が伝えるのは、勝ち誇ったような雄たけびだけだった。

第十五話・炎渦の中で（後書き）

流星のバトルシーンは難しいですね？

カードがたくさんありすぎて、どこまで想像ふくらませるかが作者の腕の見せ所なのでしょうが・・・大変ですw

感想&アドバイス、よろしくお願いします。

## 第十六話・ロックマン（前書き）

バトルにまだまだ自信ありません。

それでも宜しければ、vsオックス・ファイア後半戦をお楽しみください。

追記：戦闘の一部を書きなおしました

## 第十六話・ロックマン

「ブロロロロ！でかさってのは強さだ！誰も立てねえ！誰も避けねえ！」

オックス・ファイアの勝利の雄叫び。

スバルはそれにあらがう事もできず、横たわっていた

「つ、強い・・・勝てないよ」

指が動かない。けど、体の問題じゃない。心だ。容赦ない死を与えてくる相手への恐れだ。

「スバル！俺達しかいねえんだぞ！？あいつを倒せるのは！！」

怖い

死にたくない

逃げたい

何で僕が

もともと、父親のことを教えてもらいたいから彼と組んでいるだけだ。

なのに、その見返りも得られずにこんな目に合っている。

心が折れて行く

ウォーロックが何かを言っている

けど、それも聞こえない

もう、死んだふりでもしていよう

そう、このまま目を閉じて・・・

細くなっていた目がめいっぱい開かれた。

視界の隅に合ったそれに照準を合わせる。

敷地内に横たわるルナとキザマロに。

そして、そのすぐそばまで迫っている火に。

きしむ腕、悲鳴を上げる右足、それら全ての節々の叫びに逆らった。

一回、二回と地を蹴飛ばして近づいて行く。雄叫びが消えた。

気付かれた？それを確かめる気も起こらない。

二人の後ろに目を引きつけられたから。

火を纏わされた木が倒れ込もうとしている。

炎が与えてくる熱を無視し、飛びこみ、二人を抱える。

一息つくこともなく、火の壁を飛び越えた。

ガラガラという音が後ろから聞こえてくる。

「危なかった・・・」

まだ火が回っていない場所。

BIGWAVEと看板を掲げた店の裏に二人を下ろし、オックスの

前に躍り出る。

そのまま、二人と店から離れ、相手の意識をこちらに向ければ、彼女達が巻き込まれることは無いはずだ。

「ブオオオ・・・なんで、なんで立ち上がるんだよ！」

さっきまでとは違い、悔しそうなゴン太の声だった。

「俺は委員長に強いところ見せなきゃいけないのに！」

でなきゃ、委員長に必要とされないんだ！

もう、負けられないんだよ！！ブオオオッ！！」

ようやく、ゴン太がオックスに取りつかれ、操られていた理由がスバルには分かった。

「まさか・・・牛島君、僕があの時、君を殴ったから・・・」

厳密に言えばウォーロックなのだが・・・

今は殴った張本人の顔がある左手をまじまじと持ち上げる。

あのときの感触がこみ上げてくる。

「ロック、力を貸して。牛島君と、あの二人を助けるために！」

「・・・ああ！」

きしむ左腕をもう一度持ち上げる。

肘辺りが砕けているかもしれない。

「つぶれる！つぶれるよ！！消えちまえよ！！！！」

再び肩を先頭にして走り込んでくる。直線的な動きだ。

単調なその動きを見切り、充分すぎる余裕を持って避ける。何も無くなった場所を、空気を押すだけの音が通り過ぎる。左足を食い込ませるように地に叩きつけ、盛大に砂を舞い上げて、ようやく立ち止まる。

「なら、燃えちまえ！」

火炎放射機なぞ軽く凌駕する火が噴出される。これもまつすぐだ。横に飛ぶだけで軽く避けられた。

「大丈夫・・・避けれる」

戦えない相手じゃない。

それを認識し、すこしずつ冷静になって行く。相手のタツクルは、スピードはあるが、避けられないことは無い。火も同じだ。先日のウィルス戦の炎が少し大きくなった程度。もしかしたら、ウォーロックのシールドで防げるかもしれない。

「・・・火？」

あの時倒したウィルスは火属性だった。

F M 星人が作り出したウィルスに効くのならば・・・

「ロック、属性効果は効くかな？」

「俺も分らんが・・・試してみても価値はあるな」

バトルカードを取り出そうと腰に手を回す。

「ブモオオオオオオ！なら、最強の技で倒してやる！！」



角を前に突き出し、肩と背中中のバーナーを全開にする。

不快な機械音が鳴り響いた後、火柱が噴き出す。

共に放たれる高熱は大気を揺るがし、あらゆる物の形を崩していく。

「オツクスタツクル!!!」

轟音。走り出したその一瞬が大気を弾いた音。

戦闘機をも思わせるその速度で巨体をつつませてくる。

スバルは動かない。迫ってくる炎の巨人を正面に、じつと構えたまま。

だが、その目に怯えは無かった。

「バトルカード　アイスステージ！」

スバルの足先から、砂利で敷き詰められていた公園が、水色の澄んだ氷の大地へと変化していく。

まっすぐ突き進んでいたオツクスもその中に足を踏み入れる。

「ブモオオオオ!!!?」

頭を突き出し、前へと重心を傾けていたオツクスが転倒するのは当然だった。

自慢の角を皮切りに、多大な質量を秘めた体が氷面をえぐるように滑る。

「く、クソ！ファイアブレス!!!」

「うわ!!!」

マグマに突き落とされたような熱さが全身に回り、空へと舞い上げられる。

しかし、右手だけは庇っていた。

「バトルカード　ワイドウェーブ！」

水色の三日月がオックス・ファイアの頭上から迫りくる。

それほど速くない。さっきの彼が戦闘機なら、これはせいぜい鳥が滑空している程度だ。

しかし、スバルとゴン太では決定的な違いがあった。

横に大きく翼を広げて飛んでくるそれをかわすのは、彼には無理だった。

「グオオオオオ！」

「はっ！でかい図体って言うのも考え物だな、オックス!？」

四属性の法則からはFM星人も逃れられなかった。

火と水の上下関係がオックス・ファイアの体を深く傷つける。

加えて、足場が彼の敵に回った。

当てられた水が急激に冷やされ、拘束する衣と化した。

「こいつで決めるぜ！」

「うん！バトルカード　アイスバースト！」

左手が丸い大砲へと変わり、中にはファンが取り付けられている。

それが回転し、広がっていた氷の足場を吸い込んでいく。

ウォーロックへと溜められていくそれは水のエネルギーだ。

吸い込む量に比例して、大きくなる力は徐々に振動を起こし、腕に、足に伝わってくる。

「も・・・もう少しだ。踏ん張れ！」

「う、うん・・・！」

「ブー！ブオオツ！！！」

太い腕が氷を割っては出してくる。亀裂は大きくなり、氷の衣を打ち砕いた。

見ていることしかできなかった相手を見据え、大きく息を吸い込み、特大のそれをお見舞いした。

「ファイアブレス！！！」

今までより一回り太くなった炎柱が、渦を描くように迫りくる。二人に達しようかというとき、準備が整った。

「いつけえええっ！！！」

限界まで溜められた力を、二人は惜しみなく放った。

巨大化した青い弾丸はまるで水の太陽だ。

その威力は射線上の火の海をかき消し、炎を押し返して行く。

しかし、なおもその輝きは緩む様を見せない。

そのまま、オックス・ファイアを飲み込んだ。

「ブオ、オオオ！？」

肩の円盤が、太い足が、柱のような腕が、大きな図体が、全てが浸食されるように消えていく。

「こ、これで終わったと思うなよ！？」

それは、ゴン太の声ではなく、オックスの物だった。

「お、俺を倒しても、まだ・・・終わりじゃ、ない！  
忘れるな！まだ、な、何人もの・・・追手が、来ているこ、とを！  
まだまだ、どんどん・・・どんどん、く、来るぞ！？  
ウォーロック！お前が、や、やられるのも、時間の、も、も、もん  
だ・・・ブオオオオ！！！」

オックスを飲み込んだアイスバーストが弾け、残った炎をかき消していく。

そして、その後には・・・ぐったりとしたゴン太が倒れていた。

焼け野原となったそこに横たわる彼を、スバルはよいしょと持ち上げる。

普段なら絶対に無理なことを行いながら、避難させた二人の元に行く。

まだ意識は戻っていないようだ。

静かだったはずの夜はどんどん賑やかになって行く。

あれだけ騒いだのだ。近所の住人達が来ていないことが不思議なくらいだ。

おそらく、火の恐怖が彼らを近づけさせなかったのだろうが。

それが収まった今、こうなるのは当然だ。

フェンスの向こうに人影が見え始め、徐々にサイレンの音が近づいてくる。

自身と3人の身を考え、かなり無茶な持ち方をしながらウェブロードへと移動した。

人気の少ない場所を見つけ、その場に3人を下ろし、腕を軽く振る。

「このままでも大丈夫だよな？」

「ああ、良いんじゃないかねえか？」

3人を壁際に並ばせ、電波の道へと戻ろうとした時だった。

「ゴ……ン太……」

ルナが目を覚ました。いや、意識が戻ったと言っぐらいだ。薄く開いたそれは、まだ焦点が合っていない。

「大丈夫だよ、白金さん。牛島君は僕が助けたから。最小院君も横にいる」

穏やかさと包容力を交えた声で話しかける。斜めに下がった目がいまいに向けられた。

「あなた……だれ？」

「え？……えつと……」

左手の相棒と目を合わせ、適当に応えた。

「ロックマン」

「ロック……マン……？」

これ以上は持たなかったのだろう、深い眠りへと落ちて行った。

## 第十六話・ロックマン（後書き）

前回と今回の、ボスバトルはいかがだったでしょうか？  
もっと戦闘を面白く、読んでいて楽しい物にしたいです。  
そのため、感想やアドバイスをいただきたいと考えています。  
どうぞ、送ってください。  
よろしく願います。

## 第十七話・居場所（前書き）

前回までのあらすじ：

オックス・ファイアを倒し、スバルとウォーロックはゴン太達の救出に成功した。

朦朧とする意識で誰かと問いかけるルナに「ロックマン」とだけ答え、その場を後にするのだった。

今回で、第二章終了です！

## 第十七話・居場所

公園に集まった人々の数がさらに増え、報道陣まで駆け付けたところ、事件を起こした張本人はようやくその目を開いた。二人の友人の顔が自分を覗き込んでいた。

「あれ？・・・委員長？キザマロ？」

ぼんやりとした目はすぐに限界に開かれた。夜とは思えないざわめきを感じたからだ。

「あれ・・・あれ！？もしかして・・・」

「ゴン太、あなた・・・ゴン太よね？」

「ゴン太君？」

疑問を含んだ二人の目。ぞっと背筋に汗が走る。

「委員長、今日・・・何が壊れた？」

「え？何って・・・」

「公園が丸焼けに・・・」

キザマロの口をルナが慌てて抑える。

仮説が確信に変わった。

「ごめん！委員長、キザマロ！やっぱり、俺が犯人なんだ！！」

「え？」

頭を抱えて、その場に膝を突くゴン太に、二人は唾然と固まってしまふ。



「『赤い物破壊事件』あれの犯人は俺だ！」

「・・・ゴン太？」

「最近、夜になるとなんか出掛けなくなるんだ！」

「それで、赤い物見ると、頭の中も真っ赤になって・・・」

「気づいたら、部屋の布団で寝てて、朝になってるんだ！」

「その横に、赤いレンガとか、ポストの破片とか、落ちてるんだ！」

「俺、怖かったんだ！」

堤を切られたダムが水を吐き出すように、ひっきりなしにしゃべりたてた。

「自分が犯人なのかもって事が・・・怖かったのね？  
なんで相談してくれなかったの!？」

理由は分かっている。自分があんなことを言ったからだ。  
けど、そう言いたかった。言葉にせずにはいられなかった。

「言えるわけねえよ!だって、そんなことしたら、委員長にブラザー切られちまうと思っただよ！」

「あ・・・」

彼が本当に怖かったのはそこだ。

委員長にブラザーを切られれば、キザマロも従うだろう。

一人になる。それが怖かったのだ。

委員長のブラザーでいること。

それが彼にとってどれだけ大きいことなのか。

今更になって思い知らされた。

「でも・・・本当にごめん。俺には、委員長達のブラザーでいる資

格なんてないや・・・」

ブチッ

「あ!？」

「え?」

ゴン太がトランサーを操作したと思うと、嫌な音が鳴った。二人が自分の物を開いてみると、ブラザーのリストから、ゴン太の顔が消えていた。

「ゴン太!？」

「ゴン太君・・・?」

「俺・・・自首してくるよ。犯罪者がブラザーだったら、生徒会長になれないだろ?」  
委員長、キザマロ、今まで俺なんかのブラザーでいてくれて、ありがとう・・・」

立ち尽くす二人を置いて、公園へと歩き出した。  
足に迷いはなく、けど重く、引きずるように。

「待ちなさい!」

それをルナの声が止めた。

「あんだ!誰に断ってあたしのブラザー止めてんの!？」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・え?」

本気で怒ったルナの顔があった。以前の展望台以上だ。  
けど、そこには哀愁も含まれている。あの赤いオーラは影も形もな

い。

「だ、だって……」

「だいたい、あんたが自首したところで信じてくれる？」

『ポストを壊したのは俺です！』って言うの？

公園も、色々と物が壊れているけれど、それもあんたの仕業ですって言うの？

断言するわ！絶対に信じてもらえないわよ？門前払いよ？」

「う、うくん……」

ルナの言うことも一理あるだろう。

公園の放火くらいならともかく、あのあり得ない形に壊れた遊具は説明できない。

しかも、11歳の小学生が壊したなど、サテラポリスは信じないだろう。

「じゃあ……どうするんだよ？」

「壊した物を直すとか……」

「それこそ、サテラポリスの迷惑よ。重要な捜査資料だもの」

確かにとキザマロは頭を抱える。

もう一度、キツとゴン太を睨みつける。

しかし、びくりと俯くゴン太の腕に優しく手を置いた。

「ゴン太、今回あなたが起こした事件は、あなたや私たちでは償いきれないわ。

年齢的にも法的にもね。だから、あなたは別の場所で少しずつ罪を償いなさい！

あたしのブラザーとして、あたしを生徒会長にするために尽力なさい！

そして、コダマ小学校を・・・ひいてはコダマタウンのために貢献するのよ！

そうやって、ちよつとずつ、ちよつとずつで良いわ。

時間をかけて償って行きましょう。私が側にいて、力になってあげるから！分かった！？」

多分半分も分かっていない。けど、これだけは分かった。

ルナは、ゴン太にこれまで通り側にいるということだ。無論、ブラザーとして。

「委員長・・・」

「ぼ、僕も！」

キザマロが、思い切ったような声を出す。

「僕もご一緒します！僕だって、これからもゴン太君のブラザーで居たいんですから！」

「キザマロ・・・」

「さあ！分かったら、さつさとトランサーを出す！」

「は、はいいい！！！」

電波の光を通じてピピツという音が鳴る。それをもう一度繰り返す。ただの機械音だ。しかし、それが与えてくれるものは温かみだ。

ディスプレイに表示される二人の顔を見て、頬が緩む。

「それと・・・これ・・・」

そつぽを向き、ルナが一枚の紙切れを突きだす。

受け取ったそれには、ボウリングと表記されている。

「ヤシブタウンにボウリング場ができたの。その無料券よ」  
「すみません、ゴン太君を驚かせようと思って、内緒にしていたんです」

先日、ゴン太を強く叱った後、キザマロの発案で手に入れたものだ。合流した直後、二人がゴン太を会話に挟ませなかったのはこれを隠すため。

頭の回転が悪いゴン太だが、そのチケットの裏の地図を眺めてようやく気付いた。

この近くには、自分が行きたいと言っていた、『モマイクレープ』という店がある。

それを二人に話したのは、委員長に怒られたあの日だ。怒られているときに、ルナがちらつかせていた雑誌が脳裏によぎる。

「ゴン太、分かっているわね？」

あんたが、あたしのブラザーを止めていいのは、あたしが命令した時だけよ！」

「は、はい！」

「まあ、そんなこと絶対にないでしょうけれどね!？」

「い、いびんじょう・・・」

委員長と言おうとしたのだろうが、声になっていない。目からこぼれおちるそれが邪魔してくる。

「さあ、帰るわよ。明日はボウリングして楽しむんですから!」

「いびんじょう!ぼれ、いっじょうづいでぐよ!」

「僕も、一生付いて行きます!ウワン!」

「ちよ、抱きつくな!離れなさいよ!」

泣きだすブラザー二人に怒鳴りながらも、どこか楽しそうだった。

「心のよりどころ。自分の居場所。自分を認めてくれる場所。それを失いたくない。」

「けど、力でしか、自分を認めてもらう方法が分からなかったんだな」「そうなのかもね」

3人の様子を、ウェブロードから見下ろしていた。

「人間は弱いな。誰かがいなきゃあ、何もできねえ。だが、俺達電波生命体も、人間がいなきゃあ脆弱な存在にすぎない。」

誰かに居場所を求める気持ちは、変わらねえのかもな」

ゴン太がその最たる存在だ。ウォーロックの目にはそう映った。

彼からはもうあの孤独の周波数は感じられない。

友人が言っていた言葉を思い出していた。

「バカだな」

「・・・あ?」

冷たい空気が発せられた。

「誰かに求めるからダメなんだよ。その人がいなくなったら、そうやって悲しい思いをするんだ。」

牛島君みたいだね。だったら、最初から自分の居場所なんて求めなけりゃ良いのに・・・」

眼下で、いまだに騒ぐ3人から目を離し、立ち上がる。

「さあ、帰ろう。母さんが心配してるだろうし」

「……ああ……」

帰宅直後、その母から泣き怒りされたのは言うまでもない。

公園での騒ぎは大分収まったようだ。

もそもそとベッドへと入って行く。

まだ体のあちこちが痛い、多分大丈夫だろう。

「なあ、スバル」

「なに？」

早く寝たいのにとビジライザーを手に取る。

「お前、何のために戦ってるんだ？」

「はあ？父さんの情報をもろうために決まってるでしょ！君は話してくれないけどね」

「こつちの質問が悪かったな。お前は、なんで他人のために戦おうとするんだ？」

「……他人？」

スバルが大きく首をかしげる。

「オックスと闘っているとき、お前、一度戦うのを止めようとしただろう？」

角に吹き飛ばされ、ブランコにたたきつけられた時だ。スバルも思い出す。あの時は、ウォーロックの言葉すら耳に入らなかった。

しかし、火の海の中にいる二人を見ると、自然と体が動いた。

「あれは、二人が危なかったから・・・」

「そこだ」

ウォーロックの指がピンとさされる

「お前はあの時、自分の身をなげうってまでも、他人を助けようとした。

それも、嫌っているあの二人をだ。その後の戦う理由も、ゴン太を助けるためだろう？

お前を殴ろうとした奴だぞ？」

「殴ったのは君だけどね？」

皮肉を込めて返してやる。そもそも、騒動の原因はこいつの乱暴さなのだから。

しかし、すぐに考え込む。

ウォーロックの言うとおり、自分は彼らを嫌っていたはずだ。

けど、戦うときは彼らを必至でかばっていた。

「機関車の時も、おふくろさんを助けるためだったよな？

そっちはまあ・・・分からんでも無い。だが、今回はそれとは違う気がしてな」

ウォーロックの言葉にますます頭を抱える。

けど、答えは出ない。



「僕にも分からないや。なんか、ほっとけなかったから・・・かな？」

「・・・そうか・・・」

「ふああああ・・・ごめん、もう寝るね？」

「ああ」

「お休み」

こてりと夢の中へと落ちて行つた。

「人間つてのは、よく分からねえ生き物だな・・・」

スバルを尻目に、窓の外を眺める。

公園の入口ではまだ人がいる。が、数えるほどだ。

おそらく、サテラポリスという連中だろう。あの刑事のアンテナの光が見えた。

ヤジウマは帰つたらしい。時間は待つてくれない。明日に備えて家に戻つたのだろう。

もう一度公園を見る。オックスと闘つた場所だ。

奴の言葉を思い出す。

もう、何人かの追手が地球に来ている。

「俺も次に備えるか・・・」

彼もまた、トランサーで眠りへと付いた。

## 第十七話・居場所（後書き）

注意：後書き長いです。

はい、第二章が終わりました。

話数は第一章より少なくなりましたが、一話の文字数を多くしたのであまり変わらんなw  
あれ？原作の展開の色々な場所を省略したはずなのにな？

『あらすじ』はいりますかね？たくさん素敵なお話ひしめくこのサイト。

しかも、この小説は亀更新なので、あった方が便利かと思ってつけました。

・・・需要ないかな？

ルナ達のやり取りが思い出せない方は、第十三話の後半を読み返していただけたらと思います。

さて・・・次は、第三章の公開を予定しております。  
色々アレンジを加えて味を出そうと模索中です。

ってなわけで・・・

・次回予告！

オックスを撃退したスバルとウォーロック。

しかし、地球に降り立ったFM星人達が次々と動き始める！

彼らの知らぬところで、次なる戦いの足音が迫りくる！

次回、第十八話『来襲』

どうぞ、見てやってください！

感想やアドバイスを送ってくれると幸いです。  
どうぞ、よろしく願います。

## 第十八話・来襲（前書き）

あらすじ：

オックスを撃退し、ルナ達の仲直りを見届けたスバルとウォーロック。

自分の心境に気づけないスバルを見て、ウォーロックは何かを感じつつあった。

## 第十八話・来襲

スバル達が住むコダマタウンにお情け程度の明りが灯り始める。辺りは暗く、街灯と家から漏れる光が町に静かな夜を奏でている。

それとは対照的に、闇に逆らう町がある。

### ヤシブタウン

コダマタウンが郊外だとすると、ここは大都会に分類される。若い男女の隣をスーツ姿の男性がすれ違い、そのわきの道路ではクラックシオンを鳴らして車が通り過ぎる。

あるビルの大スクリーンの中では、ピンク色の服を着た少女が堂々と歌っており、

道行く人々がそれに耳を傾ける。

色とりどりのネオンで化粧を施されたこの場所で、

集った者達は夜の時間を、思い思いに楽しんでいる。

これが、闇のない街だ。

まぶしすぎるその光景を見下ろしている影が一つ。

この街の広大さに比べてはるかに小さいそれは、景色の一部に紛れていた。

一見、水色のU字型をした弦楽器だ。豎琴と言う物に分類されるだろう。

頭の両端からわき出ているピンク色のオーラが、ただの楽器ではないことを示していた。

そのオーラが控え目なボディの色と相まって、一見ピンク色というイメージが当てはまる。

この淡い雰囲気を醸し出すそれは生命体だ。それを示すように、その体の最も面積の広い、湾曲した場所には細長いつりあがった目と、少し小さな口がある。顔立ちからはどこか女性を思わせる。

「おしゃれな街ね？こういうの、嫌いじゃないわ？」

先ほどとは違う小さな、しかし、ここから一番よく見えるスクリーンに目を向ける。

少女が歌っている曲のリズムに合わせるように、体を揺らしている。多分踊っているのだろう。即興で作ったようで動きは少ないが、リズムは寸分も違っていなかった。

「なに遊んでいるだい？」

かけられた声にムスツと頬をふくらました。

「まったく・・・女の時間を奪うなんて、デリカシーが無いと思わないかしら。エセ紳士さん？」

「心外だな」

視界を覆わんばかりの大きな翼を広げ、声の主が姿を現した。

その二つの翼は、白に青を少しばかり混ぜたような色をしている。

白いボディからは、翼と同じ色をした長い首が生えている。

その先に、体と同じ色の頭と対称的に真っ黒な鋭い嘴。見るからに白鳥を連想する姿だ。

しかし、その目に静穏さは無く、鋭く冷酷な赤色が秘められていた。並び立つ二人の姿はどう見ても地球の生物とはかけ離れていた。

「任務を放棄して遊んでいる者に、逆に怒られるなんてね？」

「エセ紳士は否定しないのね？」

「フフフ。本物の紳士なら、地球を滅ぼそうとなんてしないさ」

そう、彼らはFM星人。

先日、スバルとウォーロックに倒されたオックスの仲間だ。

「そうそう、その話。オックスだったら、もうやられてしまったのね？」

「先日の公園の事件、君も知っていたんだね？」

エセ紳士ながら、物腰丁寧な口調で白鳥が話す。  
しかし、どこか冷たい雰囲気醸し出していた。

「ポロロン、仕事熱心なことね」

「さばり魔の君には、彼の爪・・・いや、角の破片データでも飲ませてあげたいよ」

「止めてよ！牛臭くなるじゃない!？」

「おいおい、死んだ仲間にずいぶん言い草だな」

「仲間？ポロロン、よしなさいよ。」

あなた達とは同郷で、偶々同じ任務に当てられただけよ。それだけの仲。

そもそも、孤独を愛する私たちFM星人に、仲間なんて言葉似合わないわよ？」

「フフ、それもそうだ」

『ポロロン』というのは、どうやら彼女独特の笑い方らしい。口角が上がっている。

仲間という単語には特にだ。

任務とはいえど、個々が好き勝手に動いているだけだ。

彼らの間には、仲間意識など無いに等しい。

「・・・やっぱり、ウォーロックに倒されのかしら？」

「それしかないだろうね。僕ら以外のFM星人が来ていて、そいつが裏切ったりしていない限り」

「それは無いと思うわ。あなた達二人の次に私が派遣されたのよ。

そして、オックスが負けたのは私がこの星に到着した日よ？半日じや流石に準備ができないわよ」

「君は三日も前に到着していたのかい？今まで何していたんだい？」

呆れたように豎琴を見る。

「あら？遊んでいたわけじゃないわよ？」

嘘だよね？と言いたかったが、流しておいた。

「私じゃあ、単純な戦闘能力において、ウォーロックには勝てないわ。

だから、周波数が合う上に、孤独の周波数を発している人間を探していたの」

FM星人がとりつく人間は、誰でも良いわけでは無い。

己と相性が合い、心満たされない者を懐柔する必要がある。

そのため、白鳥似のFM星人は地球に到着していながらも、

未だに任務を開始することができないでいた。

そして、それぞれがバラバラに動いている一番の理由でもある。

「じゃあ、さっきのダンスはなんだったんだい？」

「人類滅亡計画のために、人間を研究しているのよ。

音楽は人の心を支配するもの。私の得意分野よ」

「遊んでいたことに対して、綺麗に言い訳したね？」



「あら？何のことかしら？ポロロン！」

男が女に言い負かされてしまうのは、地球人でもFM星人でも同じのようだ。

「まあ、良いや。君も職務怠慢で”星王様”に怒られなくなかったら、任務を遂行した方が良いよ？」

「あら、告げ口する気？」

「まさか、僕は僕が立てた手柄を主張するだけさ。だから、君の手柄は零になるかもよ？」

スツと姿が消える。

周波数も感じないことを確認し、ごろんとその場で寝そべった。

「あゝあゝ・・・人類滅亡計画とか、正直どうでもいいのよね」

彼女が三日間さぼっていた本当の理由だ。

訳の分からない理由で、遠い星に出張して来いなんて言われたのだ。気分屋な彼女には憂鬱でしかない。

しかも、来てみればその星は自分たちの星とは比べにもものにならないくらい美しい。

人間の多い場所を覗いてみると、好奇心を掻きたてる物が至る所にある。

もう任務なんてどうでも良い。

しかし、星王からお怒りを食らうとなると、話は別だ。

「はぁ・・・やっぱりやるしかないかしら・・・気が乗らないわ・・・」

体を起こし、もう一度スクリーンを見る。

さつきとは別の曲が流れてくる。

「……あら、この娘……」

ずっと画面に映っているその少女をじっと見る。けど、耳を傾けているわけではないらしい。

「やっぱり私、この星が好きかも……ポロロン」

「暇だ！」

「うるさいよ……」

処も時間も代わり、ここはコダマタウン。

まだ空は明るいが、スバルは展望台に来ていた。

今日は昼から月が見える日だ。

それを観察しに来ている。

「この数日……今までお前の行動をしっかりと分析させてもらっただぜ？」

お前、昼間は家で勉強して、機械いじくって、夜は展望台で空を観察。

そのの繰り返しじゃねえか!？」

「僕の勝手でしょ。宇宙好きだし」

「俺は暇だ！宇宙なんておもしろくねえ!！」

「知らないよ。居候のくせに」

宇宙からの来訪者にとって、スバルの趣味は退屈すぎた。

ウォーロックは我がままで怒鳴り、スバルは冷めた態度でスルーす

る。

最近、二人の間ではこんなやり取りが多い。

「僕が勉強している横で、テレビ見させてあげてるんだから、感謝してよね？」

「テレビだけじゃつまらねえ！俺は外に出て刺激が欲しいんだ！」

「なら、勝手に暴れたら良いじゃん。ウェブロードにもウィルスはいるんだから」

「ウィルス退治じゃなくて、外に出かけたいんだよ！あ、なあ、明日から学校行こうぜ！？」

「嫌だよ。君もドリル頭になったの！？」

「俺をあんな傲慢女と一緒にするな！」

「充分傲慢だよ。だいたい、父さんの事はいつになったら教えてくれるのさ？」

「そのうちな！」

「またそれだよ」

これでもう三日ははぐらかされている。

「それより、FM星人の襲来に備えな。今にも空から降ってくるかもしれないぜ？」

「そんなまさか。だいたいさ、惑星一つ滅ぼすって言うことが、僕にはまだ実感が湧かないよ」

「この前あんな目に合っただろうが」

空ではなく、コダマタウンの模様に目をやった。

緑が多いこの町に、一か所だけ異端な場所がある。

住民たちの憩いの場所だった公園だ。

真黒に焼け焦げたその場所では、もう復旧作業が始まっている。

あの場所は、事件現場として重要参考資料になるはずだった。しかし、サテラポリスは壊れた遊具などを回収してその場を治めることにした。

表向けはただの火事と言うことにし、異常な形に壊れた物が人目に付く前に撤去したのだ。

こうして、住民の不安を抑えることにしたのである。

彼らの判断は功を制したようで、町に流れていた一時の不安は、もうかなり薄れていた。

温和な町と言えば聞こえは良いが、平和ボケしているとも言えるかもしれない。

こんな裏の事情があったということ、スバルは知らない。

町の様子に少々疑問を感じたが興味が無かったため、追求しようとも思わなかった。

公園は、後一週間もすれば子供達の遊び場に戻るだろう。

そのころには、あのカードショップも開店するはずだ。

町の話題はどちらかと言うと、そっちの方が多い。もとの賑わいが来る日も近いだろう。

「確かに、あれは怖かったよ？けど、結局壊れたのは大きめの公園一つだよ。

あれじゃあ・・・地球を滅ぼすどころか、この二ホン国ひとつ壊すこともできないよ？」

「AM星って星があった・・・」

「・・・ロツク？」

まじめな時の口調だった。

さっきまでとは違う空気が流れる。

「FM星の隣に存在している星でな。FM星と同じく、電波生命体が住んでいた。」

「ロックや、この前のオックスみたいな？」

「ああ、俺が見ている目の前で・・・潰されたよ」

「潰された？」

「AM星そのものは今も存在しているが、もう星としては死んでいる。誰も住めなくなっちゃった。」

そんな実績と、それを成し遂げるだけの力を、奴らは持っている。油断しない方が良いいぜ？」

あまり実感の湧かない話だが、いつにない真剣なウォーロックの目と言葉に疑いが持てなかった。

こくりとわずき、先ほどの警戒しろという言葉を出し、上を仰いだ。

「・・・あれ？」

はるか上空に何かが見える。白が大きく広がっている。その真ん中には、青っぽい縦棒がとっついていてる。

「なにあれ？・・・鳥？」

白いの翼だった。

よく見ると、それは上下に大きく動き、体を空に持ち上げようとしているように見える。

珍しいそれに、見入るように観察していると・・・右、左と揺れ始め、段々振幅が大きくなっていく。

応じて、高度も段々下がってくる。

「なんか、危なくない？・・・って、うわあ！」

ドシンと地面が揺れるのではないかと思うほどの音が鳴り、思わず目をつぶった。

危険に気付いた時には、それは空での支配権を完全に失い、まっ逆さまに、この展望台に落ちて来た。

「な、なに？今の・・・」

「気をつける、スバル！」

ぎょっとして、トランサーを見る。

「え？まさか、本当にFM星人！？」

「かもしれねえ。俺の知っている奴に似ていた。結構面倒だぞ」

「うう・・・」

こう聞かされて、ボーっと突っ立っている気にはなれない。

落ちたと思われる、広場へと駆けだした。

生い茂っていた花々の一部が押しつぶされている。

中に誰がいる。スバルは側にあった、何かを閉まっているロッカーの陰に身を隠した。

「あ、イタタタ・・・」

落ちて来た主が身を起こした。

人間では無い

確信には充分だった

一見、ただのやせ細った男性だ。

しかし、人では無い証拠がある。  
そこに目を向ける。

太陽に照らされ、白を放つ大翼が彼の背中から生えていた。

## 第十八話・来襲（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。  
感想やアドバイスをいただけたら幸いです。

次回予告！

遂に動き始めたFM星人達！

そして、突然現れた謎の存在。敵か味方か？

そこに、思わぬ男が現れる！

予想だにせぬ再開に、スバルは・・・

次回、第十九話・『信用』

次の話も見てください！



## 第十九話・信用（前書き）

ユニークPVが1,600を突破しました。

呼んでくださっている皆様、ありがとうございます。  
励みになります。

これからも呼んでいただければ幸いです。

では、どうぞご覧ください。

あらすじ：

昼間の展望台に、突如現れた翼を生やした謎の存在！

FM星人かも知れないと言うウォーロック。

スバルは物陰に隠れ、様子をうかがっていた・・・

## 第十九話・信用

僕はできる限り、呼吸をゆっくりと吐いた。

これが、多分一番呼吸音を落とせる方法だと思ったんだ。

ロッカーは思ったよりも薄い鉄板で作られているみたいで、ちよつと体重をかけるとガコンと音が鳴ってしまいそうで怖い。

ビライザーが邪魔で、うまく覗けない。

仕方ないから、一度それを外して、ポケットに突っ込む。

もう一度、落ちて来た鳥人間を観察する。

茫然とたたずんでいる。

ロックも警戒しているみたいだ。緊張が左手から伝わってくる。

いつでも電波変換できるように、トランサーをギュツと握りしめる。

ちよつとだけ、心が落ち着く・・・なんでだろうね？

観察を再開するよ・・・つて、動いた！

花畑から出てきて、翼を・・・

「え？」

スバルが見ている目の前で、観察対象は翼を取り外した。

良く見ると、翼は彼の背中から生えているのではなく、『翼を取り

付けた機械』を背負っていただけだった。

深い溜息と共に、それをそつと地面に置く。

「なんで安定しないんだろう？すぐに落ちちゃうよ。

最低でも、ここからアマケンに行けるぐらいの飛行距離は欲しいのにな。

何が悪いんだろう？翼の動きはほぼ完ぺきに再現しているはずなの

に・・・」

ブツブツと何かを呟いている。  
年齢は20代半ばぐらいだろうが、それにしても少々声が高い印象を受ける。

「なんだ、ただの地球人かよ。紛らわしい」

「普通？・・・の人・・・みたいだね？」

少し失礼な言葉が出そうになり、それをごまかす。

目元に大きなクマを持った彼は高い身長と、スバル以上に細い体のせいで、非常に貧弱そうに見える。

よく見ると、彼の青い服装はどこか見覚えがある。どこかの制服のようだ。

彼の左胸には文字が刺しゅうされている。

「AMAKEN？」

聞き覚えがある単語に思わず声が漏れた。

「誰です!?!？」

気付かれ、目が合ってしまった。

何か悪い気がして、物陰から身を出す。

「いや、えっと・・・珍しい物見て。それ、なんですか？」

「っひ!?!？」

「ひ?？」

「うあああ!?!?!？」

翼が生えた機械を指さすと、半狂乱のような悲鳴を上げて取り出した袋に放り込んだ。

それを必死に抱きこむ。

ただ、見たことのない機械を指差しただけなのに涙目になっている。

「み、見ないでください！」

「……え？」

「き、君はなんですか！？僕の発明品を盗み見して！アイデアを盗もうとでも！？」

「いや、僕まだ子供……」

「そう言つて、あなたのバックに大人がいるんでしょう！？」

子供なら警戒されないからって、ずるい手を使うんだ！

そつだ！そういう部類の連中は、そうやって卑怯なことを平気でするんだ！」

「……」

コンビを組んでから初めて二人は同じことを感じた。  
変わった人だと。

「さあ！白状なさい！誰の差し金です！？」

帰りたい。心底二人は思った。

「なあ、あいつ殴つていいか？」

「ダメだよ。流石に……」

否、ウォーロックは殺意を放っていた。非常に危ない。  
スバルも左手を抑えるのがやっとだ。

「さあ！さあつ！……」

もう一人もクマだらけの目で迫ってくる。  
なんか、もう危ない人だ。やばい奴二人に板挟みだ。

「おうたがい、宇田海！」

のんびりとした低い声が、妙に緊迫したこの空気をかき消した。  
おじさんの声なのに、天使に救われたような感覚に陥り、その方を  
向く。

「天地さん!？」

「あれ、スバル君じゃないか？」

先日、ビジライザーをくれた、小太りの男性だ。

父親、大吾の後輩らしい。

階段を上りきり、笑顔を絶やさずにこっちに歩いてくるのが見えた。

「天地さんは・・・この子と知り合いでしょうか？」

「ああ、大吾先輩の息子さんだ。二人とも、顔見知りかい？」

「え、えつと・・・まあ、そんなところですよ」

長身の男の言葉に天地は気軽に返す。

宇田海と呼ばれた彼は、先ほどまでの危機迫った表情はまるでなく、  
どこか怯えたように背を丸めている。

「そうそう、調査資料がそろったから、そろそろ戻ろうと思うんだ  
が・・・」

「ぼ、僕、先に車に戻っています！お邪魔でしょうから!!」

さっきの謎の機械を抱え、一目散に走り出す。

あつという間に姿が見えなくなった。意外と足が速いらしい。

「・・・なんだったんだろう、あの人？」

「すまないね、宇田海は他人と話すのが苦手だね。ちょっと疑り深いけど、良い奴だよ」

ちょっとではないと、お人好しすぎる天地に呆れた目を向ける。静かになったウォーロックも同じ目をしているだろう。

「彼は僕の助手だね。アマケンの優秀なスタッフなんだよ」

「・・・そうですか・・・」

興味ないため、適当に返す。

今更に、先ほどのAMAKENと言う文字の意味を思い出す。

天地が運営している天地研究所のことだ。

ちよつと田舎気味な、ここコダマタウンの数少ない観光名所だ。

「にしても、スバル君も元気そうで何よりだよ。学校には行けるようになったかい？」

嫌な話題を振られ、無視を決め込んだ。

「やっぱり、そんな直ぐには行けないかい？」

「・・・そうだ！今度の土曜日、僕の研究所に遊びにおいでよ！」

「え・・・いや・・・」

30前後なのに、無邪気さを感じさせる笑み。

脅されているわけでもないし、悪意など一切込められていないのに、

なぜかものすごく断りにくいオーラが出ている。

「宇宙についても深く研究しているよ。『疑似宇宙空間』っていう施設もあるんだ。

宇宙服着て、無重力を体験できるんだ。面白いよ！きっと君も楽しめると思うんだ！

それに、見せたいものもあるしね！？」

スバルの興味を熟知しているのか、的確なところを突いてくる。

天地の人懐っこさと言葉だくみさ。スバルの嫌とは言えない気の弱さと宇宙へのあこがれ。

断りきれる要素などまるで無い。行きますと口が動いてしまった。

「そうか、嬉しいな！じゃあ、楽しみにしているよ！？」

スバルに一番の笑みを見せて、天地は展望台を後にした。

後には、重いオーラを発するスバルが取り残された。なぜか体が重く感じる。

「ねえ、ロック・・・電波変換したらあつという間に家に帰れるよね？」

「電波変換は道具じゃねえ。って言うわけで却下だ」

「・・・ケチ！」

だから気付かなかった。

物陰から発せられる、眼鏡の光に。

天地はトランサーにナビカードを挿入し、車内のモニターに転送する。

と、車が動きだした。

車の運転専門のナビが、人間に代わって操作している。自動走行という奴だ。

今はこれが主流。

一応、天地がいつでもマニュアル操作できるようにハンドルを握っているが、彼が運転することはまずない。

その助手席には先ほどの宇田海が座っており、渡された資料に目を通している。

「これが、この前の公園で起きた事件の捜査資料ですね？」

「ああ、信じられないくらいのにZ波が検出されたよ」

「確かに・・・サテラポリスの依頼で、これを調べるんですね？」

ぱらりと次の資料に目を移す。

「そうだよ。君にも手伝ってもらうけど、良いかい？」

「はい・・・」

「・・・あ、しまった。君には別に頼みたい仕事があったよ。」

ハンドルから両手を離し、頭をかいた。

別に危ない行動ではない。自動走行なのだから。

「施設の『疑似宇宙空間』なんだけど・・・雰囲気よりも、安全面を優先させようと思うんだ」

「今のあの施設。稼働したら、重力どころか酸素が無いですからね？事故とかでマスクが取れたりしたら・・・」

「ああ、だから至急、『酸素供給装置』の作成を頼んでいいかい？



できれば・・・土曜日までに」

「分かりました」

「助かるよ」

宇田海は資料を戻し、トランサーを開いた。

自分の研究資料をいじくっているようだ。

『フライングジャケット』という項目の他に、『酸素供給装置』を新たに作成する。

それが終われば、すぐに参考資料の検索を始めている。

疑り深い人間ではあるが、まじめで仕事熱心な事がうかがえる。

「・・・なあ、宇田海」

「なんですか？」

「よかつたら、ブラザーを結ばないかい？」

「・・・え？」

驚いた顔で天地を見た。

いつも通りの、優しそうな顔で天地も振り返る。

前方不注意かもしれないが、これもナビが運転しているので問題ない。

「僕ら、知り合っでずいぶん経つだろう？けど、僕は君の事をほとんど知らない」

「私は・・・別に・・・」

「互いを知ることには大事だよ。そこから信用が生まれ、普通じゃできないことだってできるようになる」

「・・・」

宇田海は何も話さず、ただ沈黙を保っている。

トランサーのブラザー一覧を開く。スバルの物と同じく、そこには

誰の顔も名前もない。  
思い出したくない記憶が脳裏をよぎる。

「ブラザーなんて・・・信用できるから、結ぶものでしょう？  
天地さんの理論から言つと、手順が逆ですよ？」

「良いじゃないか、逆でも。  
相手を知ること、相手を信用することから始めるブラザーだって、  
あつても良いと思うよ。」

人は相手の全てを知らないし、自分で自分に気づけないこともある。  
何年もブラザーをしていて、初めて互いに気づけることがあるなん  
て当たり前だ。

今結ぶも後から結ぶも大差ないよ？そこから、互いを互いに知って  
行けばいい」

宇田海は何も返さなかった。長めの髪が眼のクマまで隠しているた  
め、表情が見えない。

早かったかなと天地は前方に目を戻した。しかし、それはすぐに横  
に向く。

「・・・良いですよ？」

「お、本当かい!？」

「ええ・・・ブラザー、結んでください」

おどおどする宇田海に、人を惹きこむような笑みを返した。

AMAKENと書かれた表札が掲げられている。  
その門を一台の車が通り過ぎる。

駐車すると、中から二人の男が出てくる。小太りの男と。対称的にやせ細った男だ。すぐ近くの建物へと入って行く。

その様子を、屋上から見下ろしていた。

「来た来た・・・フフフ・・・」

白い鳥のような、しかし、明らかにそれでは無い何かが、鋭く赤い目を細めた。

## 第十九話・信用（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。  
感想やアドバイスをいただけたら幸いです。

次回予告！

天地とブラザーを結んだ宇田海。

しかし、彼には誰にも話せない暗い過去があった。

彼に忍び寄る白い魔手。

彼の運命は？

一方、スバルはアマケンを訪れる。

天地が見せたい物とは？

次回、第二十話・『企み』

次の話も、また見てやってください！

## 第二十話・企み（前書き）

あらすじ：

アマケンに遊びに行くと天地と約束してしまったスバル。

一方、宇田海は天地とブラザーを結ぶ。

これが、一混乱を呼ぶことになるとは知らず・・・

## 第二十話・企み

天地研究所にも深夜と呼ぶ時間がやってきた。ほとんどの部屋は明かりが消され、真つ暗だ。しかし、この部屋は違った。天地の研究室だ。天地の助手である宇田海が作業をしている。パソコンと、あの翼の生えた機械を接続し、ディスプレイに表示される文字列を真剣に睨んでいる。

「うん。やっぱり、プログラムに問題は無い……か。なら、原因は機構の方かな？」

パソコンから外した機械を丁寧に壁のフックにかける。本当はばらして故障が無いか確認したいが、流星にもう時間が遅い。天地から頼まれた仕事もある。帰る準備を終え、もう一度先ほどの機械に目を移す。

「『フライングジャケット』……私の研究成果で発明品。だれにも渡さない」

そこまで言って、トランサーを開いた。ブラザーの欄には上司の顔がある。

「天地さんなら……大丈夫だ。この人は、あの人とは違う。この人なら、私を裏切ったりなんてしないはずだ」

ブラザーバンドは、あらゆる個人情報共有する。彼の研究成果を見ることだって、今の天地には可能になる。疑惑とわずかな希望を混ぜた目で、トランサーの中の上司を見てい

た。

そんな彼の後ろに、青白い靄がかかる。それはすぐに鳥へと形を整える。

「おや、結んじやったのかい？」

背後からかかる声に振り返る。

赤い目をした白鳥。

先日、ヤシブタウンに姿を現したやつだ。

「ああ、キグナス・・・」

驚いた様子もなく、宇田海はおどおどと話しかける。

「言ったじゃないか？『誰も信用なんてしちゃダメだよ』って」

「け、けど・・・天地さんは・・・私と同じ、元NAXA職員で、もう数年間一緒に仕事している方なんです。

私のことを色々と信用してくれているし・・・私も、その・・・信用した方がって・・・」

「君は、友達の僕と、人を裏切る上司のどっちを信用するんだい？」

「い、いや！裏切った上司は前の職場の・・・NAXAにいた時の上司で・・・天地さんは・・・」

それに、君と出会ったのだって、数日前ですよ？FM星人なんて・・・聞いたことないし・・・」

キグナスは小さく舌打ちした。

この男が発する周波数から孤独を感じ、近づいたまでは良い。

しかし、予想以上に人を信用しないこの男にいらだちを感じていた。話術に自信のある自分だが、今回ほど苦戦したことは無い。

しかし、電波変換するには、相性も大切だ。

他に探してみたものの、適任者はなかなか見つからず、先にあのさぼり女と遭遇したほどだ。

任務のために、どうしても、目の前の男を懐柔する必要があった。

「また、昔を繰り返すの？」

「ひいつ!？」

宇田海のトラウマを付いた。やはり、これが一番手っ取り早そうだ。

「君は、前の仕事場で上司とブラザーを結んだ。

けど、その上司が狙っていたのは、トランサーに記された君の研究データ。

研究成果を奪われて・・・裏切られたんだよね？」

宇田海の手が震える。やはり、大きな心の傷になっているらしい。

「天地さんは、違う!あの人なら・・・」

「なぜ、人を信用するんだい?この世の本質は裏切りだよ?君はその時に痛感したはずだよ?

その天地っていう人だって・・・」

「っ!帰って・・・ください・・・」

「・・・・・・・・」

「あの人は・・・きっと違う!あの人なら、きっと裏切らない・・・」

「分かったよ。僕が悪かった」

今は無理だと判断した。しかし、仕込みは忘れない。

「ただ、僕は君の事を友達だと思っているし、



君のことを一番よく理解してあげれるつもりだ。  
何か困ったことがあったら僕を呼んで。  
いつでも力になるよ？君のためならね……」

周波数を調整し、スツと彼の前から姿を消した。

「キグナス……ごめんね？」

けど、友達もいない私に優しくしてくれた天地さんを……  
私は信用してみたいんだ……」

天地研究所から一台の車が走り去って行く。

宇田海が帰宅した証拠だ。今この建物に残っているのは警備員ぐら  
いだろう。

その屋上で、キグナスは頭を落としていた。

「まったく、いつになったら任務につけるのやら……君もこれか  
ら大変だよな？」

後ろを振り返ると、そこから声が返ってきた。

とても低く、威厳を感じさせる。

「気付いていたか」

「まあね。君の周波数は特殊だからね。姿を現したらどうだい？」  
「声が聞こえるんだ。必要ない」

キグナスの要求にはまるで応じる気が無いようだ。

「フフ、まあ良いや。これで、今地球に来ているのは3人か……」

「じきにリブラとオヒュカスが来る」

「あの二人を？流石は星王様。容赦が無いな・・・  
いや、君を派遣している時点で、本気と言うことか・・・」

キグナスは一人冷たい笑い声を上げた。

これから地球人へ襲いかかる事態を考えると、残虐な遺伝子が騒ぐのだろう。

「じゃあ、彼らが来る前に手柄をたてておかなきゃ。君も良い傀儡が見つかるの良いね？」

「貴様と一緒にするな」

「え・・・？君は、いつここに来たんだい？」

「昨日だ。貴様も屑なりに、せいぜいあがくんだな」

周波数が消える。それを感じ、歯ぎしりを浮かべた。

「大丈夫だ、焦ることは無い。あれさえ取り返せば・・・」アンドロメダの鍵”！」

憂鬱。今のスバルにはこれしかなかった。

約束の土曜日、スバルはアマケン行きのバスを待っているところだ。

「いやなら止めりゃあ良いじゃねえか？」

「約束を破るわけにもいかないよ」

人嫌いな彼だが、こういうところは妙に律儀だ。

生来の優しい性格が彼をそうさせているのかもしれない。

そうしている内にお目当ての物が来る。  
彼が乗りこむと、さっそうとバスは地面よりわずか上を走り出した。

そして、その様子を見守っている大中小の影・・・

「計画通り・・・」

3人の目がキュピーンと光を放った。

走り去って行くバスを背にして、スバルは感嘆の声をあげた。  
初めて来たその場所は、彼が想像していた以上の物だった。  
汚れなどほとんどない白い壁が、小さい飛行場を思わせる広い敷地を囲っている。

門をくぐってまず目につくのが、巨大なロケットだ。

周りには、巨大なアンテナが数え切れないほど設置されている。

一つ一つの直径は、大の大人が両腕を広げた物よりも大きい。

隣には6、7階ほどのビルが建っている。

一つの階に何部屋あるのか数えるのが億劫になりそうだ。

「あ、来たね？」

アンテナの一つ、そのすぐ近くに天地はいた。

職員との会話を終え、こちらに近づいて来る。

いつもと同じく、青い制服とキャップだ。

門前に掲げている看板と同じく『AMAKEN』の刺繍がどちらにも施されている。

「来てくれてうれしいよ」

「・・・こんにちは・・・」

「さあ、今日は僕が研究所を案内してあげるよ！」

明るくふるまう天地と違い、相変わらずスバルのテンションは低い。しかし、やはり宇宙に関する施設が近くにあるためか、少々顔は明るくなっていた。

「まずはこれだよ！君に見せたかったものだ。アマケンのシンボルなんだ」

先ほどの大きなロケットに近づく。見上げた首が痛くなりそうだ。

「これは、”アマケンタワー”。本物のロケットを利用したアンテナなんだよ？」

「え、アンテナ？」

「ああ、ロケットの通信機能を利用してね。宇宙に通信を送っているんだ」

天地の大きな手が後ろから両肩に置かれる。

「実はね・・・この通信は、大吾先輩宛てに送っているんだよ」  
「・・・え？」

耳を疑った。スバルは天地を振り返った。

先ほどの物とは違い、目は落ち着きとわずかな輝きを秘め、アマケンタワーを見上げていた。

「僕は信じない。あきらめないよ。君のお父さんは絶対に生きている。」

探して見せるよ！何年かかってもね・・・」

それは自分と同じ志だった。

肩が少し痛い。無意識に力が入っているようだった。

しかし、それが嫌だとは思えない。

むしろ、頼もしく、暖かいかいとさえ感じていた。

なにより、見上げた天地の目には、星があった。

希望と信念に満ちた者が放てる。力強い輝きだ。

それが、彼の不思議な魅力の秘密なのかもしれない。

そして、一人、ウォーロックだけは沈黙を保っていることには気づかなかった。

「さて、気を取り直して次に行こうか？」

「・・・はい」

天地に振り返った時、視界の端に嫌な物がちらついた。

「・・・え？」

気のせいだ

振り向くな

逃げろ

そんな文字群が頭の中を走る。

しかし、理性は本来、本能を抑えるためにある。

よって、スバルの首は90度回ることになる。

金色の縦ロールがまつすぐ近づいてくるのを認識し、自分の理性を恨むことになる。

「あら、スバル君じゃない。寄寓ね」

ご存じ、委員長トリオである。

ゴン太とキザマロがしっかりと横についており、綺麗な大中小となつて並んでいる。

「スバル君の友達かい？」

違うと言う前に、ゴン太が後ろから羽交い絞めにする。

「今日こそ逃がさねえぞ？」

太い腕が首と口を塞ぎ、言葉が出せない。

「スバル君、ここに来るなら一言声をかけてくださいよ？僕ら友達じゃないですか？」

もごもごと言う呻きも、キザマロのナイスな演技で消されてしまう。そのおかげで、ゴン太の口封じが、じゃれているだけのように見えたらしい。

天地は笑いながら3人のやり取りを見ている。

「はじめまして、おじさま。私は白金ルナ。スバル君のクラスの学

級委員長です」

「やあ、ご丁寧にも。そうか、学級委員長なのか？スバル君の事を頼んだよ？」

「はい！お任せください。スバル君のこと、ほっとけませんから！」

「ははは、頼もしいな」

止めにルナの猫かぶりだ。優しい女の子オーラがキラキラと散りばめられている。

スバルが反論する空気ではなくなってしまった。

「なんだ、ちゃんと友達がいるじゃないか？よかった、ちょっとホツとしたよ？」

よし！今日は君たち4人を案内しよう！」

「本当ですか！？」

「ばんざーいです！」

「うまい物でるかな？」

ルナに苦い顔をさせるゴン太の発言にも、天地は元気で結構と大口で笑い返した。

そんなすぐそばで、スバルは再び肩をがっくりとさせている。

今日の朝以上だ。

「なんでこうなるの？」

「へっへっへ、もてる男は辛いね〜？」

地球に来て、冷やかしいものを感じたようだ。もう絶対にテレビは見せないと誓いを立てた。

## 第二十話・企み（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。  
感想やアドバイスをいただけたら幸いです。

前回の後半からずっと暗かったので、  
今回の最期は明るいギャグパートな感じにしました。  
笑っていただけましたか？

### 次回予告

アマケンを案内されるスバル達。  
その中で、宇田海は悪夢を見る。  
ほくそ笑むキグナスがそんな彼に囁きかける。  
この世の本質とは何かを……

次回、第二十一話『この世の本質』

次の話も見てください！



## 第二十一話・この世の本質（前書き）

ユニークPVが2000を突破しました！  
読んでくださっている方が居る。

そう思えると、これからも書こうと言つ気になります。

この文章を読んでくださっている皆様、ありがとうございます。

では、第二十一話をどうぞご覧ください。

あらすじ：

しぶしぶ天地研究所を訪れたスバル。

天地が見せたかったものは、今も父を探している巨大なアンテナだった。

天地の人柄に少しばかり心を開いたところで・・・トリオに襲撃される。

彼女らの巧みな作戦により、4人で研究所を回ることになる。

## 第二十一話・この世の本質

天地研究所。通称アマケン。

元NAXA職員だった天地が立てた研究所だ。

高い技術力と、豊富な研究成果で、NAXAとの共同プロジェクトを手掛けたり、

サテラポリスから捜査協力を依頼されるほどだ。

そんな研究所が、観光客相手に作った展示品。

好奇心旺盛なこの年頃の子供達を夢中にさせる。

無料で招待してもらったスバル達4人は一つ一つを丁寧に見て回る。

「おお、すげえ！」

「うわあ・・・」

ゴン太とキザマロは目の前で動く何かに興味津々で行った感じだ。

行儀が良いとは言えないだろうが、目の前の展示品は子供心をこれでもかとくすぐる。

「おい、スバル！お前も見てみるよ！」

「う、うん」

首根っこを掴み、小柄なスバルをひよいと片手で持ち上げる。

「スバル君は、あまり興味ないのですか？」

「いや・・・宇宙は・・・好きだよ？」

「お、そうなのか？」

「じゃあ、あつちのあれ！書いている内容分かります？」

「ああ、これは・・・」

男二人に挟まれ、ゆっくりする暇もなく次々と連れ回される。大好きな宇宙について二人に解説するものの、めんどくさがさが先に来てちよつと憂鬱そうだった。

ちなみに勤勉なルナは、男二人のテンションについて行けず、一人で見て回っている。

しかし、三人が必ず視界に入るように移動する速度は合わせている。いざというときは注意するつもりだろう。

この辺が、彼女の責任感の強さを表している。

そんな四人の様子を、天地は少し離れたところで見守っていた。

「で、で！これは！？」

キザマロも知識を吸収するのが好きな少年のようだ。

次から次へと、興奮を隠しきれないように質問してくる。

スバルもだいぶ慣れたようで、先ほどよりも丁寧に答えてあげていた。

しかし、ゴン太だけは二人から距離を置いた。

お腹が減ったのだろう。興味が薄れてしまったようである。

「こういうときは・・・非常食、牛丼クッキー！」

原料が米なのか小麦なのか、良く分からない品名だが、ポケットから取り出した物はどうやらクッキーらしい。

口に放り込もうとした時、それはひょいと長身の男に取り上げられた。

「ちよつと君、ここは飲食禁止ですよ？」

「お、おい！返せよ！俺のクッキー！？」

「ゴン太、うるさいわよ!？」

ルナが騒ぎを聞きつけ、高い声で怒鳴りつける。

「宇田海、どうしたんだ？」

騒ぎを聞きつけ、天地が駆けつけてくる。

スバルとキザマロも後に続く。

「この子が、これを食べようとして……」

「ゴン太、あんたが悪いわ!」

「……ごめんなさい」

駆けつけた時には、ゴン太が素直に謝罪しており、宇田海もクツキ  
―を返してあげていた。

その職員に見覚えがあった。

「あ、宇田海さん」

「え？あ、ああ……えつと……スバル君でしたっけ？」

「スバル君の知り合い？」

ルナが尋ねてくる。

「皆にも紹介しておくよ。彼は宇田海君。僕の助手をしてもらって  
いるんだ」

天地に紹介され、高いところにある頭を気持ち程度に下げた。

「助手って言うことは、すごい発明とかしてるんじゃない?」

キザマロの言葉にぎくりと反応する。体が縦に大きいのですぐに分かる。

「あ、あの・・・僕はこの辺で・・・他にも仕事ありますし・・・」  
「ああ、ありがとう」

「いえ・・・それと、この前頼まれた『酸素供給装置』の取り付け終わりました。

実験結果も上々。実用には充分だと思います」

「そうか・・・なら、もう実用段階だね？」

「誤作動が起きる可能性があるかもしれません。

何度か実験して、安全性を確かめないと・・・」

「だったら、まだ稼働はさせないでくれ。

今日の夜にでも、また実験してみよう」

「はい、それでは・・・」

スバル達には分からないが、どうやら仕事の話らしい。

簡単な報告を済ませ、宇田海は近くの装置の点検へと向かって行った。

「所長さん、俺腹減った・・・」

「すまないね？食堂は１１時からだから、後３０分後だね？」

３０分。食いしん坊なゴン太には途方もない時間だ。

絶食しろと言われているようなものだ。

「えええ！？そんな、困るよ！」

「ゴン太！所長さんが、せっかく案内してくださっているのよ！失礼でしょう！？」

「うう・・・」

小学生の失礼などかわいいもの。天地はそう思っているのだろう。素直なゴン太とお説教をするルナのやり取りを見て、豪快に笑っていた。

「ごめんね。もうちょっと待ってくれよ？」

天地の優しい対応を見ても腹は膨れない。食事を愛するゴン太は、胃袋の訴えを受けて涙目だ。

「うん・・・そうだ！後で僕の研究室を見せてあげるよ？」

「ほ、本当ですか！？」

声をあげたのはキザマロ。ゴン太は「そんな事よりも」と言いかけ、ルナに足を踏まれた。スバルも興味があるようで、天地が次に何をい出すのか気になっている様子だった。

それを聞いているのがもう一人。すぐ近くで作業をしていた宇田海だ。

「ああ、最新の研究成果もあるんだよ。特別に見せてあげるよ」

手が止まる。助手である宇田海の研究成果は、天地の研究室に保管されている。

まさかという疑惑が心臓を直接掴まれたかのような痛みを与える。色々な意味ではしゃぐ、賑やかな小学生四人を引き連れ、天地は得意げにその場を後にした。

「いや、大丈夫だよ。天地さんは違う・・・はず・・・」

11時になり、ゴン太が吠え、ルナが唸り、食事の時間となる。それぞれの食事を終えた時、天地がここのお土産名物を持って来てくれた。

流星饅頭というそれを、もちろんゴン太が口に頬張る。

しかし、スバルにはちよつと手が伸びなかった。

「あれ？スバル君は甘いのが嫌いなのか？」

「いや、嫌いじゃないけれど・・・カレー食べた後だから・・・」

白いトレーの脇には、大嫌いなニンジンがしつかりと避けられている。

「おいしいですよ？」

「ぶわなぎゃぞんだじょ！」

「ゴン太、食べながらしゃべらない！」

「ちなみに、僕の解析では、今のゴン太君は『食わなきゃ損だぞ』と翻訳されます」

「いつも通りの解説、ありがとうキザマロ」

スムーズな3人のやり取りだ。

「キザマロ君は、ゴン太君の解説役なんだね？」

「はい。分析と調査ならお任せください」

小さい胸をグンツと張ってみせた。

体は小さいが、情報収集力と解析能力は高い。

ゴン太とは対称的な面でもルナ学級委員長を補佐するのが彼の役目だ。

しかし、今の微細な変化には流石に解析できていなかったようだ。

「と、言うわけで、水汲んできますね？」

横目で隣の巨漢を見ると、その数秒後にゴン太の顔が青くなる。

「どうやら、喉に詰まらせたらしい。」

「私も行くわ。スバル君もいる？」

「あ、ありがとう。委員長さん……」

「委員長で良いわよ？」

「あ……なら……委員長……」

それに気付いているのかいないのか、天地は四人のやり取りをただじっと見守っていた。

彼の顔から笑みが消えることはなかった。

食事を終えて、天地の研究室へと足を踏み入れる。

大小の大きな装置が並べられ、機械の部品やスパナなどが床に置かれている。

「どうやら、片付けもそこそこに作業を進めているらしい。研究者の忙しさを物語っていた。」

大きなモニターが設置され、その周りにもパソコンなどの機械が並んでいる。

本棚には難しそうな本が並べられており、中にはアメロツパ語で書かれているものもある。

その向かいの壁には、なにかの設計図が貼られている。

隣には、宇田海の発明品、『フライングジャケット』が掛けられて



いた。

装置を見て、訳が分からないと言う顔をしているゴン太のそばをスバルは通り抜ける。

その時、巨大モニターの脇にある一枚の絵に目が止まった。

「あの・・・これって？」

「それかい？僕が三日徹夜した時に見えたんだ！

妖精か何かかな？それを模写したんだけど、結構かわいいだろう？」

「そ、そうですね・・・」

トランサー内でも、ウォーロックが笑いをこらえているのが分かった。

カタカタとちよつと動いている。

スバルもあいまいな笑みを浮かべ、ビジライザーをかけると、

描かれた自分の姿を見て、ゲラゲラと笑っているデンパ君達がいた。

216

そんな様子を、宇田海は大きな装置の隙間から見ていた。

作業から戻ったら、偶然この場と遭遇したのだ。

疑ってはいけない。天地を信じる。

そう決めたはずなのに、いざとなると、足が動かなかった。

聞き耳を立て、こそこそと隠れてしまっている。

「あれ・・・か？」

キザマロが壁の一面を指差している。どうやら、何かについて質問しているようだった。

壁の位置を見てぎよつとする。

装置の隙間からでは見えないが、そこは、自分の発明品がある場所だ。

おそらく、キザマロは自分の装置について質問している。

「そ・・・、最新・発・品で・・・、」

おそらく、『最新の発明品』と言っている。自分の発明品も最新のものだ。

目を少し横に動かす。目元は見れないが、天地の鼻の途中から腰辺りまでが見えた。

すこしずつ、彼の目に疑惑が含まれ始める。

「『・ケット』だよ」

『ジャケット』。確信した。自分の発明品だ。

心音がどんだん大きくなっているのが分かった。頬を伝う汗が冷たく感じる。

「僕の発・品・よ」

身を引き裂かれるような言葉だった。

天地は、彼の目の前で断言したのだ。

ジャケットは自分の発明品だと。

自慢げに話す天地の口が、悪意に満ちているように見えた。

少なくとも、今の宇田海には悪そのものだった。

「同じです！これじゃあ、あの時と同じです！！」

ポリウムのある髪をかきむしり、宇田海は屋上で一人、叫んでい

た。

「『信用している』と言ってくれたじゃないか!?!  
だから、私も信用しようとしたのに!?!

『知ることから、信用から始めるブラザーだってあっても良い』  
つて、

言っただじゃないか!?!」

答えは返ってこない。

彼の悲鳴に似た叫びが、ただ広い世界に無情に吸い込まれ、消えていく。

「だから言っただじゃないか? 『誰も信用なんてしちゃダメだよ』  
つて」

見計らったように、そいつは再びその場に現れた。

「これで分かっただろう? 『裏切りこそがこの世の本質』なんだよ  
?」

「キグナス!...ごめんよ、私が間違っていた...」

ほくそ笑んだ。あの疑い深い彼はもうどこにもいない。  
もう誰も信用できない。

できるのは、友人だと言い聞かせて来たこの得体のしれない異星人  
のみ。

ようやく機会が来た。

「さあ、宇田海。僕を受け入れるんだ。復讐してあげよう?」

あの天地と言う上司に。君を裏切った奴に？」

雄大に両翼を広げると、宇田海も両手を小さめに広げた。来いと言  
うように。

キグナスの体が白の塊に変わり、吸い込まれていった。

宇田海の中。心を司る場所。

一心同体となつたキグナスは、そこに侵入した。

ゆらゆらと歪み、形を変え続け、いつ崩れてもおかしくないその不  
安定な世界は、

人の心そのものだ。

今、この世界の色は黒と紫が混ざつたようなものだ。  
常に配合の比率が変わっているようで、色彩に変化が出ている。

イヤダ・・・ウラギリナント・・・ダレモシンヨウデキマセン・・・

中央に、周りと呼応するように色を変える小さな球体が一つ。

いや、これに合わせて、周りが変わっている。

そこから声は上がっていた。

宇田海の心理そのものだ。

小さいそれは、体の持ち主の心そのもの。

ガラスの用に脆そうだ。

「大丈夫だよ。君は、僕の言うことをただ聞いていれば良いんだ・・・  
フフ」

それを前にして、キグナスの目が鋭くなり・・・  
躊躇なくそれを破壊した。

赤黒い破片が飛び散り、霧散した。

「フフ・・・フハハハハ！！」

心を破壊され、自我の制御を失えば、もはや人間ではない。FM星  
人の傀儡にすぎない。

憎しみは憎悪へ

憎悪は復讐へ

宇田海を導く

陥れる

「大丈夫だよ？僕は君の理解者だ。僕にまかしておきなよ？」

感情の見えない不気味な目で、宇田海はただ一度、首を大きく縦に  
振った。

## 第二十一話・この世の本質（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。  
感想やアドバイスをいただけたら幸いです。

次回予告！

遂にキグナスに取りつかれてしまった宇田海。  
悲しみは憎しみに、復讐へと変わる。  
留まるところを知らなくなった復讐の刃が、  
天地とスバル達に襲いかかる！

次回、第二十二話『本当の来襲』

次の話も見てください。

第二十二話・本当の来襲（前書き）

あらすじ

ブラザーだと信じていた天地に裏切られ、  
キグナスを受け入れてしまった宇田海。  
彼の復讐が今始まる・・・

## 第二十二話・本当の来襲

アマケンのシンボルがロケット型のアンテナなら、  
目玉施設は疑似宇宙空間と言える。

本物の宇宙服を着て、重力も酸素も無い真つ暗な空間を浮遊するツ  
アーだ。

そこに、スバル達はいる。

案内役の『ツラガマエ ミトレ』と言う名の女性スタッフに連れら  
れ、

展示品となっている惑星の模型を見て回る。

「さうで、ここで問題！この土星のワツカは何でできているのでし  
ようか!？」

「はい！大きいドーナッツ!」

爆笑が起きる。スバル以外のお客さん達が、ゴン太の可愛らしい（  
?）回答に笑っていた。

その横で、ルナが困った顔をし、キザマロが苦笑いをする。いつも  
のトリオの光景だ。

代わりにと指差されたのはスバルだ。

周りの目が一斉に向けられる。

大勢の人の前にさらけ出されるなど、不慣れな事だ。

「え、えと・・・塵と氷が集まっていて、それが輪のように見える。  
・・・だつたはずです。」

宇宙大好き少年のスバルには簡単すぎる問題だったが、たどたどし  
く答えた。



「正解！」

途端に称賛の声が上がり、簡単な拍手が起こる。

「スバル君、すごいじゃない！」

「流石ですね？」

「見直したぜ！」

ルナ達も次々とスバルを褒めていく。

別段、悪い気持ちはしなかった。

説明を終えて、次の惑星へと案内される。

スバルも付いていき、移動するわけだが、肩に置かれた天地の手に首を曲げた。

「どうだい、楽しいかい？」

「え……ええ、まあ……」

「ふふ、大分良い笑顔になったよ？」

天地とは正直言っあまり自分とは関係の無い人だ。

父親の後輩だったらしいが、ただそれだけだ。

家族ではない赤の他人。

ただのおせっかいなおじさんだ。

でも、それは最初の話だ。

今は違う。

悪意の欠片も無い笑い顔を見ると、照れくささが出てしまった。そうしている内に、次の展示品に追いついた。

「さて、次は……」

「僕がシヨールを見せてあげますよ？」

「・・・え？」

和やかな雰囲気はたったの一言でかき消された。

ざわめきが参加者達に広がり、きよろきよろとあたりを見回す。

パニックにならないよう、ミトレは制止しようとするが、遅かった。一人が指差した先を見て、彼女の思考までもが停止してしまったからだ。

皆がその一点に釘づけにされ、息を飲み込んだ。

「宇田海君!？」

この部屋の中央に設置されている投影装置。

疑似宇宙空間をより宇宙に似せるための役割を果足している丸い球体だ。

球体を支えるように、ディスプレイと操作パネルが取り付けられている。

その一番上に天地の助手の宇田海が立っていた。

それだけならまだ普通の光景だ。しかし、常識から逸脱した彼の姿が、怖れを放っていた。

この空間で、宇宙服を着ずに生きていられる人間などいないのだから。

「宇宙服は!?!なぜ無事なんだい!?!」

落ち着けと自分に言い聞かせていた。しかし、自分の意識はなかなか思い通りに行かない。

生気を感じさせない、その代わりに憎しみのみが込められたその目

は、人の物とは思えない。  
それが、天地の精神を不安定にさせる。

「そんな物いりませんよ。僕はあなたのおかげで生まれ変わったんです。」

あなたに裏切られたおかげでね?」

宇田海から天地へ視線が移された。

ツアー参加者達が所長を指差し、ひそひそと疑惑を口に出している。

「裏切った?生まれ変わった?」

「裏切りは心当たりがあるでしょう?そして・・・生まれ変わった私を見せてあげます!」

宇田海の細長い左手がまっすぐに上に掲げられる。

「電波変換 うたがいしんすけ 宇田海深祐 オン・エア!」

まばゆい白い光が宇田海の全身から発せられる。

「電波変換・・・つて!?!」

「スバル、おいでなさったぜ!」

スバルの目の前で起きた現象。自分とウォーロックとの間で行われている物と同じだ。

光が収まった時、中から現れたのは・・・怪人だった。

青色がメインとなった服装に、頭には白鳥の頭を模したかぶり物。

なにより、背中には白い翼が大きく広げられていた。

鳥人間。

おそらく、彼を見たときに誰もが持つ印象だろう。

「キグナス・ウィング。僕の新しい名前です」

次々と起こるあり得ない現象。

混乱に陥ったツアー客達が我先にと出入り口のあった地球の模型に殺到していく。

案内役もあたふたとするばかりだ。

しかし、鍵がかかっているらしく、押せど引けども開く気配が無い。ルナの指示で、ひと際質量のあるゴン太がやってみるが、びくともしない。

そんな彼らをよそに、天地は宇田海だった人物と向き合う。

「宇田海君？その格好は？」

「言ったでしょう？僕は生まれ変わったんです。

さあ、人間どもよ、苦しむがいい！シタツパー！」

キグナス・ウィングが両手を上に仰ぐと、どこからともなく、黄色のひよ子のような鳥達が現れる。

数は十は下らない。悲鳴を上げる観客達へと襲いかかって行く。

ルナが両手をめいっばい前につき出す。それがシタツパーを押し返すはずだった。

手をすり抜け、体を通り抜け、途中で消えてしまった。

他の客達も同じだ、次々とひよ子達に襲われるものの、人体に危害を加えることなく姿を消していく。

そして、天地とスバルにも。

「宇田海君、何をしたんだい？」

「あまり騒がない方が良いでしょう？あつという間に・・・無くなり

ますから？」

ざわめく客達をよそに、冷静に対処しようとする天地だからこそ分かった。気づけた。

彼の責任感が肺から一気に空気を吐きだす。

「皆さん！呼吸を落ちつけて！体を動かさず、浅く呼吸してください！」

「ばかやろう！落ち着いてなんていられ・・・」

「酸素が無くなります！」

反論しようとした若い男性客を声で押さえつける。

「彼は、私たちの酸素ボンベに細工をしたんです！どっという理屈かは分かりません！」

しかし、その可能性が高い！」

天地はキツとキグナス・ウィングを睨みつけた。

それに、不敵な笑いを浮かべ、気持ち程度の拍手を返した。

「流石は天地さん。すばらしい、正解です。

人を騙すだけあって、心を読むのが得意な様子だ」

その言葉に、また一同はパニックに陥る。

司令塔を失ったアリ達がバラバラになるように、逃げまどうように。しかし、またも天地が大きく叫ぶ。

今度は案内をしていたミトレも止め、ルナもゴン太とキザマロに指示を出し、

それを手伝おうとする。

「大丈夫です！異常を感じた外のスタッフ達が救援に来てくれるはずです。」

今は、私の言うとおりに呼吸をしてください。」

「天地さん、あなたは甘い。それでどれだけ持ちますか？」

皆ここで窒息死すると言う運命に変わりはありませんよ？」

不安を煽る。それに、天地とさっきのスタッフが冷静に対処している。

「皆さん、落ちつ……うう……」

「所長？」

天地の様子に、ルナが気付き、そばへ寄る。

「はっはっは！偽善者ぶって、大声出すからです！もう酸素が無くなった！」

キグナスの言うとおり、天地は青白い顔をし、目を見開いていた。呼吸が段々浅く、早くなっていく。

「皆さん！落ち……着いて……ください……。僕、みたい……なり、たく……」

「所長さん、もうしゃべらないでください」

天地の声が聞こえなくなる。ハアハアと言うか細い呼吸音だけだ。

それをみて、ようやくツアー客達の混乱が収まり始めた。

自分に襲いかかる顛末をみて、汗が冷えたのだろう。

結果的に、皆を落ちつける形となった。

その様に満足したのか、キグナスの体が白い光に変わり、投影装置へと入って行く。

暗くなっていたディスプレイが光ると、中にはキグナス・ウィングの顔が浮かび上がる。

「僕はここからゆっくりと眺めさせていただきます。皆さんが苦しみ、もたえる様をね？」

「さあ、天地さん、踊ってください。死のダンスを。フフフフフフ……」

静かに響く、背筋が凍りそうな笑い声。自分達の命を握っていると語っていた。

「宇田海、君……なぜ？僕が裏、切った……って？」

「まだしらばくれますか？……」

「は、話して、くれ！きつと、誤解、だ……」

「そうやって……そうやって、あなたは甘い顔をして人を騙すんです。」

「……もう、騙されない……」

それでも、決死の思いで訴えかける天地の言葉。しかし、キグナスに……宇田海には届かない。

一連の流れを、スバルは展示されている惑星の一つの裏から見ていた。

ウォーロックの手には大きなタンコブをつけたシッターパーが握られている。

「スバル、やるしかねえぞ？」

「……うん！あの機械の脳内だよな？機関車や車の時と同じで

「?」  
「ああ。そうだ」

天地をもう一度見る。女性スタッフとルナが心配そうに覗きこんでいる。

「どうやら、かなり危険らしい。」

「助けなきゃね!絶対に・・・」

「まただ」

大吾と同じだ

なぜ?

「ロツク?ウォーロツク!」

「あ?」

「あ?じゃないよ!?電波変換!」

「お、おお、すまん!」

「行くよ!」

「おう!」

「電波変換 星河スバル オン・エア!」

一着の宇宙服が、展示品の影に隠れて漂っている。中身が無いその存在には、誰も気づかなかった。



## 第二十二話・本当の来襲（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。  
感想やアドバイスをいただけたら嬉しいです。

この場面、原作では中途半端に笑える展開だったので、  
ちよつとシリアス風に変えました。  
ちなみに、シタツパーの出番はこれで終わりです。

次回予告！

天地を救うために電波変化したスバル。  
キグナス・ウイングと電脳内で繰り広げられる激戦！  
空を味方につける強敵を相手に、彼らに勝機は！？

次回、第二十三話『白鳥舞』

次の話も見てください！

## 第二十三話・白鳥舞（前書き）

あらすじ

キグナス・ウイングとなった宇田海の襲撃。  
天地を救うため、スバルは電波変換を行う。

## 第二十三話・白鳥舞

投影装置の電脳に広がる空間。

外の展示品である惑星を模した、大小の丸い物体が浮いている。その中の一つの上に、そいつはいた。

キグナス・ウイング

天地に裏切られた宇田海が、FM星人のキグナスと電波変換した姿だ。

空に写されたモニター、そこには酸素を求めて苦しんでいる天地が映し出されている。

ルナと、案内役をしていたスタッフが心配そうに覗きこんでいるが、気休めでしかない。

二人に、天地を助けることなどできないのだから。

酸素を分けようにも、シッター達が酸素ボンベの本来の役割を阻害している。

なにより、自分たちとて、いつ彼のようになるのか分からない。どうにもならない。

彼を救う方法は外で救出活動をしてくれているであろう、アマケンスタッフに善戦を期待するか、

ここにいる一組が行動するかだ。

「宇田海さん！」

「誰です？」

悲痛を含めたスバルに宇田海が振り返る。

スバルだとは気づいていないようだ。

バイザーが付いたヘルメットを被っているからだろう。

なにより、自分以外に電波変換ができる人物がこの場にいるなど、まず考えない。

宇田海の隣にキグナスが姿を現す。

「ウォーロツク、君かい？」

「ああ、そうだ！こつちから来てやったぜ！？」

「フッフ、僕も運が向いてきたな。君を倒せば・・・

”アンドロメダの鍵”が手に入る！一番手柄だ！！」

昨日までの事が嘘のようだ。

これなら、自分を肩呼びわりのした『あいつ』の鼻を明かすこともできる。

堪え切れない笑いを、静かに漏らす。

「宇田海、あいつは邪魔ものだ！排除するよ！？」

「分かりました」

キグナスが体に戻ると、宇田海・・・キグナス・ウイングが大きな翼を広げ、空に舞う。

「スバル、迷うなよ？」

「うん、大丈夫だよ。天地さんや委員長達を助けなきゃ！」

「・・・ああ」

やっぱりなとウォーロツクは呟いた。

しかし、スバルには聞こえない。

全神経を、空中に浮かぶそいつに向けていた。

「キグナスフェザー！」

翼をこちらに向け、3、4枚の羽を飛ばしてくる。スバルは大きく空に飛びあがり、惑星の一つに飛び乗る形で回避する。

さっきまでいた場所からは爆音が響く。

見ると、着弾点の床はえぐれ、その威力を物語っていた。

「ロックバスター！」

ウォーロックの口から発せられる光弾。

キグナスは少し飛ぶ速度を上げて、綺麗に避けた。

白鳥が舞うかのように、足場の無い世界を、縦横無尽に駆け巡る。

「早い！？」

「まだまだ！」

再び羽が飛んでくる。

キグナスから隠れるように、惑星の向こう側へと飛び降りた。

「バトルカード ホタルゲリ」

足場にしていた惑星を蹴り飛ばす。

羽は球体を粉々に破壊した。

崩れ行く星の向こうから複数のミサイルが飛び出してくる。

ロックオン機能を持ったレーザーミサイルは、

高速で飛ぶキグナス・ウィングを追いかけてくる。

「厄介なバトルカードを・・・」

回避に徹する。だから気付かない。スバルの本当の狙いに。

「ぐう！」

数発の弾丸が腹と翼に突き刺さった。  
バルカンシード。

無数の弾丸を放つ代わりに、射撃精度の低いそれは牽制程度の物だった。

しかし、運よく数発が命中した。

一瞬の減速がミサイルの追従を許してしまう。

「くそ！」

追いつかれる寸前で、翼をミサイル達に向ける。  
直後に、幾つもの爆発が襲う。

「やった!？」

「・・・いや、まだだ！」

爆発から白い翼が飛び出した。

思った以上に傷はついていない。

爆発からは見え無かったが、彼はミサイルに向けた翼から羽を打ち込んだのだ。

当たる前に爆発したため、受けたダメージは爆風だけだ。

体に少し焼け焦げた跡があるが、大したものではないらしい。

「ワタリドリ！」

黒と白のシタツパー数体を放ってきた。

三方向から襲いかかってくる。

バスターを打ち込み、一体一体を撃ち落とす。

しかし、黒だけが弾丸を跳ね返した。

止む負えず、左から迫るそれを避けるため、右に体を持つていく。後ろにある模型の影から現れたキグナス・ウィングが笑みを浮かべる。

刃のように尖った翼を広げ、風を切るようにスバルに突っ込んだ。重さは無いが、スピードはある。加えて大剣と化した翼が背中に食い込む。

「うわああ!」

車にはねられたらこんな感じなのだろう。

世界は上下左右を失い、重力を感じさせない。

体を止めたのは惑星の模型だ。

破壊しながら、地の上に叩きつけられた。

熱い。そう感じた背中からぬるりという感触が伝わってくる。

斬られると、痛いではなく熱い。

そう感じるのかと、一生に一度でもしたくない学習だった。

身を起こすと、相手は再び空から羽を撃って来ていた。

「バトルカード クラウドシュート!」

スバルの周りに雷をまとった雲が数個現れる。

キグナスに向けて腕を振ると、その方角へと飛んでいく。

羽とぶつかり合い、それらは溜めていた雷を放出していく。

黄色い大量の筋が重なり、まるで壁のようにキグナスの前に立ちふさがる。

その眩しさに、本能的に手で視界を塞ごうとしてしまう。戦闘においては自殺行為だ。

「ゴーストパルス!」

リング状の光線が空に放たれる。

「が、ガアアアア！」

脳がひっかきまわされたように痛い。

バランスを崩し、翼をもがれたかのようにまっすぐに落ちて行く。

「ロングソード！」

ウォーロックが、長剣へと形を変える。

地に落ち、起き上がったキグナス・ウィングは長い手で殴りかかる。しかし、まだ足元がふらついている。

リーチ差を消した剣が腕と腹を切りつける。

「くっそ！」

「スバル、もつとだ！」

地面に降りている今が好機。それでもかど左手の剣を叩きこむ。翼を盾代わりにし、拳で反撃する。

耳元を過ぎる拳の風切り音に毛押されながらも、手は休めない。

苦しむ天地を支えていたルナは、異変に気付いた。

先ほどから宇田海が何も言っていないのだ。

天地を侮辱する言葉どころか、あの笑い声すら聞こえない。

「あ、あれは……」



モニターに目を向けて、ようやく闘っている者の存在を確認した。

「・・・ロックマン様？夢じゃなかったの!？」

怪人と化した宇田海と懸命に斬り合っている青い少年の姿があった。少年と感じた理由は体格差だ。

背の高い宇田海だが、それと比べても、ロックマンの身長は大人とは言えない。

「ロック・・・マン？」

天地が聞き返す。もう目も開けていられないのだろう。額には汗が湧きあがっている。

「宇田、海君と・・・闘っ、てい・・・るのか？」

「ええ、そうみたいです。私達を、助けようとしてくれているのかしら？」

天地はかるうじて開いた目から、画面を見る。

小さい体で、宇田海に立ち向かっている。

「こうして、は・・・いら、れない・・・よな・・・」

「天地さん!？」

「所長!？」

ルナとミトレの手を離れ、天地は体を前に傾けた。まるで漂うように、装置へと向かって良く。

「ま、待って・・・」

追いかけてよとして、ルナは違和感に気付いた。

「……………」

視界が……………暗くなって行く……………

## 第二十三話・白鳥舞（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。  
感想やアドバイスをいただけたら幸いです。

次回予告！

白熱するキグナスとのバトル！

しかし、刻一刻とルナ達にも限界が近づいて行く。

窮地に立たされた天地が取る行動とは？

キグナス・ウイング戦、ついに決着！

次回、第二十四話『白鳥墮』

次の話も見てください！

## 第二十四話・白鳥墮（前書き）

あらすじ：

繰り広げられるキグナス・ウイングとの激戦。

スバルとウォーロックは徐々に追い詰めていく。

一方、天地はロックマンの存在を知り、行動を開始する。

## 第二十四話・白鳥墮

肩から体を捻るように振るった左手の剣は、翼に受け流される。まっすぐに突き出されてくる左手を右手で払い飛ばす。もう一度斬りかかろうとした時、視界が何かに塞がれた。長い脚を活かした蹴りがスバルの顔面に食い込んだ。倒れそうになる体を、かろうじて持ちこたえ直す。

「あれ・・・いない？」

「後ろだ！スバル！！」

振り返れば、そこにキグナスの青白い顔があつた。

細く長い腕がスバルの肘裏を下から救い掲げ、空へと跳躍する。

この状態では満足に拳を振るうこともできない。ばたつかせた足で空気をかき乱す。

「は、離して！」

「良いでしょう。すぐに離してあげます・・・よ!？」

スバルを抱えたまま、頭を下にして、地面へと真つ逆さまに落ちていく。

地面に触れるぎりぎりですバルを足蹴にした。

頭から地面にたたきつけ、すぐさま空へと舞い戻る。

立ちこめる土埃の中に、マシンガンのように羽の弾丸を放った。

煙はさらに大きくなる。木星を模した惑星の上・・・最も高いところにある足場だ。

それにすたりと降り立つと、煙はここまで立ち上って来ていた。流星に生きてはいないはずだ。

「フッフ、キグナスの敵は倒しましたよ？」

「ありがとう。ところで、モニターを見てみなよ？」

”アンドロメダの鍵”が気になるが、後でゆっくり回収すればいいだろう。

キグナスのいうとおり視線を移すと、

先ほどと違ってかなりの人数が酸欠に陥っているらしい。

足を曲げ、手を伸ばし、首を抑え、もだえている。

「天地さん！いかがですか！？楽しい死のダンスでしょう！？」

「なんで・・・」

「おや？まだ生きていましたか？」

晴れて行く土煙から、シールドを頭上に掲げたスバルとウォーロックが姿を現す。

しかし、頭を強く打った影響だろう。

地にうずくまり、立つことすらできない様子だった。

「なんで、天地さんにこんなことを・・・？」

あの人に、何の恨みがあつて、こんな酷いこと・・・」

「酷い？酷いのはあの人の方です」

鼻で笑い、キグナス・ウィングは冷たい目で、正体の知れないキグナスの敵を見下ろす。

「あの人は、私を裏切ったんです。あの人は笑顔で人を騙すんです。」

「騙した？あの天地さんが？」

「ええ・・・僕が、僕がどれほど・・・どれほど頑張っていたのか・

知っているはずなのに・・・それなのに・・・」

そんなわけがない。戯言を払うように、首を振る。

「違う！天地さんは・・・そんな人じゃ・・・」

「あなたが天地さんの何を知っているんです？」

「っ!？」

今度は何も言い返せなかった。

自分は天地の何を知っている？

父親の後輩

ビジライザーをくれた人

元NAXA職員

天地研究所の所長

宇宙について研究している

30前後のおじさん

知っていることなんて、これぐらいだ。天地のことは何も知らない。まともに会話したのだって、今日が初めてだ。

いや、会話とすら言えないだろう。

天地の言葉に適当に相槌をうつただけだ。

「何も知らないくせに。・・・この世の本質は裏切りです。

あの人だって、天地さんだって例外じゃない。それも知らないくせに・・・

あなたには、天地さんのことも、裏切られた僕の気持ちも、何も分からないのですよ!」

彼の憎悪が形になったかのように、翼が大きく広げられる。

直線の軌道を描き、スバルに突っ込んでいく。

「スバル！スバル！！」

「……え？あつ、ああ！！」

ウォーロックの声に気づいて前を見た時にはもう遅い。刃となった翼が眼前に迫っていた。

「バトルカード バリア！」

翼が止まった。それは青い障壁に進行を阻まれ、再び空へと戻って行く。

「なにが起こったのです？」

あの青い少年が何かをした形跡はない。

なにより、突然展開した『バリア』に相手も驚いている。

「誰が……？」

『ロックマン！』

「……え？」



聞き覚えのある声。記憶に当てはめる作業はすぐに終わる。しかし、この答えはあり得ない。

『ロックマン、聞こえて、いるかい？ロック、マン？』

今度は声のする方向も分かった。キグナス・ウィングも顔を向ける。モニターに一人の男性の姿が映っている。

「天地さん!？」

「君・・・ロックマンって、言う、んだろ？」

宇宙服の外側に取り付けられたトランサーには、『バリア』のバトルカードが組み込まれていた。  
電脳世界にいるロックマンにデータを転送したのだ。

「すま、ない・・・僕、らの命・・・君に、託したい」

別のカードを取り出し、転送する。

「スバル、これは・・・？」

「バトルカードのリカバリーだよ」

ロックマンの体の傷が治って行く。  
斬られた背中も元通りに。

頭に来ていたダメージも嘘のように消えて行った。

『頼、む・・・助けて・・・くれ・・・』

もう、意識がほとんどないだろう。目は開いているのかも分からない。

「はは・・・この期に及んで、命乞いですか？天地さん？」

けど、開いているとスバルは確信した。天地の目に星があったからだ。

大吾を見つける。そう語ってくれた時の物が消えていなかった。

『う、宇田海・・・を・・・』

「え？」

「宇田海君を・・・助けてやって・・・くれ・・・！」

それが彼の限界だった。

ぐったりとして動かなくなる。

モニターの向こうで漂う天地を見て、

ロックマンも、キグナス・ウィングも立ち尽くしていた。

「天地さん・・・なぜです・・・なぜこの期に及んで？」

「・・・やつぱりだ・・・」

「な、何がです？」

立っている惑星から、振り返るように見下ろす。

「天地さんは・・・あなたを裏切るような人じゃない！」

「だ、黙ってください！」

羽の弾丸を放つ。しかし、さっきまでの勢いはどこにもない。スバルが右手で振るうだけで簡単に撃ち落とされた。

「宇田海さん・・・いや、キグナス・ウイング。僕はお前を倒す。そして、宇田海さん。あなたを・・・助けます！」

ゆっくりと、スバルの目が開かれる。

天地の星がスバルに宿っていた。

小さな体から発する大きな志。

目には見えないそれを感じ取り、宇田海の心が揺れ動く。

「な、なにを・・・言ってるんです？」

「ダメだよ、宇田海・・・」

キグナスが宇田海を落ちつけようとする。傀儡として保つために。しかし、その言葉には焦りが陰っている。

「だって、天地さんは・・・」

「あれも演技だよ！良い人のふりをしているのさ！」

あの・・・ロックマンとか言う奴を騙して、君を倒させて、自分が助かるために！」

かなり無理があると、キグナス自身も感じていた。しかし、今は言葉を選んでいられる暇も考える時間も無い。

「そ、そうなのですか？」

「そうだよ！きつと・・・いや、絶対にそうさ！間違いない！僕ら友達だろう？友達の言うことを、信じないの！？」

えつと・・・ほら！研究成果！あれ！守らないと！！？」

「・・・私の、フライングジャケット・・・」

「それだよ！あれを自分のものだって言ったのは事実だよ！？」

「そ・・・そうでした・・・あれは・・・間違いなんだ・・・」

フーッと息をついた。どうにか、今の状態を保つことはできた。

「さあ！闘うよ、宇田海！？君の研究成果を守るために！？」

「私は・・・負けません！あれは・・・あれは私の物だ！！」

飛びあがり、キグナスフェザーを放った。

「ロックバスター」

連続して放った弾丸と相撃ちになり、空中でバラバラになって行く。

「ワタリドリ」

「バトルカード シンクロフック！」

右手を覆ったグローブを一匹に叩きつけると、衝撃が共鳴し、全てのシッター達をたたき落とした。

側面から近づいて来ていた、キグナス・ウィングにバスターを浴びせる。

掠める弾丸を無視して、翼で斬りかかる。

「ベルセルクソード！」

『ソード』よりも、刃渡りが少し短い剣が形成される。

その分小回りのきく刃で白い大剣を受け流し、脇腹へと突き出した。ロックマンの腕を手で払い、飛びあがる。

繰り返される蹴りを、小柄な体を大地に近づけてくぐり、軸となっていた足を切り払った。

たまらず空へと飛びあがり、羽を放つ。

身を起こす間もなく背中に熱が走る。

手をついた途端に空中へと連れ去られた。

さっき頭から突き落とされたときと同じ体勢だ。

「これではあなたは何もできません！この技で終わりです！！」

背中を仰げ反るように空中で反回転する。

頭を下にした二人が真つ逆さまに落ちて行く。

体の自由を奪われるロックマン。

しかし、キグナスには翼がある。直前で退避すればいいだけの話だ。

「ロック！」

「おう！」

「・・・え？」

ウォーロックの口元に何かある。薄い、二枚の四角い物。

持ち上げられる直前にスバルから受け取り、今まで啜っていたのだ。キグナスが気付いた直後にはそれを飲み込んでいた。

同時に、スバルの右手とウォーロックの口がキグナス・ウイングを捕らえる。

「バトルカード タイフーンダンス！」

ロックマンの体が回転を始める。しがみついているキグナス・ウィングもだ。

彼の翼の空気抵抗など物ともしない。二人の体は渦を作り出し、一つの塊となる。

キグナス・ウィングが作り出した速度をさらに上げ、小さい台風となり、地面に激突した。

木の実を割った際に中身が二つに飛び散るように、空中に放り出される。

漂う一つの惑星に衝突し、翼から地面に落とされた。

「な、なんて無茶をするんです・・・」

動けない。頭を強く打ったせいだろう。

体がしびれている。翼もろくに動かせない。

だが、それは相手も同じだ。向こうも、動く気配は無い。追撃も無いだろう。

しかし、何かが引つかかる。違和感の元を探って行く。

それは相手が教えてくれた。

「ジエツ、ト・・・アタック！」

左手が鋭い体つきをした、鳥のような姿へと変わる。

そこから噴出されるバーナーがロックマンの体を持ち上げる。

ウォーロックが加えていたカードは二枚。もう一回攻撃があると言っことだ。

そして、このカードには使い手の意志や力は関係ない。

ただ勢いに任せて突っ込むだけなのだから。

力が関係ないのは、威力が強すぎて制御できないから。

大気を斬り裂くその姿はまるでライフルの弾丸。

「や、やめろおおお!!」

宇田海の声でキグナスが叫ぶ。

「止めないよ・・・僕は、約束したんだ・・・天地さんに！」

「あ、ああああ!!」

「あなたを・・・助けるって!!」

捨て身の体当たりが突き刺さり、背後の惑星をも粉碎した。  
大空へと舞い上げられた体から、折れた翼が広げられることなく、  
平行な大地の上へと横たわった。

## 第二十四話・白鳥墮（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。  
感想やアドバイスをもらえたら嬉しいです。

天地の援護は想像してやってみました。

ロックマンが電波体なら、データを転送することだってできる！・・・  
・はず・・・

まあ、突っ込まないでくださいw

原作を知っている皆様なら分かると思いますが・・・  
次の話はあの感動シーンです！

次回予告

遂にキグナス・ウイング撃破！

しかし、宇田海の疑惑は晴れない。

信用を取り戻そうとする天地につきつけられる難題とは？

この世の真理が今語られる！

次回、第二十六話『本当のこの世の本質』

次の話も見てください！



## 第二十五話・本当のこの世の本質（前書き）

超長いです・・・けど、力作です！

だって、原作の名シーンなんですから！

あらすじ：

キグナス・ウイングに苦戦するロックマン。

天地の援護と意思を引き継ぎ、ようやく撃墜に成功する。

しかし、戦いはまだ終わってはいなかった・・・

## 第二十五話・本当のこの世の本質

地に伏せた相手を見降ろした。

彼のシンボルだった翼は折れ曲がっており、もう飛ぶことはできなさそうだ。

うめき声を上げ、床に爪を立てている。

まだ息がある様子だった。

少なくとも、宇田海との電波変換は解けない。

『宇田海君・・・』

モニターを見ると、天地が顔を覗かせていた。ルナに支えられ、深呼吸を繰り返している。

「く、シタツパーの統制が・・・？」

どうやら、彼が倒れたことで部下達も消滅したらしい。

モニターの向こうでは他の客達も息を吹き返し始めていた。

『宇田海君。なんでこんなことをしたんだい？』

「・・・なんで？」

力尽きたはず、もう立てないはず。

「分かっているでしょう？天地さん・・・あなたは・・・」

にもかかわらず、徐々に拳が作られる。

胸から湧き上がってくる。

「私の研究成果を自分の物にしたじゃないか!？」  
「……え?」

『あれは、私の研究成果だ!』  
「ま、待ってくれ!宇田海君!！」

投影装置のディスプレイに映る、怪人と化した宇田海に否定を示す。

「僕は、誰かの研究成果を奪うなんて、そんな酷いことはしない!誓っても良い!」

『嘘だ!私は見たんですよ!あなたが子供達に私の『フライングジャケット』を、自分の発明だと自慢しているところを!』

「誤解よ!」

まだふらつているルナが話に割って入り、必至に叫ぶ。

「天地さんは”ジャケット”はあなたの発明品だと言っていたわよ!?!」

『見え透いた嘘を!その眼鏡の少年が訊いていたじゃないか!?!』  
「ぼ、僕が訊いたのは……」

『“ジャケット”の設計図ですよ!?!』  
「……え?」

電腦世界にこだまする少年の言葉を反復し、目を見開いていた。

スバル達が天地の研究室を見学させてもらい、宇田海が装置の隙間から様子を観察していた時のこと。  
キザマロがおもむろに壁に掛っているあるものを指差した。

「それは最新の研究成果で、『ロケット』だよ？僕の発明品だ」  
「これが、ロケットの設計図ですか？」

めいいっぱい広げて張り付けられているそれに見入っていた。  
背伸びして、小さい自分との距離を少しでも詰めようとしている。  
それを見て、天地はちよつと大きめのお腹を膨らませてふんぞり返る。

パタリとしまったドアの音には誰も気付かなかった。

「あれ？これは何ですか？」

すぐ隣に掛けられている、翼の生えた四角い機械に目を移す。

「ああ、これは僕の発明品じゃないんだ。さっきの宇田海君の発明品だよ？」

「へへ、どんなものなんですか？」

申し訳なさそうに帽子越しに頭をかいた。

「ごめん、僕のじゃないから詳しくは言えないんだ。  
ただ、すごいってことは断言できるよ？よくできてる」

より一層お腹をふくらまして見せた。

ゆっくりと首を振った。

「嘘だ・・・そんなこと・・・」

『よくできているって褒めていましたよ!?!』

「嘘だ・・・嘘だ!!」

『嘘に決まっている!そうか、君達もグルなんだな!?!私を騙そうとしているんだな!?!』

人は他人を疑えばどこまでも疑うことになる。

それは全てを知る事のできない人の性さがなのかもしれない。

底知れず人を信じようとしないうその後ろ姿から、スバルは目を反らせなかった。

「宇田海さん・・・」

「はっ、こいつは重症だな?」

「フフ、どうやっても無理だよ」

キグナスが自慢げにキグナス・ウィングから姿を現す。  
おそらく負け惜しみだろう。

しかし、いつでも逃げ出すための注意は怠らない。

「この世の本質は裏切りなんだから。人を信じる方がバカなんだよ。あの天地とか言う男はこいつを説得しようとしているようだが、無駄だよ。」

「そういう意味では僕の勝ちだね？」  
「っ！！！」

左手を突きだし、照準を合わせる。  
しかし一向に打とうとしない。

「スバル、なぜ撃たないんだ？」

「・・・撃つたら、確かにキグナスは倒せるよ？けど、宇田海さんは？」

「知るかよ。あんな奴」

スバルの意志を無視し、光を溜め始めた。

「ダメだよ！！」

とっさにウォーロックの口を押さえつけ、左手を下に向ける。

「・・・僕は、宇田海さんに・・・天地さんと分かり合ってほしい」

「・・・ちっ！お前は本当に甘いな？」

「フッフ、無駄な努力だね？」

勝ち誇った笑みを浮かべるキグナスを、ただ歯ぎしりをして睨みつけることしかできなかった。

「どうやってたら、信じてくれるんだい？」

『・・・天地さん。あなたは僕を信用していますか？』

俯き何かを考えている。表情は見えない。

「当たり前だ！信用しているさ？」

『なら！・・・マスクを取ってください！』

「・・・え？」

面を上げると、ニンマリとした笑みが張り付けられていた。

『実は、最初から酸素供給装置を動かしています。天地さんに頼まれたあの装置です』

「ああ、あれか・・・」

うなづく天地にミトレが質問を投げかけるので、丁寧に答えた。それでも彼女の疑惑は晴れない。

ツアー客達もざわざわと騒ぎ出した。

「で、でも！それが本当に実用段階でも・・・本当に作動しているのかも分からないんですよ？

第一、私達を殺そうとしていたのに、なんでそんな・・・」

『そうでしょ？見なさい！これが人なんです！』

裏切りこそがこの世の本質だから人は疑うんです！

他人なんて信用できない。信用したら、バカみたいな目に会った  
！！！！』

しまったと唇を噛みしめる。

「だっ・・・だつて！」

「・・・マスクを・・・取れば良いんだね？」

ざわめきをかき消すほどの、落ち着いた静かな言葉だった。

「ええ、そうです。たったそれだけのことです」  
『・・・分かった』

天地の返答に動揺していたのはスバルも同じだった。

「フッフ！ハハハハハ！あの人間、自棄になつたか？できるわけないだろう！？」  
「うるさい！」

「ハハハ！！見ているといいよ、ウォーロックに取りつかれている愚かな地球人！  
できるわけがないんだよ！？  
虚言、疑惑、不信、裏切り・・・人間の醜さが見られるよ！？ハハハハハ！」

右拳をぎりぎり握る。骨が軋むほどに。  
もう一度、モニター向こうの様子を見る。

「天地さん・・・」

ルナ達も、ミトレも、ツアー客も、全ての目が天地に向けられる。  
興味と疑惑と心配が込められているそれを受け、天地は宇田海の目を見つめ返していた。



『さあ！取ってください！できるものならね！？どっせ、できるわけが……』

天地の両腕が上がる。

皆が息を飲む前で、ゆっくりと、耳元に手を運ぶ。

DVDのスローモーションのように、ルナはそれを見ていた天地に手を伸ばそうとする。

早く動かない。

天地よりも遅いくらいに。

手はマスクを挟み、上へと持ちあがる。

動きに合わせて届けられる衣服の摩擦音。

一瞬遅れて、ルナの口が開く。

ためらいを知らない腕が伸ばしきられる。

肌が、漆黒の世界にさらされた。

つんざくような悲鳴が、空間に響き渡った。

「……ふう……」

「あ……あれ？」

大声をあげたルナの目がぱちぱちと開閉させる。

「確かに酸素だ。ただ、薄いな。改良の余地がありそうだね」

「しょ、所長……」

安堵の声がミトレと周りから漏れた。

「あ、ああ……」

「良かったです」

「ちびりそうだったぜ・・・」

ルナ達も同じだった。ぐったりと肩と首を落とす。

『・・・なぜ？』

一人、違う反応を返している者に視線が集まる。

彼の目が己の心中を語っていた。

『なぜ・・・なんです？もし・・・もしも！』

僕が嘘をついていたら！？酸素が無かったら！？真空だったら！！？  
どうするつもりだったんです！！！！？』

「その時はその時だよ。それに、僕は言ったよね？君を信用しているって」

呆然とする宇田海に、天地は平然と答えた。

いつもの笑みに戻っている。

『たった・・・それだけのことで・・・』

「それに、君は科学技術や発明が大好きな人だからね？  
自分が作ったものを、人を殺す為に利用するとは思えなかったかた  
んだ」

ただ、黙って聞いていることしかできなかった。

『何度でも言うよ？僕は君を信用している。だから、君も僕を信用  
してくれ。』

って、クサイかな、この台詞？ハハハ』

スバルとウォーロックも同じだ。  
キグナスですら、声を潰されていた。

『・・・宇田海君。なんで、この世の中にブラザーバンドがあるか、知っているかい？』

「そ、そんなの・・・便利だからに決まっています！」

目を閉じ、優しく首を振った。

『違うよ。ブラザーバンドがこの世に必要とされる理由。それはね・  
』

繋がりこそが、この世の本質だからだよ

「・・・っ!？」

言葉が出なかった。

『宇田海君、君の過去に何があったのか僕は知っている。  
だから、君が世の中に絶望してしまうのも理解できる』

「あ、ああ・・・」

「だ、ダメだ!あんな言葉に耳を貸すな！」

天地の言葉に頭を抱え込む。

キグナスの口調が変わる。しかし、それに気は行かない。

『けどね、それがこの世の全てだなんて思わないでほしいんだ』

「違う！裏切りこそがこの世の本質だ！それが全てだ！」

天地の目はずらされることなく、こちらに向けられていた。  
キグナスの言葉も、何も耳に入らない。

『もっと、目を凝らすんだ』

「凝らすな！また、惑わされるぞ!？」

『そうすれば、見えてくるはずだよ。』

裏切りとは全く違う、この世界の明るい部分が……!』

「止める！それ以上しゃべるな！」

がくがくと震えてくる口が抑えられなかった。

『この世界は、そんな悪い物じゃない！君も、きっとそう思える！  
だから……』

「うっうっうっ……」

『僕の言葉を信じるんだ！宇田海君!!』

「うっあああああああああ……!!」

体が崩れて行く。

白い影が体から浮き上がり、徐々に鳥のような姿へと変わっていく。キグナス・ウイングが白い光を放った。

途端に、体が宇田海とキグナスの二つに分裂する。

宇田海は膝を崩すように前に倒れ、キグナスは空へと放り出された。

「ば、バカな!？」

「よそ見してる場合か!？」

「はっ!？」

振り返ると既にウォーロックの頭がこちらに向けられている。

待つてましたとばかりに、二人はめいっばいに凝縮した光弾をお見舞いした。

「ギャーーーーー!!!」

撃ち抜かれた場所から粒子へと変わって行く。

キグナスの体はバラバラになり、消滅していった。

「へっ!ざまあねえぜ!」

スバルもふうと一息をつき、うつぶせに倒れている宇田海を見た。

「宇田海君!大丈夫かい!？」

「宇田海君!？」

天地と、側にいたミトレが懸命に呼び掛けてくる。

騒ぎが大きくなる前に、ロックマンもその場を後にした。

早くスバルとウォーロックに戻り、皆と合流しなければならぬ。

空っぽになっている宇宙服が見つかる前に。

それから数時間後。

「えええっ！？わ、私がそんなことを！？」

医務室へと運ばれた宇田海は目を覚ました。

以前、スバル達が車の電脳世界で闘ったジャミンガーと同じく、自然と現実世界に戻ることができた。

しかし、記憶のあちこちが飛んでしまっているらしい。天地達からの質問を信じられないという目で聞いているほどだ。

「そっか、覚えていないか？」

「覚えていないで済むか！？」

肩幅の広いスタッフが宇田海に掴みかかる。

天地は許してもこの男は納得していないようだった。尊敬する天地を危険な目にあわせたのだから当然だ。

他にも似たような反応を示す者もいれば、天地の気を組んだ者もいる。

今、宇田海に手を上げようとしたこの男を必死に取り押さえようとしている二人、ミトレと医務室専門の男性スタッフがそうだ。

結局、もうしばらく休んでもらうことにし、天地は部屋を後にした。

「天地さん……」

「なんだい？」

「全然記憶が無いのですが……この言葉だけは覚えています……」

「

夕方といえば人々が自宅へと帰り始める時間だ。都会はそうでもないらしいがこの町ではそうだ。よって、スバル達もこの場所を去るところだ。

「おじさま、本日はありがとうございました」

ルナにならって、ゴン太とキザマロも頭を下げる。

「いや、こちらこそすまなかったね？あんなことになってしまって・・・」

「そんなことないですよ！色々勉強になりました！」

「そう！満足満足！流星饅頭最高！！」

がつくりと二人はため息をついた。

「ゴン太らしいわね？」

「らしいですね？」

「ハハハハ」

そんな様を、スバルは一步離れた場所で見っていた。

「それじゃあ、また遊びにおいで」

「はい！それでは」

ルナを先頭に、トリオがいつものフォーメーションで歩き出す。それを見送りながら、天地はスバルの肩に手を置いた。

「繋がりこそ、この世の本質」

宇田海に言ったことと同じ言葉だ。

「実はね、これはある人に教わった言葉なんだ。誰だと思っ？」

「・・・さあ？」

見当もつかないと返す。

「NAXA時代の僕の先輩。僕が一番尊敬している人さ」

視線はスバルではなく別の物を見ている。

たどって行くと、アマケンシンボルの”アマケンタワー”が視界の中央に入った。

「っ！まさか・・・」

察したスバルにこくりと頷いた。

「そう、君のお父さんだよ」

先ほどまで天地が見ていたアンテナを見た。

「どうだろう？君の心にも届くと良いけど・・・」

今も父親を探してくれているそれは日を浴び、オレンジ色に照らされていた。

父が残してくれた言葉。

天地を介して伝えられたこの言葉。

スバルはただ聞き流して良いとは思えなかった。



「父さん・・・僕は・・・」

それ以上は続かなかった。  
ゴン太の太い声がする。

「おーい！」

「何してるんですか？」

「おいて行くわよ!？」

振り返ると、ルナとキザマロも含め、三人が手を振っている。

「じゃあ、天地さん!さようなら!」

「ああ、母さんによろしくね?」

お別れの言葉を言って、慌てて走り出した。

「ちょっと、待ってよ!」

あれ?なんでだろう?

なんでこんな事を言ったんだろう?

それに・・・足がいつもよりも、軽いや

## 第二十五話・本当のこの世の本質（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました。  
感想やアドバイスをいただけただけなら幸いです。  
励みと勉強になります！

スペースを空けて、人物の台詞を「」と『』で切り替える。  
これで、現実世界と電脳世界という視点切り替えを行ったのですが、  
いかがでしたか？  
分かりにくかったでしょうか？

このシーンは好きなシーンです。  
天地さんが漢つぷりと、宇田海がキグナスに打ち勝つシーン。  
ここの感動が伝わっていただけましたか？

次回予告！

二人目のFM星人を退けたスバルとウォーロック。  
しかし、新たな敵が次々と地球に舞い降りる！  
和解した天地と宇田海を見届けるスバルが目にしたものとは？  
それを見て、少年は何を思う？

次回、第二十六話『ブラザーと』

次の話も見てやってください！

## 第二十六話・ブラザーと（前書き）

今回で第二章はおしまいです。

どうぞ、ごらんください。

あらすじ：

キグナスとの決着、天地と宇田海の和解を見届けたスバルとウォー  
ロック。

その後、天地から受けた言葉を胸に受け、スバルは何かを感じつつ  
あった。

## 第二十六話・ブラザーと

深夜と言えるこの時間は車が走ることすらない。それだけコダマタウンは静かな町だ。

天地研究所も同じだ。

ただ、今日は騒動が騒動だっただけにまだあちこちに明りが付いていた。

その屋上でうごめく影が一つ。

「フン、屑ごときが手柄を焦ってしくじったか」

キグナスの周波数がここで消されたことを確認していた。

この威厳のある声は以前にもこの場所でキグナスと談話していた物と同じだ。

「なんだ？誰かやられたのか？」

「我々が来たのだ。バランスはむしろ我々に傾くと思うが？」

別の声が二つ聞こえて来る。驚いた様子もなく二人に振り返った。

一人は女性を思わせる体系をしており、長いウェーブのかかった髪を揺らしている。

もう一人は生命体とは思えない姿だった。

天秤のようなフォルムをしており、両手には皿をくくりつけた糸を垂れ下げている。

「オヒュカスとリブラか。今更来たのか、屑が」

「何だと!？」

オヒュカスと呼ばれた女性のFM星人が前に出る。

が、リブラの右手が進路を妨げる。

「よせ、仲間割れをシテもこちらのバランスが悪くなるダケダ」

「くっ！」

「フン」

悔しがるオヒュカスと止めるリブラを鼻であざ笑った。

「ところで、今まで誰かやられたノカ？」

「オックスとキグナスだ。ハープは行方不明」

「雑魚が。ウオーロックごときに負けるとは、男のくせに使えない奴らだ」

彼らもキグナス達と同じだ。死んだ仲間思い入れは無いらしい。

「力のオックス、スピードのキグナス。バランスの悪いモノの末路  
ダ」

「屑が屑の話をするな。耳障りだ」

「っ！」

耐えきれず掴みかかろうとするが、またしてもリブラが割って入る。

「おちつけ、オヒュカス」

「しかし、リブラ！」

「結果で見せつけければ良かロウ？」

「くう・・・なるほど、我々がこいつ以上に手柄を立てれば良いというわけか？」

二人の会話聞き、挑発を続ける本人は見下したように見ている。

「できるものならな」

リブラはこの中で唯一笑っていた。  
これで、バランス良く事が運ぶはずだからだ。

「良いだろう、やってやろうとも・・・」

「もうじき、我々以外にも増援が来ル。・・・地球人どもに恐怖と死ヲ・・・!」

紫と茶の光に変わり、オヒユカスとリブラはウェブロードへと消えて行った。

この惑星のどこかにいる裏切り者を探すために。  
そして、そいつが持つ”アンドロメダの鍵”を奪い返すために・・・

「せいぜい足掻くが良い・・・ウォーロック・・・」

残ったもう一人はやつがいるであろう町を見据え、その場を後にした。

日が変わり、スバルはまたアマケンを訪れていた。  
側では天地が今か今かと何かを待っている。

「あ、見えた」

スバルが双眼鏡から目を離す。

ゆっくりと、しかし、雄大に広げる翼が見える。  
それを背負っているのは宇田海だ。

『フライングジャケット』を巧みに操り、アマケンの敷地内へと羽ばたいてきている。

「コダマタウンの展望台から飛び立って、約30分。予定通りだな？」

天地がトランサーの時刻を確認していると、悲鳴が上がった。見上げると、横風に煽られてバランスを崩しそうになっていた。懸命に体勢を整えようとしているが、一度崩れた物はなかなか治らない。

宇田海の怯える様子がここからでも確認できた。

「宇田海君！自分を、僕達を信じるんだ！！」

天地の言葉が聞こえる。

吹きつけてくる風を睨みつけた。

体から余分な力を抜く。ただ身を任せる。

自分と天地が作った機構もプログラムも完璧のはずだ。

ただ、この『フライングジャケット』に全てを委ねれば良い。

宇田海が掛けてしまっていた力が無くなったため、翼が風の強さを、機械が正常な体勢を計測し、本来の機能を果たしていく。

体はしばらく揺れ動き、少しずつ振れ幅は小さくなり、安定を取り戻した。

安堵の声を漏らすスバルに、天地は背中を軽く叩いてくれた。後はあつという間だ。

宇田海は目標の高度と場所まで飛んだ後、高度を下げる。

赤で描かれた円の中に、ゆっくりと着地を遂げた。

「やったな、宇田海！」

天地が駆け寄り、宇田海の首に手を回す。  
実験が成功した証だ。

「あ、ありがとうございます。天地さんの言うとおり、翼を大きくしたらずっと良くなりました。

空中でも安定できるし、長距離飛行までできるようになりました」

人は空を飛べる。

飛行機と言うものを使って。

最近はスカイボードと言う物も開発されている。

しかし『鳥のように飛ぶ』という、この人類の長年の夢を、宇田海達は本当の意味で実現させたのだ。

「・・・あの・・・ありがとうございます。

僕一人だったら・・・こんなすごい発明品、できませんでした」

深々と頭を下げる宇田海に、天地は肩に手を置いた。

「本当に大切なのは、たくさん成果を上げることじゃない。

より良い人間関係を築くことだよ。このブラザーから、一歩ずつ進めて行こう」

トランサーを見せつけるように、左手で小さくガッツポーズをとる。  
宇田海はゆっくりとうなずいた。

「さあ！今日は飲みに行くぞ！」

「でも、天地さん。大丈夫ですか？また体重増えますよ？」

「げっ！な、なんで知ってるんだい！？」



「え……いや、まあ……その……あれです……ブラザー……  
ですから？天地さんの……パーソナルページの日記……見れま  
すから」

どうやら、自分の体重を日記として記していたらしい。  
帽子ごしに頭を挟んでいる。

「まあ、良いや！飲むぞ！！」  
「……はい！」

その時、スバルははつきりと目にした。  
宇田海は笑っていた。

この『フライングジャケット』で宇田海が大きな賞を取るのは、も  
う少し先の話である。

天地達の飲み会にスバルも同席した。

本当は断わるところなのだが、そう言う雰囲気では無かった。

と言っても、スバルはジュースで乾杯だ。

二、三件ハシゴをする予定だと言う彼らと途中で別れて家に帰って  
きていた。

「ねえ、お酒臭くないよね？」  
「大丈夫じゃねえか？」

今は部屋のベランダで春を含んだ風を受けながら空を眺めている。  
ビジライザーは掛けていないが、ウォーロックは隣にいるらしい。

「宇田海さん、楽しそうだったね？」

「だな。あんな奴でも笑うんだな？ブラザーの力ってやつなのか？」

「……さあね？」

展望台で会った時の彼とは大違いだった。

慣れないお酒を飲んでふらついていたが、彼は笑っていた。

「うらやましいのか？」

「え？」

「宇田海がだ」

「……別に……」

ウォーロックの言葉を否定する。

「笑いたくないのか？」

「……え？」

「お前って、笑わないよな？」

何も見えない隣から目を反らした。確かに笑った記憶が無い。

あの日からずっと。

機械をいじくったり、宇宙の本を手に入れたりして笑った事はある。

しかし、ルナ達や天地達のような笑い方とは違う気がした。

満たしてくれる心の部分が違う。

寂しさは紛らわしてはくれない。

「大吾とは大違いだぜ？」

「……父さん……」

大好きだった父親の笑顔を思い出す。

太陽と見間違えそうなほどの、暖かく明るい笑みだった。今思えば天地の笑い方にも似たようなものがあつた。もしかしたら、大吾から譲り受けたものなのかもしれない。そして、それは徐々に宇田海にも移りつつある。

### 繋がりこそこの世の本質

天地から伝えられた父の言葉。  
歯をくいしばるように、空を見上げる。

「父さん・・・繋がりがあれば、笑えるの？」

その時だった。

一筋の青い光が駆けた。

「流れ星・・・」

「流星って言うんじゃないのか？」

「天文学上はね。今の場合は流れ星かな？」

訳が分からないとウォーロックは首をかしげた。

「まあ、良いか。そういうえば、あれを見たら何か願い事が叶うらしいな？」

「迷信だよ。叶ったことないんだから」

「・・・そうか・・・」

何を願ってきたのかは聞かなかった。

「いつもとは別のことを願ったらどうだ？」

「別のこと？・・・うん・・・」

浮かんだのは、さつきと同じだった。

騒ぎを起こしたゴン太を受け入れて笑っていたルナ達。

実験の成功を共に喜びあう天地と宇田海。

そして、3年間一切薄れない父の笑顔。

それを生み出すのが繋がりなら・・・絆の力だと言っのなら・・・

「ブラザー・・・？」

もう、あの青い流れ星は見えない。

広げられた黒い空をただ見上げていた。

ふと視線を感じてビジライザーをかけて見る。

ポカンと口を開けたウォーロックがいた。

「・・・なに？」

「お前、ブラザーいらないんじゃないんじやなかったのか？」

「え？僕そんなこと言った？」

思わず呟いたらしい。

自覚が無いようだ。

「い、今の無しだよ！・・・嫌だよ・・・ブラザーなんて・・・」

慌てて取り繕い、また表情を暗く戻した。

空には緑がかり、オレンジ色の道が加わっていた。

星空を見るには邪魔でしかない。

外して、いつも見ている空に戻す。  
しかし、お望み通り広げられた大好きな世界は、ただ胸をすり抜けていくだけだった。

この場所、この時間にはいつもスバルがいる。  
しかし、今日の展望台は違った。

一つの影がこの町のいつもの空を見上げている。  
自分が住んでいる町とは違う。

こんなにたくさん星が見える空は見たことが無かった。  
被っていたフードが重力に従って頭から滑り落ちる。  
短く切りそろえた髪がふわりと風に靡く。

首筋を撫でる、春に限り感じられるその心地良さに笑みをこぼす。

「・・・あ・・・」

流れ星だ。

青い流れ星が彼女が見上げる漆黒の世界を駆け抜けた。

「ねえ、青い流星さん・・・」

誰もが知っている噂。

「もし、本当に・・・あなたが願いを叶えてくれるなら・・・」

それが本当ならば・・・

「私の望むことは一つ・・・」

暖かい風が吹いてくる。

共に奏でられる木々のざわめきと共に、彼女を包み込む。

「お願い……」

……助けて……

第三章・信用と疑惑の狭間で（完）

## 第二十六話・ブラザーと（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。  
感想やアドバイスをいただければ嬉しいです。

今回はオリジナリティが多かったですね？  
目を瞑ってください。

第三章はこれでおしまいです。  
次回から、第四章に入ります。  
とうとう、ヒロイン登場です！

### 次回予告

父を亡くし、心を閉ざした少年。  
そんな彼を見て母は何を思う？  
幼い息子に父が託した言葉とは？  
そして、謎のおっさんが襲いかかる！  
スバルの運命はいかに！？

### 第二十七話『夢』

次の話も見てください！

## 第二十七話・夢（前書き）

今回から、四章開始です。

あらすじ

ルナ達や天地達のやり取り。

父の言葉。

スバルはウォーロックと出会い、少しずつではあるが、寂しさを感じつつあった。



## 第二十七話・夢

「辛いのは分かる。けれど、そろそろ来ないかい？」

いつもそうだ。大人たちはこう言ってくる。

今は笑っているが、この前はずいぶんと高圧的だった。

「黙っていたら分からないよ？学校に来ないかい？」

席を立ち、二階へと駆けこんだ。

大人たちの声がする。

自分を叱責する声が鳴りやまない。

ベッドにくるまって、下の部屋から聞こえてくる。

「僕の気持ちも知らないで……」

蹴飛ばすように布団からはい出ると、ベランダへと出た。

窓の下へと目を向ける。

あまり高くない。

室外機に足をかけ、身を乗り出す。

母が作り上げた、色彩豊かな花畑が真下に見える。

それらを囲うレンガ造りの花壇。

そこにうまく落ちれば……

ぞっと背中を走る悪寒。

足がすくみ、転げるようにベランダへと戻った。

今日も苦しみからは逃れられなかった。

窓の鍵を閉めてもそれは薄れない。

階段を上がってくる音がする。

逃げるように、布団の中へともぐりこんだ。

教師と名乗る大人たちを帰した母親が、部屋へと入ってくる。そつと外を覗き見る。

つま先から膝、腰へと徐々に視線を上げていく。母は怒つても、悲しんでもいなかった。

緩めた頬と目。

隠れるように布団を抱きしめた。

「スバル……」

布団の下は暖かい。

「……良いのよ?……」

それを通り越し、包み込んでくるような、言葉だった。

こみあげてくる嗚咽を抑えられなかった。

布団越しに背中を撫でてくれる。

もう止まらない。

流れ落ちるそれは止まらない。

そのまま泣き疲れ、眠りへと落ちていった。

白

一面がそれで満たされた世界を歩いていた。

道があるのかすら分からない。

なぜ歩いているのかも分からない。

しばらく歩くと、緑色が見えた。

そこに向かっていく。

誰がいる。

オレンジ色の半袖シャツに、膝までの半ズボン。  
鍛えられた筋肉質な体。  
そばまで来ると、その男性は振り返った。

「おお、スバル」  
「父さん」

大好きな父の元まで無邪気に駆け寄ると、隣に座り込む。  
腰掛けた草むらはふわふわとスバルを出迎えてくれる。

「スバルは今年で何歳だっけ？」  
「八歳だよ！」  
「そうか、小学二年生か。大きくなったな!？」  
「うん！」

大きい手のひらで、小さい頭を鷲掴みにするように、  
ぐしゃぐしゃと頭を撫でてくれた。  
どこにでもある父親の愛情表現が、少年には何よりもうれしい。  
宇宙の本や天体望遠鏡をもらうことなんかよりも、ずっと。

「大きくなったスバルに、大切なことを教えるぞ？」  
父さんの新しい研究についてだ！」  
「何？何!？」  
「それは・・・」

人差し指を立て、自慢げに話します。

「ブラザーだ！」

ニツと向きだした歯が、白く光った。

「ぶらぶら〜？」

ヒョコと首をかしげて見せる。

「そう、ブラザー。これはな、人の絆を強くする物なんだ」

今度は逆方向に首をかしげる。

「ハハハ！スバルにはちょっと早かったかな？」

肩に太い腕が回される。

重すぎて、背中が曲がってしまったが、嫌じゃなかった。  
この逞しい腕に頬を傾ける。

「ただ、これだけは覚えておいてくれ」

一人じゃ解決できない問題も誰かと繋がれば乗り越えられる

誰かが自分を強くしてくれるし、自分も誰かの力になれる

そうやってできていった絆はどんなものよりも勇気をくれるんだ  
よ

やっぱり、この少年には分からない。  
まだ幼すぎた。

けど、それでも分かる。  
父の笑みと言葉から・・・

ガツンと鈍い音が響いた。

「つつう〜！」

赤くなつた額を押さえつける。

ベッドから転げ落ちたみたいだ。

きよろきよろと辺りを見る。

いつもの自分の部屋だ。

満点の青空を迎えた土曜日の朝だ。

「・・・全部夢か・・・」

共に落ちていた布団を戻し、腰かけた。

思い浮かぶのはあの時自分を救ってくれた母の言葉と、それ以前に見た父の笑顔。

「ブラザー・・・か・・・」

夢に出て来た父の言葉は、幼い頃の記憶だ。

ずっと忘れていたようなことが、今更になつて鮮明に思い出される。

「父さん・・・」

昨日の青い流れ星を思い出した。  
あんな事を願ったからだろうか？

「父さんが・・・僕にブラザーを作れとでも言っているのかな？」

どこまで行っても、憶測は憶測にすぎない。  
気持ちを切り替えて、服を着替え始めた。

車を止めトランサーを開いた。

「ふむ・・・やはりZ波が高いな・・・怪しい・・・」

頭のアンテナをかきむしり、表示される数値を眺めて歩き出した。

着替え終わり、トランサーに居ついた異星人を起こす。  
覗き込むと、あの居候がない。

「どこに行ったの？」

ビジライザーをかけて見るが、やっぱりいない。  
見えるのはウエブロードと・・・近づいてくるティーチャーマンと  
デンパ君だ。

「ねえ、ロックを見なかった？」

「ウォーロックサンデスガ、ケサハヤクテイキマシタヨ？」

「なんでも・・・」『孤独の周波数を感じたから調べてくる。すぐに

戻る。

と、スバルに伝えておいてくれ。』だそうです」

ビジライザーを手に入れてからは、

この家に住みついているデンパ君やナビ達とは顔見知りだ。

「何やってるんだよ？」

「スバルさん、今日の授業始めますか？」

「・・・いや、ごめん。後にして」

いつも勉強を覚えてくれている教育専門ナビの提案を拒否し、玄関へと降りて行く。

「僕と電波変換できないときに、FM星人に見つかったらどうするつもりなんだよ？つたく、世話のかかる宇宙人だよ」

独り言をぼやきながらドアのカギを開ける。

「「じようだー！」

「うわあ！？」

途端に勢いよく扉が開かれ、スバルの脇を通り過ぎ、一人の男がずかずかと中に入ってくる。

「何だ！このZ波の数値は！？なぜこの家だけ高いんだ！？ありえないほど異常だぞこれは！！？」

トランサーを見ながら一人で大騒ぎしている。

ありえないほど異常な行動を取る男の背中から目が離せない。事態を把握することができない。

「け、警部！」

「入っちゃダメですよ！」

別の、まだ若そうな二人の男性が玄関の外で突っ立っている。

警部と呼ばれた男を見る。

ベージュ色のスーツに、頭にはヘッドギアとそのパーツのアンテナが髪から飛び出している。

先日からこの辺りで調査をしているサテラポリスの刑事だと言うことによく気付いた。

しかし、言うべきことは言わなくてはならない。

「あの、勝手に家に入らないください！」

「あ・・・ああ！すまん！本官は周りが見えなくなる性質たむでな。警戒しないでくれ？」

スバルは彼を何度も見かけていたので、彼を不審人物と思うことは無い。

変質者と思っただけだ。

別の家だったら大変だっただろう。

顔もちよっと怖いので公園で遊んでいる小さい子とかを泣かさないうことを祈るばかりだ。

「気をつけてくださいよ。警部？」

「さっきも、公園で小さな女の子を泣かせて母親に怒られましたからね？」

「うるさい！さっさと調査に行かんか！？」

もうやらかしていた。

部下二人に指示を出し、冷たい眼差しを向けるスバルに向き直った。



「失礼！本官は五陽田<sup>ごやうだ</sup>ヘイジ。サテラポリスの刑事だ」  
「あ……はい」

町で何度も見かけているので顔は知っている。

「ところで、星河スバル君」

「え？なんで僕の名前を？」

「我々はサテラポリス。住民の名簿は既に町の方から貰っているよ？」

ちらりと自分のトランサーに目をやった。

どうやら、調査データは全てそこに入っているらしい。

「調査のために、事情聴取に協力してほしいんだが……良いかね？」

「あ……はい」

ずいっと顔を近づけてくる。断れるものも断れない。

「最近、体に異常を感じたことは無いかい？」

『宇宙人と融合して、電波の体になってます』  
なんて言えない。首を横に振る。

「怪物の様なものを見たことないかい？」

『それと二回ほど戦って倒しました』  
もちろん言えない。同じように首を振る。

「ちょっと、トランサーを失礼」

「え？うわ！？」

有無を言わず左手を持ち上げられた。  
中の情報を検索される。

「フム・・・Z波が高いな。何か変な使い方をしたとか、故障したとかは無いかい？」

「な・・・無いですよ？」

トランサーで宇宙人が居候している事実を伏せて、知らないとおしておいた。

「そうか・・・」

「あの、Z波って？」

「Z波は宇宙から来た電波だよ。調査中ゆえ、まだ断言できないが・・・」

人体に悪影響を及ぼす可能性もあるらしい。

体に異常を感じたら、すぐに連絡をしておくれ？

では、ご協力ありがとうございます！」

最期はすいぶんとかしこまった敬礼をし、丁寧にドアを閉めて出て行った。

どうやら本性はまじめな人らしい。

過ぎ去った嵐の余韻でその場から動けない。

しばらくしてウォーロックのことを思い出し、慌てて外に飛び出した。

その場所に来て辺りをうかがう。  
誰一人としてこの場には居ないようだ。

「ここが良いかな？」

背負っていた黄色いギターを降ろし、首からかける。

「昨日、偶然見つけたけれど・・・この場所、最高に良いかも！」

赤紫色の前髪をそつと揺らしてくるからつとした風に微笑み、右手に持ったピックで弦を弾いた。

偶然なのか・・・それとも・・・

## 第二十七話・夢（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。  
感想やアドバイスをいただければ嬉しいです。

小説情報に、『スバミソ』と書いて早一ヶ月半・・・  
話数にして27話。

朗読時間に換算すると約3時間。

いつ表紙詐欺と言われるかと怯えた時間ももうすぐ終わりです。

スバミソファンの皆さん、お待たせしました！

次回、遂に・・・！

次回予告：

思いつきでとある場所へと足を向けたスバル。

ひっそりと曲を奏でる一人の少女。

何の接点もない二人は、何かに導かれるように・・・

少年を大きく変える出会いが・・・今！

次回、第二十八話『運命の出会い』

次の話も見てください！

## 第二十八話・運命の出会い（前書き）

スバミソファンの皆さん、お待たせしました！

あらすじ

夢から覚めたスバルは、いなくなったウォーロックを探しに町に出る。

一方、その少女はとある場所で愛用のギターを奏でる。  
運命の時が、今訪れる。

## 第二十八話・運命の出会い

ビジライザーをかけ、町の中を見渡してみたもののお目当ての宇宙人は見つからない。

ふと思いついたのはコダマタウンで最も高い場所、さびれた展望台だ。

町全体を見下ろせるあの場所からならば見つけられるかもしれない。思いつくと、スバルの行動は早かった。

足早に目的地へ向かう。

この思いつきは・・・偶然なのか、運命なのか・・・

土曜日の朝。

もともと人がほとんど来ないような場所だ。

こんな時間に展望台に人陰など無い。

一応ビジライザーをかけてみるが、やはり見つからない。

顔をしかめていると、鼓膜に違和感が訴えかけられる。

誰もいないはず。にもかかわらず、聞こえてくる。

「音楽？」

音楽に興味のないスバルでも、それには心惹かれるものがあった。

一歩一歩、展望台の階段を上っていく。

いつも登っているこれはいつもと違う雰囲気を感じ出しており、毎

日のように見慣れた石の塊を慎重に踏んでいく。  
耳に届けられる音楽は段々と大きく、鮮明になっていく。  
音源に近づいていることを確かめながら階段を登りきった。

そこにその少女はいた。

ピンク色のパーカーに、黄緑色の短いズボン。

被ったフードの頭には二つのお団子の様なアクセント。

その下からはみ出して風に揺れる赤紫色の髪。

そつと目を閉じ、黄色いギターをピックで奏でている。

発せれた音達は束となり、群れとなり、一つの曲として生み出されていく。

ただそれだけのことなのに、周りには光が散りばめられている。

その一つ一つが輝きを放ち、暖い空気をまとう。

照らしつける太陽のもと、取り巻く雰囲気が歌の世界を作り出し、彼女の周りだけが幻想的な世界へと変わっているようだ。

幾つもの星を観察した。

幾種類の空を見上げた。

そのどれよりも美しく、光り輝いている。

ただ、その様に見入っていた。

閉じられた瞼が静かに開かれ、目が合った。

エメラルドグリーン。

宝石のように透き通る碧。

星を秘めた煌き。

コントクトとは違う、彼女自身の瞳の色。

吸い込まれる。

「そんなところにはいないで、こっちにおいでよ?」

高く、澄み渡ったかわいらしい声だった。

どんな強風や轟音が紛れてきても物ともせず響き渡りそうな声。耳だけではなく、胸にメッセージを送ってくる。

言われるがままに彼女のそばまで行くと、目で近くのベンチに座るよう促された。

彼女自身は立つたままギターを弾いている。

年齢は自分と同じくらい。

背丈は・・・少しだけ自分が勝っている事を確認し、嬉しくなった。

「いつもこの時間にここにいるの？」

「いや・・・今日は別の用事でね？」

「そうなんだ？びっくりしたよ。この時間だと、ここに人はいないと思ってたから」

「はは、いつも誰もいないよ？」

「そうなんだ？・・・ごめんね、もうすぐ終わるよ？」

「そんな、気にしないで。この曲、もうちょっと聞いていたいし・・・」

本心だった。

音楽なんてろくに聞かないが、彼女が奏でるこの曲は別だ。さっきの雰囲気にも自分も加わっている。

胸が高鳴る。

「そう！？良かった！今作っている途中の曲なの」

「自分で作っているの！？まるでプロだね？」

少女はちょっと驚いた顔をしたが、すぐに笑い出した。

「そっか、知らないんだ？」

「え？」



「うっん、何でもないよ？」

何が面白いのか、スバルにはさっぱり分からない。  
ただ、本人は心底面白そうにクスクスと笑っている。

「・・・歌が好きなんだね？」

「うん、大好き！だって、歌は私とママとの繋がり・・・絆なんだもん」

「お母さん？」

「そうだよ。私の歌はママのためにあるの」

目を閉じ、空を仰いだ。

「ママ・・・気に入ってくれる？フッフ」

楽しそうだった。

ただ細くしなやかな指で、自在に世界を操っている少女をボーッと見つめていた。

ずっとこうして聞いていたい。

全身に届けられる空気の振動は余計な力を吸い取ってくれる。

人だけではない。

感情など持ち合わせていない木々や虫に安らぎを与え、生まれては消えていく風に命を吹き込む。

万物を癒し、力を与えてくれる音色に体を預けていた。

はっと目を見開いた。

気付くと曲が終わっていた。

ギターを背負い、こちらに顔を向ける。

「お話しできて楽しかったよ。じゃあね？」

最期にとびつきりの笑顔と共に展望台を後にした。

お別れの言葉を言うことも忘れて背中を見送っていた。

ギターの頭までもが、階段の向こうへと消えても動けない。

脳が動くと言う信号を忘れてしまったかのように、瞬きすらしなかった。

しばらくして立ち上がり、彼女から解放された世界を見渡す。

いつも見てきた世界だった。

いつも通りの寂しい展望台だ。

あの神秘的で幻想的で、夢のような世界は跡形も無くなっていた。

ざわざわとあの世界を求める声がする。

名残惜しそくに宙を舞っている花びらに心を重ねてしまう。

天界から舞い降りた天使を送り出したような世界でぼそりとつぶやいた。

「・・・あの子、何者だったんだろう？」

顔がカイロを貼られたように熱い。

ずっと座っていただけなのに心音が早い。

あの世界は本当に夢だったのだろうか？

違う。

甘い香りがかすかに鼻をくすぐっている。

あの世界のほんの一部。

まだ、この空しい世界を漂ってくれている。

気を落ち着かせるため、夢ではなかったことを記憶に刻むため、深呼吸をつこうと息を大きく吸い込む。

「青春つてやつか？」

「わあ！！??？」

突然投げかけられた声に飛び上がった。

おかげで先ほど以上に心拍が上がってしまった。  
動揺する手でビジュライザーをかけると、探していたウォーロックがいた。

ニヤニヤと意地悪そうな目でスバルを見ている。

「ロック！いつの間に戻ってきたの!？」

「お前がこの展望台に入ってきてすぐだな。一部始終見させてもらったぜ？」

「え？」

心臓がびくりと強く鼓動した。

「あの女とのやり取り、全部な？」

「ミ、ミテタノ？」

デンパ君のようなしゃべり方になっている。

見られて恥ずかしい物ではないはず。

スバルの主張に反して、顔がどんどん赤くなっていく。

「これが、お前ぐらいの年の地球人がする、青春ってやつなんだろ？」

「ち、違うよ!？」

「なんだよ、一目惚れしてやがったくせに」

「してない!してないからね!？そんなことしてないよ!？」

全力否定するスバルを見て、ゲラゲラと笑いたてる。

いつになく必至な様が面白いらしい。

「いや、スバルが青春デビューか?ククク・・・

で、あの女はお前の知り合いつてわけじゃあ無いんだよね?

・・・つて、おい？」

返ってこない返事に振り返ると、スバルがドスドスと足音を立てて立ち去っていた。

「待てよスバル!？」

慌てて追いかけると、キツと睨みつけられた。

「今度あんな冷やかしたら、テレビ見せないからね!？」

「わ、分かったよ・・・」

いつものスバルじゃない。

初めて見た相棒の殺気に気圧され、引き下がった。

「それに・・・」

トランサーに戻るウォーロックを見届け、かけていたそれを額に戻した。

「どうせ、もう会うこともないよ・・・」

ため息を吐きだす。

肺の中も、さっきの光景も全て。

「なんだ？恋しいのか？」

「・・・」

「あ、いや、すまん。怒らないでくれ？」

「怒ってないよ!」

「じゃあ、なんで顔が赤いんだ？」

「うん、うん、はい、はい……」  
「？」

偶然ではなく、運命。  
それを知るのはそう遠くない話。

## 第二十八話・運命の出会い（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。  
感想やアドバイスをもらえたら嬉しいです。

はい、やっと二人が出会えました。

ここからスバルが本当の意味で強くなって行きます！

### 次回予告

平和を取り戻しつつあったコダマタウン。

しかし、とある事件が人々をパニックに陥れる！

差し出される少女の手。

スバルが取った行動とは？

次回、第二十九話『震える手』

次の話も見てください！

## 第二十九話・震える手（前書き）

皆さんの応援のおかげで、

ユニークアクセスが3000件を超えることができました。

ご愛読ありがとうございます。

これからも、この小説をよろしく願います。

では、どうぞごゆっくりして行ってください。

ちなみに、今回からあらすじと次回予告を取りやめます。

始めた時は楽しかったけれど、最近飽きたw

## 第二十九話・震える手

真つ赤だった顔は今は真つ青だ。  
目の前にいる少女の服と同じだ。

「乙女のトランサーを見たのよ！調査だって言っつて！信じられないわ！！」

コダマ小学校、5・A組の学級委員長、ルナである。  
五陽田刑事に対する不満を惜しみなく並べていく。  
お供のゴン太とキザマロも同じ目にあつたのだろう。  
不機嫌そうな顔をしている。

トランサーは個人情報のかたまりだ。  
勝手に見られて嬉しい物ではない。  
だが、それ以上に怖れが勝つた表情をし、数歩距離をおいている。

「つて言うわけで、あんたにかまっている暇ないの！行くわよ！」  
展望台を出た直後に遭遇した時は不幸だと思つたが、それほどでも無かつたらしい。  
上下に激しく揺れる髪の色を見送つた。

「どうするキザマロ？」  
「明日はライブですし・・・早く帰りたいです」  
「体力残しておきたいよな？」  
「・・・逃げますか？」

耳を疑つた。

二人が委員長に対して恐怖しているのは、普段の様子から察しては



いた。  
にも関わらず、機嫌を損ねるような行動を自らとると言っただ。  
命知らず過ぎる。

「明日、何かあるの？」

「何かあるってもんじゃないぜ!？」

「あの響ひびミソラちゃんの生ライブですよ！」

「ここ、コダマタウンでやるんだぜ！」

「もう、ビッグニュースですよ！学校ではこの話題で持ちきりです  
！」

アマケンの時とは比べ物にならないほど興奮して説明してくる二人。  
あの時とは逆だ。

「響ミソラ？有名人なの？」

この質問がいけなかった。

数メートルほど後ろに飛びのいた二人。

人を見る目ではない、物を見る目をしている。

開いた距離の分だけ目の前の物を傷つける。

「知らねえのかよ！」

今度は挟み込むように眼前まで迫ってくる。

鼻をふくらませ、荒い息を吹きかけてくる。

ゴン太など牛そのものだ。オックス・ファイアになっていた時以上  
だ。

生温かい空気に挟まれて身の毛がよだつ。

今の二人ならFM星人すら追い返しそうだ。

「響ミソラ！今や国民的人気歌手ですよ！？」

熱の入った二人の説明が始まった。  
まずいと直感が告げてきた。

これは小一時間続くウンチク話しに入る前兆だ。

逃げ出す口実を探す間に、二人がトランサーからのルナの声に飛びあがった。

「キザマロ、俺達ブラザーだよな？」

「ええ、もちろんです！危ない橋を渡るときは一緒です！」

がしりと暑苦しい友情の握手を交わすと、一目散に地平線の向こうへと消えて行った。

決死の逃走とは、彼らのことを言うのだろう。

哀れと言う単語をぼそりと吐きだした。

「で、五陽田つてのは？」

「サテラポリスの刑事さんだよ。アンテナ刑事さん」

「ああ、あいつか」

「Z波つて言うのを調べてるって」

「それは俺やFM星人の奴ら、電波生命体の体から発せられている電波だな」

やっぱりと頷いた。今朝のやり取りを詳しく話した。

「このままだと、俺もお前も動きにくくなるな・・・よし、消すぞ！」

スバルは激しく後悔していた。

この宇宙人と組んでから、悔んだことなどいくらでもある。しかし、今ほど後悔したことは無い。

「ロックバスターを生身の人間に打ち込むなんて・・・」

ロックマンとなったスバルの前には、シューッと煙を上げて倒れている五陽田がいた。

サテラポリスはエリート集団。彼も例外ではないだろう。

しかし、それに似つかわしくない間抜けな顔になっている。

アングリと閉まらない顎には、巻くようになった舌。

短い髪はアフロのようにぼさばさに焦げ、瞼を退けるように開かれた目はそれぞれが別のものを映している。

あの部下を泣かせていた迫力のあった面構えはどこにもない。

「手加減したろう？」

「そういふ問題かな？」

「いいじゃねえか。お前のデータも消しといたしよ？」

トランサーの中にあつた捜査データは既に消してある。

要注意人物としてスバルの名前が記されてあつたが、その項目も今は純白だ。

それ以外の全ても同じ真っ白だ。

彼の携帯端末はうんともすんとも言わない、ただの金属の塊に過ぎない。

目覚める前に、こそこそとその場を後にした。

スバル達が無事に逃げ去り、目覚めた五陽田が涙ながらに喚き叫び、

部下達に慰められる。

そんな日が沈みかけたところに一つの影がコダマタウンに降り立った。水色のボディに、ピンク色のオーラ。

弦楽器のような容姿だ。

貼りついた目と口は疲れを訴えていたが、町の風景を見渡して不満を描きだす。

あの大都会に比べれば、ここは田舎と言っても良いかもしれない。

「さてと・・・機会を見て近づきますか？・・・ポロロン」

ギターを手に取る。

数回弦を弾いてみると、よくチューニングされた音になる。

窓からは日差しが差し込んでくる。

春に似つかわしい、ポカポカとした陽気が部屋に満ちてくる。

身に沁み込む空気を受け、手に持っているその頭を見る。

この楽器はトランサー機能を兼ね備えている。

約束までの時間を宣告する、ディスプレイに描かれた数字。

歪む。直線を並べただけの画面が濡れていく。

「・・・もう嫌・・・嫌だよ・・・ママ・・・」

翌朝のスバルは珍しく早起きをした。

と言っても、トランサーの住人は二桁になった数字を見て不満そうだ。

カードショップ、BIGWABEの看板が見えてくる。

壊れた公園は既に解放されており、それと同日にこの店は開店した。

先日起きた公園の火事。

憩いの場所を失い、落ち込んでいたコダマタウンの人達のためにと数日予定を早めてくれたらしい。

子供達の好奇心を誘う豊富な品ぞろえと、最新知識にあまり詳しくないご老人にも丁寧に説明してくれる店長さんの人柄がこの店の売りだ。

おかげで大人気になっており、公園と共にこの町の名物になりつつある。

無論、今一番の話題は響ミソラのライブだが。

「やあ、スバル君。いつもありがとう的な？」

「……いえ……」

店長の『南国 ケン』がさわやかに迎えてくれる。

金色に染めた髪と、焼けた肌に赤色のレンズをはめたサングラス。店の模様には、サーフィンのボードや南の島を思わせる植物。

どうやら本物の様だ。植物特有の爽やかな香りがツンと鼻を突く。言うまでもなく、彼はサーファーだ。

見るからに遊んでそうな容貌だが、先ほども言った通り人の良い店長さんだ。

平日のお昼ごろにも訪れるスバルの事情はだいたい察してくれているようで、追及はしないでくれている。

ちなみに、『的』は彼のユニークな口癖だ。

「そう言えば、町がなんか騒がしい的じゃない？」

「どうせライブでしょ？」

「いや、なんか様子がおかしい的な？」

窓の外を見て見ると、右往左往と人が行きかっている。

すぐに興味を無くし、棚の商品へと目を通し、欲しかったカードを

レジへと持っていく。  
と、ドアがバンと開かれた。

「スバル！」

入ってきたのはあの二人だ。  
ぜえぜえと荒い呼吸をしている。

「いらつしゃい・・・的じゃないみたいなの？」

「・・・どうしたの？」

キョトンとするスバルにゴン太が掴みかかり、切れる呼吸を押しつけて言葉を吐いた。

「ミソラちゃんが失踪しちまったんだ！！」

脳に与えられた情報はたったの一文だ。

聞き取れなかったわけではない。

長距離を全力疾走したような呼吸をしているが、彼の発音はハツキリとしていた。

スバルも聴覚に異常があるわけではない。

一言一句逃さずに捕らえている。

一行の文章を受け入れて事態の重大さを理解するという作業は、少年には難しすぎた。

あり得ないような事件だからだ。

どうせ嘘でしょ？ドッキリでしょ？興味ないアイドルなんかで騙されないよ？

そう返そうかと考えるのが普通だ。

しかし、できなかつた。

良く見るとゴン太の目が血走っている。

視線を斜めに下ろすと、キザマロも同じだ。  
一歩足を引いた。

昨日がFM星人を追い払えるならば、今は倒せるだろう。  
それぐらい恐ろしい雰囲気を放っている。  
数秒の沈黙の後、南国が店に設置してあるテレビのチャンネルを変えようとする。

それより早く、緊急ニュースが割り込んだ。  
ゴン太の言葉を裏付けている。

「今朝早くホテルから失踪しちゃったんです！」

「うおおお！ミソラちゃん！！」

「うわあああ！！」

目から血の涙が噴水のように噴き出る。

さらにスバルは二歩引く。

「・・・で？」

「俺達探してるんだよ！」

開いた三步分の距離を一気に詰めてくる。

今は零歩分だ。

むさい。

「僕らミソラちゃんファンクラブ会員で、情報共有して探してるんです！」

「スバル！お前も協力しろ！」

「見つけたら、僕らに連絡をください！赤紫色の髪をしています！」

「うおおおおお！！！」

「ミソラちゃ~~~~ん！！！！」

スポーツカーの最高速度を思わせるスタートダッシュで、掃除の時に掃い切れなかったわずかばかりの塵埃を舞い上げ、BIGWAVEから立ち去って行った。

後には事態とテンションについて行けないスバルと南国が残された。

「えっと・・・僕の方まで頑張つて・・・的な？」

「・・・南国さんもファン？」

「彼らのほどじゃ、無いけれど的な？」

そして、あの二人とは今以上に距離を置くことを誓った。

外に出ると、南国の言うとおりだった。

老若男女問わず、ミソラの名を叫びながら町中を詮索している。

いつもは杖をついている老人が、声を張り上げて走っている様が、

コダマタウンの異常事態をこれでもかとあらわしている。

警察も出ているが、民間人の協力者の方が多い。

中にはサテラポリスマでいる。

しかし、すぐに駆けつけた五陽田警部にどなり散らされていた。

おそらく、彼らもファンなのだろう。

任務をさぼって、こちらを優先していたらしい。

興奮して吠えている犬の側を駆け抜け、スバルはとある場所へと足先を向ける。

「おい、協力するの？」

「いや・・・ちょっと心当たりがあるんだ」

キザマロが言った事が頭から離れない。



ロックとのやり取りをしている間に、あの歌声を聴いた場所へとつ  
く。  
階段を一段飛ばしで駆け上がり、少し前に機関車が暴れた広場に足  
を踏み入れた。

ここには、誰もいない。

もともと、ここに来る人なんてほとんどいない。  
額を拭い、きよろきよろとあたりを見渡す。

「心当たりがあっても、なんでそんな必死になるんだ？」

「分からないよ！それより、探すの手伝ってよ！！」

「・・・なら、一番上、見晴らし台に誰がいるぜ？」

整っていない息を無視して走り出した。

さつきよりも一段一段の差が大きい。

その分足を大きく開く必要があるが、これも二段ずつ踏みつけて行  
く。

それにつれて、微かに何かが聞こえて来た。

足を止め、余計な雑音を排除した。

「・・・グ、エ・・・ス」

聞き覚えのある声。忘れられない声だ。

また昇り始める。今度はゆっくりとだ。

一段一段がいつもと昨日とも違う。

立ち入ることを拒むようなジャツリとした感触。

それを踏み越えていく。

別世界を見せてくれたあの場所。

そこに昨日の少女がいた。

空しくさびれた空間にぼつりと佇んでいる。

世界を変える力を持った魔法の杖が、背中にあることすら忘れたかのような。

その力が使えないと言っるのが正しい。

「エグ、グス・・・ウツ、ウウ・・・ヒック、エツエツ・・・」

自分を抱きしめるように二の腕を掴み、俯き嗚咽を漏らしていた。頬と鼻を伝った涙がポタポタと足元で弾かれています。

「あ・・・」

「ふえ！？」

少女の顔が上げられた。

女の子にまるで興味の無かったスバルを魅了して止まなかった昨日の澄んだ綺麗な瞳は今涙で汚されていた。

月の無い夜にここぞとばかりに輝く星々が恥ずかしくなるほどの、本物の宝石なぞ石ころにすぎないと思わせる美しさを秘めた輝きは一切無かった。

「響ミソラ・・・ちゃん。だよな？」

人間関係を絶ってきたスバルですら気付く。知っている。

めったに御目にかかれない色だと言っことを。

春の甘い香りを届ける日差しの下で、赤紫色の髪が風に流されていた。

昨日の赤い少年だ。

この癖っ毛のある茶色い髪と白と緑のサングラスが特徴的だったか

らすぐに分かった。

一昨日に助けを求めた流れ星は青かった。

目の前に居るのは真っ赤な男の子だ。

けど、そんなことどうでも良い。

「お願い……」

この願いを叶えてくれるなら……

「……助けて……」

枯れそうになっていた声でかろうじて意志を伝え、涙でびしょぬれになった震える手で彼の胸を掴んだ。

冷たかった。

服越しに氷を当てられたかのように胸に浸透してくる。

昨日の彼女はどこにもいない。

ピンク色の歌の妖精はどこにもいない。

歯をギリツと食いしぼる。

気づけばその手を取っていた。

光を失った翡翠の目に自身の顔が映る。

「僕に……ついて来て！」

少し、本当に少しだけ、翠に染まった自分の周りに光が灯った。

それを確認して走り出した。

握っている手が付いてこれるように、速すぎず、遅すぎないように。彼女も力の限り握り返してくる。

さつき胸を掴んでいた時とは大違いだ。

別にヒーローぶる気は無い。

ただ、彼女を放つてはおけなかった。

昨日出会ったばかり。互いに何も知らない存在なのに。  
今のスバルの願いはただ一つだけだ。

伝わってくる温もりをもう一度確かめ、彼女が痛がらない程度に力を加えた。

## 第二十九話・震える手（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

よろしければ、感想やアドバイスを送ってください。

今回は、ギャグとシリアスをコロコロ変える必要があったので、辛かったです。

南国の店でのやり取りは緊張していただけましたか？

ゴン太とキザマロが暴走気味なため、表現が微妙だった気が・・・

### 第三十話・無力（前書き）

今回は頑張りました！今までの書き方を一新してみたのですが、いかがでしょうか？前回の方が良かったかな？

### 第三十話・無力

Z波の解析。サテラポリスから受けたこの依頼が今のアマケンの急務だ。

その作業中に呼び出しを受けた天地は、宇田海に指示を出して部屋を後にした。

訪ねて来たお客様は顔見知りの少年だった。意外な来客から聞かされた内容は、『一晩この子を匿って欲しい』だ。横にいる女の子に見覚えがあったものの、大して気にせず承諾した。何か訳があることを察し、自分が力になれるのならと言う簡単で天地らしい理由だった。お礼と共に笑っているが、少女の顔が暗かったのを彼は見逃さなかった。

「そつだスバル君！この際、二人でブラザーを結んだらどうだい？」

空気を消すように話題を変えて見る。女の子の方は乗り気だ。彼女のギターはトランサーを内蔵しているらしい。ブラザーを結ぶ時も、少女にとっては少し重たいこの楽器をわざわざ使わなくてはならない。ちょっと不便そうだが、背負っていたギターに徐に手をかける。

しかし、スバルは首を横に振った。

「ごめんなさい。僕は・・・まだ、ブラザーを受け入れられません」

やはり三年間塞いできた心の壁は堅い。簡単には壊せないし、無理して壊そうとする必要も無い。笑って流しておいた。

その直後に研究所の方から呼び声がかかり、部屋を後にした。

二人は研究室を出て屋上に来ていた。ミソラに誘われて、この場について来ている。

「スバル君って言うんだね？」

「え？」

「ごめんね。助けてもらったのに名前も知らなくて」

「いや、気にしないで。僕が名乗っていなかったから・・・星河スバルだよ」

「フフ、改めて・・・響ミソラです。よろしくね？星河君？」

「うん、よろしく。スバルで良いよ？」

昨日少し話したと言えど、初対面と言っても良い。それにも関わらず言葉が自然と繋がって出てくる。知らなかったとはいえど大スターと二人で話をしている。

落ち着かない。

全国の男の子を惹きつける容姿を眼前にして、心拍数の上昇を自覚していた。

「色々、お世話になっちゃったね？」

「良いよ。僕が好きでやったことだから」

お礼を述べるミソラを見て顔が熱くなる。

トランサーがカタカタと揺れている。

ムツとして、コツンと軽く叩くと大人しくなった。

「何してるの？」

「ちよっと調子が悪かったみたいなんだ！・・・歌、本当に好きなんだね？」

「うん、大好き！」



「お母さんとの絆なんだよね？」  
「そうなの。私とママの『歌の絆』なんだ」

天気の良い空を仰ぎ、翡翠色の目に青と白の世界を送り込んだ。

「私ね、物心ついたところからパパが居なかったの。ママも体が弱くて、ずっと病院のベッドの上。だから、ほとんど一人暮らしだったの」

「・・・寂しくなかったの？」

「うん！だって、病院に行ったら毎日ママが笑顔で迎えてくれたから！それが好きだったの！」

言われなくとも分かる。

楽しそうに話す彼女の表情がそれを語ってくれている。

「ただ、ママが寂しそうだったの。病院の窓から見える小さい世界。そこだけがママの世界だった。

だからね、私考えたんだ。ママが寂しくなくなる方法。ママを笑わせて上げる方法・・・」

本当に寂しいのはミソラのはずだ。

その言葉をそっと胸にしまった。

「それでね、歌を作ることにしたの。私もママも、歌は好きだったから。」

私が外で見て聞いて来たこと・・・大きなことも、些細なことも、全部歌にして、毎日のように作って歌ったの。

ママ・・・とても喜んでくれたんだ・・・」

「お母さんも、幸せだったんだね？」

「うん！」

ミソラに釣られるように自然と顔が綻んでいた。

「そんな時に、アイドルオーディションがあったの……」

「出て見ない？あなたには才能があるはずよ」

「私がアイドルになったら、ママは嬉しい？」

「ええ、あなたの歌は、人を元気づけてくれる力があるわ。

ミソラの歌が、母さん以外の人にも届くと、嬉しいわ」

「ママを喜ばせてあげたかった。ママが、大好きだから！」

背負っていたギターを見せつけるように抱える。

「これもね、その時にママが買ってくれたの！『これで、オーディション頑張っ』って！」

私、必死に練習したの！毎日毎日……母さんも応援してくれて……おかげで合格できたの！

もう……最高だった！お母さんも、手を挙げて喜んでくれたの！」

昨日の展望台で見たのが彼女の笑顔だと思っていた。  
違った。

あの時のものなぞ、今の彼女の前では霞む。目に宿った光は瞳色に輝いている。

彼女の最高の笑顔。

今初めてそれを目の当たりになっていた。

「もつと、ママを笑顔にさせてあげたかったの！だから、舞台の上で思い切り歌ったの！」

少しずつだけど、ファンが増えて・・・私の歌を聞いて喜んでくれる人が増えて・・・その度に、ママは笑ってくれたの！

もう嬉しくって、もつともつと・・・たっくさん歌ったんだ！ママのために！」

「ミソラちゃんのお母さんは幸せ者だね？」

「うん。だから、きつと・・・天国にいるよ？」

聞き違いかと思い、目と口を開いた。

何かの例えかと思いを巡らせる。

ミソラの瞳が語っていた。エメラルドは灰を被せられたかのように染まり、もう光は無く、影しかない。

出される答えはやはり一つだ。

「・・・お母さんは・・・？」

「うん。三ヶ月前に・・・」

母に買って貰ったギターをギュッと抱き締めた。

「それからの・・・私、歌う理由が無くなっちゃった・・・」

ギターを背中に戻して手すりへと歩み寄る。

少し向こうに見えるコダマタウン、眼下に広がるアマケンの敷地。人々の生活が育まれる美しい場所。見る角度をわずかに変えれば全く違うものが見える多彩な世界は、今のミソラには無機質な白黒の世界にしか見えないのだろう。

眉ひとつ動かすことも無くそれを見下ろしていた。

「でも、マネージャーは金のために歌えって言っし。ファンの人も今以上の歌を私に求めてくる」

眼下の光景に比べれば、単純な色合いしか見せない世界を見上げる。

「もう、私・・・歌いたくない・・・」

それを見ていることしかできなかった。自分と大して差の無い身長。けれど背中では遥かに小さい。今までどれだけの重いものをそこに背負って来たのだろう。

事務所からは利益を上げることが求められ、ファン達からは成果を求められ、学校にも行けずに全国を連れ回され、商品として晒しものにされる。

11歳の少女が担うようなことではない。

大人ですら苦悩し、挫折し、去って行く世界。そんな残酷な場所で彼女がめげずに努力を続けられたのは母親がいたから。この世で最も大きな存在があったから。

唯一の肉親と言う掛け替えのない心のよりどころを失ってしまった少女。虚無の空間へと放り出された彼女に耐えられるわけが無かった。

「あのさ・・・そんなこと言ったら、お母さんが・・・」

近寄り、ミソラの肩に手を伸ばす。

「っ!」

それ以上は言葉が出なかった。彼女の体温を感じる場所まで指先が来ている。もう一度小さい背中を見て、地に落とした。留めた手

はしばらく行き先に迷った後に元の鞘へと戻った。

互いに何も話さない。言葉一つ、足音一つ発さなかった。春の中心ごろと思わせない、肌を震わせる風だけがその場を賑していた。

ドンドンという音が突然割り込んでくる。静寂な世界を踏みにじるかのようだ。

「ちょっと、困りますって!」

天地の声だ。近づいてくる足音は二つ。二人の視線の先で、音源となっていた屋上の出入り口がバンと開かれた。

「ここにいたのか!」

カエルのような男が出て来た。止めようと追いかけて来た天地と比較しても、負けず劣らずお腹が出ている。

「大変なことをしてくれたな!おかげでライブは中止!どれだけ損害が出たと思っっているんだ!」

スーツ姿と口調からするとマネージャーらしい。ミソラの身の心配ではなく、金の話をしていることから低質な人間であることはよく分かった。

「嫌!私、歌いたくない!」

手すりに沿って後ずさるミソラに、汚れた心の持ち主が詰めかける。

「おい!その子が嫌がっているじゃないか!」

「うるせえ!俺はこの子の保護者だ!他人は口出すな!」

天地の制止の声にも耳を貸さない。  
繰り返される眼前の状況。

何をすれば良いのか、しなければならぬのか分かっている。  
けど、頭と違って体が動かない。

「歌え！金を取り戻すんだ！」

「離して！嫌っ！」

掴まれる手を払おうとするミソラは、スバルの11年において聞いたことのない叫び声を上げる。

ミソラの目元で雫が光った。

それを見て、スバルの思考は無くなっていた。

「止める！」

太い腕に飛びかかる。

視界が大きく横に飛んだ。

ミソラの悲鳴。

全身が強く叩きつけられる。

遅れて左頬が熱いと訴えてくる。

天地がそばに駆け寄ってくるのを気配で感じた。

「あんだ、子供に何しているんだ!？」

殴られたのだと、ようやく理解した。

「そいつがミソラを匿ったのが問題だ！このクソガキ！ヒーロー気取りか？」

直も右手を振り上げ、掴みかかろうとしてくる。

天地が必死に止めようとスバルとの間に割って入る。喧嘩なんてしたことなさそうだが、拳を固めている。

「止めて！歌うから！」

一色即発しそうな場をミソラの一声が収めた。

「歌うから・・・スバル君に手を出さないで・・・う、エッ・・・エグッ・・・」

泣きじゃくるミソラに、ぶつきらぼうにただ「早くしやがれ」とだけ吐きつけ、マナージャーは階段を下りて行った。

後に続くように、目元を濡れた手で抑えながら歩き出す。

「ごめんね、スバル君。こんな目に合わせちゃって・・・それに・・・」

あんな難しい話をされても、分からなかったよね？

ミソラの詫びの言葉が心臓に直接叩きつけられたかのようにスバルに重くのしかかる。

「ただね・・・誰かに聞いてほしかったの・・・」

背中にかけられる詫びの言葉。ただ、石になり済みました。ごっこつとした足場から伝えられるひんやりとした感触も、肩に置いてくれている天地の手の温かさも、ミソラの悲愴な謝罪も、全てを無機質に受け流す。首一つ向けてやることも、声一つ上げることもしなかった。赤くはれ上がった頬を抑えることにだけ意識を固めた。

「助けてくれて、ありがと・・・嬉しかったよ。さよなら・・・」

遠ざかって行く足音が、ひしひしとスバルの胸を打った。

アマケンの医務室で手当てを受けていた。専門スタッフの処置のおかげで、頬の痛みと腫れはほぼ収まった。

「ごめんよ、スバル君。力になれなくて」

「・・・いえ・・・」

最期に、薬を塗ってある湿布を貼ってもらう。ツンと鼻を刺すが、ひんやりとした布切れは頬の熱と痛みは和らげてくれる。

天地の謝罪の言葉を背にしてアマケンを後にした。

バスが宙を蹴る。

目的地に向かって走り出した鉄箱の中に人が動く気配は無い。ナビが自動走行しているためスバル以外は誰もいない。

密閉された狭いはずの空間は壁が遠く感じるほどがらりとしてい



た。

「なんで・・・何も言っただけじゃなかった？」

他に居るとしたら、トランサーに住みこんでいる宇宙人ぐらいだ。

「僕が・・・何を言えるのさ？」

スバルの目を覗きこんだ。濁った茶色は何も映してはいなかった。

「『そんなこと言ったら、母さんが悲しむ？』」

「そう言うものなんじゃ・・・」

「母さんを悲しませているのは僕の方だ！！！」

スバルの叫び声は広くて狭い世界を満たし、ウォーロックの言葉を遮った。

「何も言えない・・・何も言えなかつたんだよ！」

肩が、手が・・・声が震えていた。

「彼女は、母さんを喜ばすために必至で頑張ってきた。僕は？僕は何かした？学校にも行かず、悲しませてばかりだ！」

スバルの悲しみを秘めた声は何度も聞いてきた。

「『母さんを悲しませないために、頑張れ』って言うの？」

けれど、違う。今までとは違う。異星人でも分かってしまった。それを見てしまったから。

「僕に当てはまることだよ。僕が言われるようなことだよ！」

胸に当てられた冷たさを、握り返してくれた感触を、屋上でのやり取りが鮮明に思い出される。

「僕には、何も言うことが無かったんだよ！」

あんな難しい話をされても、分からなかったよね？

あと少し肘を伸ばす。それだけで届く。それだけで、彼女の肩に手を置いてあげることができた。そのわずか先にある肩が、まるで別次元のものの様。

「……ヒーロー気取りだっただけだ……」

手を伸ばす権利すら、自分には無かった。

「僕は……」

抑えきれない悔しさが、頬を伝っていく。

「無力だ……」

ポタポタと、雫となってウォーロックの上へと落ちていく。画面

の向こうで弾ける涙を、ウォーロックはただじっと見つめていた。

### 第三十話・無力（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。  
感想やアドバイスをいただければ幸いです。

新しい書き方はいかがだったでしょうか？短い一文を並べることが多い私の書き方には不向きだったでしょうか？似合わなかったでしょうか？

今後は前回と今回、どちらの書き方にしようかと考えています。  
前回の方が良いとおっしゃる方は、感想かメッセージを送っていただけませんか？皆さんの意見を聞きたいからです。

ミソラの苦しさ、最期のスバル君の気持ちが伝わっていただけ  
ましたか？結構頑張った場所です！楽しんでいただけましたか？

### 第三十一話・歌の暴走（前書き）

今回も、書き方を変えています。自分なりに工夫はして見ました。読みやすくなったでしょうか？

### 第三十一話・歌の暴走

コダマタウンの騒ぎはより一層激しくなり、熱気は満ちるのではなく暴走していた。

響ミソラを無事に保護したと言う発表がなされた後に、コンサートスタッフ達が町中を忙しく探しているからだ。

ミソラがまた行方不明になったか、まだ見つかっていないかのどちらかだ。マネージャーの金田自らが汗だくになって走っているのが証拠だ。

持ち主の上下運動に合わせて、背負った楽器はガタガタと背中を打ち付ける。足場を踏み損ね、とっさに手を突く。この一瞬の減速も惜しむように足を動かす。

隙をつき、再び逃げ出したアイドルは展望台の階段を駆け上がった。いた。

人が来ない場所。

土地勘の無い彼女には、逃げ場所がここしか思いつかなかった。広場への傾斜の緩い階段を登りきる。

心臓が痛い。肺が酸素を求めて上下する。

熱の入った声が微かに、だが複数聞こえる。

唯一の逃げ場所である、この場所の出入り口付近にファン達が詰め掛けていた。どうやら、駆けこむところを見られてしまったらしい。まだこちらに気づいていないようだが、既に何人かが探しに来ている。

棒になった足を無理やり運ぶ。

スバルと出会った一番高い場所まで来て、物陰から広場を見下ろした。自分の名を呼び、探しているのが見える。

逃げようにも、彼らが塞いだ階段以外に逃げ道は無い。彼らに見

つまり、マネージャーの元へ戻されるのも時間の問題だ。

「やだ・・・もう、やだ・・・」

一昨日の青い流れ星は、願いなんて叶えてくれなかった。

あの少年に助けを求めるのは間違いだった。逆に巻き込み、怪我をさせてしまっただけだ。

誰も助けてくれない。

屋上の時から止むことなく流れる涙を拭い、奥から来るズキズキとする痛みを押しさえる。

こつんと背中ギターが何かに引っ掛かる。

それは転落防止用の手すり。

鉄でできており、大の大人すら受け止めてくれそうに高くて頑丈そうだ。しかし、少女に乗り越えられない事は無い。身を乗り出し、下を見ると・・・眩暈がする。

背けるように空を仰ぐ。

どこまでも広がる水色は、吸い込まれそうなほどに美しい。

「ママ・・・」

もう一度手すりに触れる。春なのに氷のように冷たい。手放したくなるそれを力一杯に握る。

反動をつけ、地面を大きく蹴飛ばした。

勢いのまま片足を振り上げる。

「・・・え？」

体が前に進まない。

誰かが肩を押し返している。

今進もうとしている先は空中だ。

抵抗も障害物も無い、翼をもつ者だけが自由を許される世界だ。にもかかわらず、そこに誰がいる。

被ったフードで狭まった視界を少しずつずらす。

白い棒のような手を生やした、水色の弦楽器がいた。

「きゃあ！」

悲鳴を上げ、飛びのくように手すりから転げ落ちた。

「だめよ、こんなことしちゃ」

楽器には必要の無い口を動かし、綺麗に並べられた鉄の棒達をすり抜け、ミソラの前まで近づいてくる。

ハートマークのリボンのようなものをつけ、釣りあがった目でにっこりと笑いかける。

「誰！？何！？？」

もちろん混乱している。

こう言う時に、相手を落ちつかせる答え方。彼女独特の笑い声を上げる。

「ポロロン、私はハープ。あなたの味方よ？」

「味方？」

簡単に警戒を緩めた。

孤独とは、それほどまでに人の心を弱くし、助けを求める。指し延ばされた手を疑うことなぞ無いに等しい。

「全く、酷いわよね？あなたの歌を売り物にしようだなんて！」



あのマネージャーも、ファンも！あなたの気持ちなんて知りもしないで！」

「わ、私の気持ち・・・分かるの？」

「分かるわよ！あなたと同じ、音楽を愛する者ですもの！」

最期のは事実だ。

だが、ミソラについてはかなり調べている。好み、経歴・・・家族構成。裏表の無いミソラだからこそハーブに全て筒抜けだ。

「私・・・もう、歌いたくない・・・私の歌は、ママのためだけにあるの！」

しかも、自分から話してしまった。助けを求める心がそうさせてしまう。

「そう、辛かったのね？もう、大丈夫よ、私があなたに力を貸してあげるから」

背中を摩り、すすり泣く涙を拭ってあげる。

取り入るには最適の方法だ。

「一緒に懲らしめて上げましょう？」

「・・・懲らしめる？」

「そうよ、あなたの歌には力があるわ」

「でも、私・・・」

どこまで行っても心優しい少女だ。

誰かを傷付けるなんて考えられない。

「戦わなきゃ、何も守れないわよ？あなたとお母さんの歌も！」

「ママ……」

「これ以上、大切な歌を汚されていいの？」

良い訳が無い。

けれど、その代わりに誰かを傷付け無ければならない。

開いた手を見つめ、唇を噛み締める。

何かに気が付くように、振り返るように立ちあがった。手を素早く背に回してハーブを隠す。

荒い呼吸をしているマネージャーが階段を上りきったところだった。

「見つけたぞ！さあ来い！歌え！金がいるんだよ！」

醜い塊を睨みつけた。

「こんな奴に、あなたの歌を汚されるの？」

ハーブがその背中に囁く。

「何してる！さっさと来い！お前には逃げ場も選択肢もないんだよ！」

「大丈夫よ。私が力を貸してあげるから？」

ミソラに、語りかける。

「歌え！歌っていれば良いんだ！金になるんだよ！」

「懲らしめてあげましょ？」

心に……響くように……

「お前の歌はうちの商品なんだよ！」

「違う！」

どちらを選ぶか？

簡単すぎる問題だ。

思いを口に叫んでいた。

「私の歌は、商品なんかじゃない！」

怒りをみせる金田と違い、ハープはポロロンとほほ笑んだ。

「私を受け入れて？」

頷いたのを確認し、ミソラの中へと入って行った。

やはり、この女の子を選んだのは正解だった。一つの存在となり、ミソラの心の空間へと体が流れていくのを感じる。相性が合い、孤独を抱え、おまけに歌が好き。これ以上、傀儡にするのに最適な者はこの星に存在しない。

そう断言できる確信があった。

体を伝う流れが止まり、閉じていた目を開けた。

「っ！？」

細い目が丸くなるほど見開き、口を両手で覆った。  
おぞましい光景が飛び込んできたからだ。

この場の色は持ち主の心境を如実に表す。生命を感じさせない血のような赤と、心を食らう闇の様な黒が波を描き、うねる。主の鼓動音と共に空間を大きく歪ませ、おどろおどろしい雰囲気醸し出していた。

タスケテ

声上がる。

中央にある球体からだ。

タスケテ タスケテ

呼応するように、隣から聞こえてくる。

振り向くが何も無い。

次は逆から、後ろから、頭上から聞こえてくる。

波は凹凸をより大きくし、ぐにやぐにやと揺れ動く。

タスケテ タスケテ タスケテ タスケテ

心音と反響するように徐々に広がっていく。

悲痛な叫びは広がり世界は不安定に回って行く。

タスケテ タスケテ タスケテ タスケテ タスケテ タスケテ



孤独な心はガラスのように脆い。  
それ以上だ。

固体と言うよりは液体。

解けだした雪玉がかるうじて球状を保っているかのようだ。  
少し力を加えれば、すぐに瓦解する。

ママ ママ タスケテ ママ

「・・・ポロロン」

「電波変換 響ミソラ オン・エア！」

ピンクと水色の光が包み込む。体が宙に浮き、色とりどりの様々な音符が無数に羅列してミソラを駆け抜ける。背負っていたギターは水色へと染められ、先端に小さい目と口が描かれる。

光がはじけ飛んだ。

足にはピンク色の装甲。胸には大きいハートマークが取り付けられている。赤紫色だった髪は金に変わり、水色のバイザーを取り付けた被りものには白い突起が耳のように取り付けられている。

異様な光景にたじろぐマネージャーに、ギターを構えた。

「やっちゃんなさい、ハープ・ノート！あなたの歌を汚す者に・・・」

「・・・うん・・・」

ギターと一体化したハープの弦を強くはじいた。

「パルスソング！」

撃ちだされた音が赤い音符へと形を変える。漂うと言つには早い、流れるような速度で送られる。

近づいてくる音符に戸惑いを感じ、逃げようと考える前にそれは金田の大きなお腹に接触する。

カエルが潰れるような悲鳴が上がった。

ハープノートの開いた瞳孔。その先に倒れた塊はビクビクと下に振動している。息をしているので死んではないだろう。

目を反らしたくなるような惨劇を瞬き一つせずに見つめていた。

天体観測を趣味とするスバルが、星より美しいと感じた瞳の輝きは跡形も無くなっていた。

満足そうに浮かべた笑みと感情が読めない瞳は、広場で騒いでいるミソラのファン達へと向けられる。

「さあ、今度はあの子たちよ？あなたとお母さんの歌を守りましょう？」

「・・・うん！」

言われるがままに、反動もつけずに軽く地面を蹴る。糸で釣り上げられているように、重力を感じさせないふわりとした跳躍。蠢くファン達の頭上を軽く飛び越え、広場の階段の入口へと降り立った。広場には二つの階段がある。一つはスバルとミソラが出会った見晴らし台へと続く階段。もう一つは、この展望台唯一の出入り口へと降りて行く階段。

ハープ・ノートが塞いだのは後者の方だ。

今のミソラはハープ・ノート。自身の周波数を意図的に変化させ

ない限り、人間には見えない電波の体だ。それゆえ、追いかけているアイドルが目の前にいることにすら、たった一つしかない逃げ道を奪われたことにすら、ファン達は気づいていない。

今も鼻の下を伸ばし、ミソラの名を叫ぶ彼らにクスリと微笑んだ。

歌っているときの明るさも

何も知らなかったスバルをからかった時の楽しさも

アイドルとして培ってきた作り笑いも

母の話をした時の無邪気さも

ハーブ・ノートが浮かべた笑みには、一切無かった。

「パルスソング！」

抱えているそれを見やる。

タスケテ ママ タスケテヨ ママ ママ

「大丈夫よね？心を壊したからって強くなるわけじゃないし」

しかし、今体を動かしているミソラは戦闘の素人だ。もし、ウオ  
ーロックと出会ったら・・・勝てるとは思えない。その時は、戦闘  
経験のある自分が彼女の体に乗っ取るしかない。



ミソラの心を壊すことによって。

「今はこれで良いわ。ちょっと人間を攻撃するだけ。仕事してましたってごまかす程度で良いんですもの・・・別に壊す必要なんてないわ。それだけよね？」

絞り出したごまかしの答えに自分を納得させた。  
ポロロンと笑えないことに気付けぬまま。

### 第三十一話・歌の暴走（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。  
感想やアドバイスをいただければ幸いです。

ハーブはちょっとキャラが変わっちゃってますね？まあ、アレン  
ジってことで、許してください。

ミソラは心を壊されていません。そそのかされて暴走しちゃって  
る状態です。

ミソラの明るい笑顔が、全く無くなってしまった事が伝わってい  
ただけたでしょうか？今までは少し違った『笑う』という表現に  
挑戦してみました。

### 第三十二話・歌の襲撃（前書き）

ユニークアクセスが4000を突破しました！

読んでくださっている皆様、ありがとうございます。

前回の3000突破に気づくのが遅かったため、なんだか・・・

「え、もう!？」って気がします。

実際はそれほど早いわけでもないはず・・・ですよ？

今回は思ったように筆が進みませんでした。

あれ？変だな？

スバルとミソラの気持ち、そして二人の距離が皆さんにも伝わっていただけだと思います。

### 第三十二話・歌の襲撃

左手についた機械を見て目を擦った。アンテナが付いたヘッドパ  
ーツを取って頭をかく。表示されている数値がグングンと上昇して  
いく。

「何か異変があったのか？」

トランサーの向こうから部下が何かを伝えようとしている。混乱  
しているようだ。何を言っているのか分からない。聞き返す前に悲  
鳴が上がり、通信が途絶えた。応答を呼び掛けても、帰ってくるの  
はノイズの様な雑音だけだ。

「Z波が上昇している。何か近づい……」

言い切る前に楽器を演奏するような音が体を突き抜けた。

コダマタウンにつくとすぐにあの二人に捕まった。相変わらず目  
が血走っている。ここまで来ると嫌悪感すら感じてしまう。大きい  
方がミソラと一緒にいたかと聞いてくる。小さい方が『自分とミソ  
ラ似の少女が展望台から出てくる』のを見たらしい。危機迫った今  
までの二人を思い出し、否定しておいた。

「だよな。こんな奴がミソラちゃんと知り合いなわけないよな？」  
「マネージャーさんに、『ミソラちゃんに似た女の子が、アマケン  
行きのバスに乗った』なんて言って、迷惑でしたかね？」

自分そっちのけで勝手なことを言う二人。  
キザマ口を睨みつけるが、すぐに止めた。殴られることしかでき  
なかつた自分を思い出したからだ。

「ミソラちゃんのライブ、見たかつたな・・・」

「今や大スターですからね？こんな小さな町じゃあ、やる気にもな  
らなかつたんでしょう？」

抑えたそれはすぐに噴火する。

「ミソラちゃんはそんな子じゃない！」

ミソラが今までどんな気持ちで歌って来たのか。それを知らずに  
吐いた言葉が許せなかつた。驚いている二人を睨みつけた。

「何も知らない癖に・・・あの子の気持ちも知らないで、そんなこ  
と言うなよ！」

「じゃあ、お前が何を知ってるんだよ？」

「っ！？」

何を知っているんだろう？

「昨日まで、ミソラちゃんの名前すら知らなかつたじゃないですか  
？」

彼女に出会つたのは昨日だ。

今日一緒にいた時間は、半日にも満たない。  
言葉を交わした時間はもっと短い。

一時間、いや三十分もあつただらうか？

「お前こそ、ミソラちゃんのこと何も知らねえだろうが。口出しするな！」

言い返せなかった。

ここでも、ミソラを庇うことができない。

無力

ただ、言われるがままに口を閉ざすしかなかった。

「それより、なんか騒がしいですね？」

「ミソラちゃんが見つかったのかな？行ってみようぜ！？」

走り出す二人に、止めるよとも言えず、踵を返した。

「良いのか？」

「僕には・・・何も言える権利が無い・・・」

バスの中でのやり取りを思い出し、ウォーロックもそれ以上は何も言わなかった。

5、6歩歩いた時、背後からさっきの二人の叫び声が聞こえて来た。ただの叫び声ではない。痛みに苦しむようなものだ。

「え？」

「ビジライザーをかける！」

条件反射だ。すぐに額のそれを下ろして振り返った。

さっきまで話していた二人がぐったりと倒れている。そのすぐ近くには、ピンク色の少女。

「・・・嘘だ・・・」

認めたくない。小刻みに首を横に振る。

走り出す。

姿は変わってしまったが、見間違えるわけが無い。

「ミソラちゃん!？」

さっき別れたばかりの少年だ。この町に戻って来ていたらしい。

「スバル君・・・」

姿が変わった自分を、すぐに見つけてくれた。

今日の朝と同じだ。

震えて、泣いていた自分を見つけてくれたあの時と同じだ。彼は

すぐに自分のもとへと駆けつけてくれる。

自然と足が彼に向く。

「止めるんだ!こんなこと!」

足を止めた。

自分を咎める言葉。

否定する言葉。

「来ないで!」

彼も皆と同じだ。

詰められなかった距離は、まるで互いの心の様。  
これ以上は詰められない。

近いようで、遠い。

「君は傷付けたくないんだ・・・だから、来ないで？」

手に持ったギターを握りしめ、ウェブロードへと跳躍した。

「私とママの歌を汚す奴ら・・・皆、消えちやえ！」

町の方から悲鳴とギターを弾く音が聞こえてくる。  
無差別に襲いだしたのだろう。

「あれはハープと電波変換したな。行くぞ！？」

「・・・」

「・・・おい？」

返事が無い。

上を仰ぐウォーロックと対称的に俯いていた。

「僕に・・・何ができるの？」

「あ？」

「ミソラちゃんを、助けられなかった僕に・・・何が？」

アマケンでの出来事が、一つ一つ甦る。

「・・・」



「僕には・・・ミソラちゃんに何もしてあげられない。戦ったって・・・」  
「うるせえ!」

自分の左手が飛んで来た。

ジンジンとなる鼻を押さえる。

「なら、このまま見過ごすのか?あいつの暴走を見なかったことにするのか?」

「それは・・・」

トランサーの中から出て来たウォーロックを見るため、ずれたビズライザーをかけ直す。

「少なくとも、お前はそういう奴じゃないはずだぜ?」

「・・・ロック・・・」

「考えるのは後にしろ!このままじゃ、被害が増えるぞ?」

音は大分遠くなっている。

しかし、襲撃が終わっていないことに他ならない。

「行くぞ!?」

トランサーに戻り、こっちを睨むように見ている。

耳元まで上げる。それ以上は上がらない。

「ミソラを救いたいのか!?そうじゃねえのか!?はっきりしろ!

!?」

「っ!?!?」

答えはとても簡単で、単純だ。  
思いのまま左手を突き上げた。

「電波変換 星河スバル オン・エア！」

道行く人が、次々と倒れる怪奇現象。大スターを追いかけていた時の雰囲気はもうどこにもない。  
目に見えぬ恐怖から逃げ惑う人々に、容赦なく音を浴びせる。苦悶の表情を見て、次なる標的へと弦を引く。

「ミソラちゃん！」

「・・・スバル君？」

ミソラが今いる場所は、人間にはこれないはずの空の道だ。にもかかわらず、スバルがいた。その姿は青く、先ほどとは大きく違っていた。まるで昨日の流星の様。

「君も電波変換出来たんだ・・・」

「もう、止めようよ!？」

「・・・またそれ？嫌だよ・・・私は、闘うって決めたんだから」

ミソラの心を抱きかかえる手に力を込める。

壊れない程度に。けど、いつでも壊せるように。

自分にできるのかと言う疑問を隠すように話しかける。

「まさか、もう出会っちゃうなんて・・・ついてないわ。久しぶりね、ウォーロック」

「FM星王の命令か？」

「気は進まないけれど、任務だからね」

変わらないなため息をついた。

FM星にいたころから、この女はいい加減な様な、気分屋の様な・・・こんな感じだ。

「・・・狙いかは俺が持っている鍵か？」

「”アンドロメダの鍵”ね？やめとくわ。か弱いミソラに、荒っぽいあなたの相手をさせるのは、気が引けるしね？私は地球人抹殺の任務を優先するわ。あなたには手を出さないから、見逃してよね？」

「俺も女相手に本気を出す趣味は無い。地球人がどうなるうが知ったことじゃねえ」

「なら・・・」

「けどな・・・そうは行かねえみたいだぜ？」

ちらりと、立ち上がった相棒に目を向けた。

何ができるか分からない。

けど、対峙すれば何かあるかもしれない。

そう考え、ウォーロックに励まされるがままにここへ来た。

まだ、答えは出ない。

眼下では、年齢性別関係なく町の人々が倒れている。駆けつけた

警察とサテラポリスが救出作業に入っているが、彼らも怯えているようだ。指揮系統も狂ってしまったているのだろつ。機敏な動きとは言えない。

「僕は・・・君にこんなこととしてほしくない！だから・・・」  
「分かった」

伝わった。  
綻ぶ顔を上げる。

「パルスソング！」

ウェブロードに尻もちをついた。

威力は大したことは無い。

オックス・ファイアのブレスや、キグナス・ウィングの羽弾よりは低い。

しかし、手足がしびれる。音波が衝撃へと変わり、内側から体中を駆け抜ける。

「君も、結局は他の人と同じなんだね？」

「・・・ミソラちゃん？」

違う存在に見えた。

展望台やアマケンの屋上で話した、響ミソラはもういない。

「私は、私とママの歌の絆を守る！そのためだったら、君にだって容赦しない！」

それは、ミソラの宣戦布告。

## 第三十二話・歌の襲撃（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。  
感想やアドバイスをいただければ嬉しいです。

次回はVSハーブ・ノート編です。

今までとはちょっと違った戦いにする予定です。

・・・面白かどうかは別ですけれどね？

### 第三十三話・響かぬ思い（前書き）

いつもご愛読ありがとうございます。

皆さんの応援のおかげで、

PVアクセスが20,000、

ユニークアクセスも4500を突破することができました。

本当にありがとうございます。

皆さんの応援ある限り、どれだけ忙しくとも、私はこの作品を執筆し、投稿します！

ストーリー展開が遅いですが、どうか見守ってやってください。

では、ハープ・ノート戦です。

今回は今までとは違ったバトルに挑戦しています。

どうぞ、こゆっくりして行ってください。

### 第三十三話・響かぬ思い

可愛らしいフォルムだ。赤い音符は丸みを帯びており、幼い少年少女達に音楽の愛らしさを伝え、心を潤すだろう。愛でたくなるそれは綺麗なオレンジ色の上へと降り立つ。

爆散する。

立ち上がる煙から青い影が飛び出す。少し巻き込まれたのだろう。被ったヘルメットに黒い汚れが付いている。

構えたギターから新たに飛ばされた青い音符を、隣のウェブロードへと飛び移ってかわす。続いて飛んでくるカラフルな音符達を撃ち落とす。赤、青、黄、紫など、色とりどりのそれらは速度はあるこれらの攻撃の元となっているのが音だからだろう。音速に至っていないのが救いだ。それに加え、一発の威力は低い上には大きい。攻撃を退けるのは簡単だ。それでも、ハープ・ノートへは弾が届かない。次々に打ち出される音符達に阻まれる。

撃ち勝てるかと踏み、ハープ・ノートは音符の量をさらに増やす。ロックマンはバトルカードを取り出し、ウォーロックをガトリングへと変化させる。4つの銃口から放たれる弾丸が、壁となって迫っていた音達を砕いて行く。

ハープ・ノートのパルスソングもこの速度には敵わない。さっと身をかめるが、彼女には一発も当たらなかった。足元に着弾する。

「おい、なぜ攻撃しない!？」

「ミソラちゃんには、これ以上傷ついてほしくないんだ!」

「そんなんで勝てるか!!!」

スバルの甘さに舌を打った。

文句はそれだけで終わる。次の音符攻撃が繰り出されたからだ。

「君だって皆と同じ！私を助けてなんてくれないんでしょ！？」

応戦するうちに、ハープ・ノートが同じウェブロードへと移動してくる。ロックマンの側面へとギターの頭を向ける。

「マシンガンストリング！」

5本の弦が束となり、弾丸のように打ちだされる。

全ての音符を撃ち落とした時は遅かった。弦が胸に突き刺さる。すかさず、ハープ・ノートはギターの弦をしゃにむにに弾く。

音符として間接的に飛ばしていたのとは違う。振動と衝撃が直接伝わってくる。無論、その分威力も高い。ロックマンの骨や内臓にまで振動が伝わってくる。しびれる手で弦を掴んで振り解くと、ガクリと膝が折れる。

「僕は・・・君を助けたいんだ・・・」

「君の助けなんていらない！優しそうな顔して結局助けてくれない！スバル君のやっていることは、偽善って言うんだよ！？」

お互いに、苦悶に顔が歪む。

「僕が・・・中途半端に優しくしたのが、いけなかったの？君の力になりたかっただけなんだ・・・」

「だから、いらないよ！」

打ち出されるパルスソングの群れをシールドで防ぎ、距離を詰める。次々と飛ばされてくる音符にウォーロックは歯を食いしばった。

「くっ、限界だ！」

「っ！バトルカード モジヤランス」



竹槍を両手に持ち、長いリーチでハーブ・ノートの足元をすくう。バランスを崩した彼女に、切っ先を突きつける。

「君の負けだよ！お願い。もう止めて！」

「嫌！パルスソング！」

止む負えず後方へと低く飛ぶ。撃ち落とすが、一瞬の出遅れが響いた。音符の大群に押されつつある。

「チェインバブル」

水泡を打ち込んだ。先頭の音符を包み込むと、連鎖するように後方の音符達を一つ一つ泡に閉じ込めていく。このまま最後尾にいるハーブ・ノートにまで届くはず。

新たな音符群が頭上から降り注ぐ。

弧を描くように跳ぶハーブ・ノートの姿を確認し、新たなカードを取り出す。

「テイルバーナー！」

オックス・ファイアが使ってきたもの程の威力は無いが、火炎放射を放つ。炎に飛びこんで来たそれらを消していく。

ハーブ・ノートは少し上にあるウェブロードに降り立ち、直もパルスソングを打ち出してくる。

今度は完全に出遅れた。回避のために別のウェブロードへと飛び移る。

「ショックノート！」

スバルの進行報告にピンク色の箱が一つ召喚される。アンプと呼ばれるそれから白い音弾が放たれ、元の場所へと押し戻す。この音も衝撃へと変わり、動きを束縛する。

ハーブの合図で、今が攻め時と弦を弾く手を早め、連なるように音符達が打ち出される。

ウォーロックがシールドを張るが、防ぎきれない。

爆音と衝撃が上がる。

詰めは念入りに。ウェブロードごと破壊するつもりで音を繰り返して続けた。

ほっと一息をついていた。戦闘の素人と思っていたミソラだが、ハーブ・ノートとなった自分の力をもう把握しているようだった。

「これなら・・・壊す必要は無さそうね？」

タスケテと訴えるミソラの心を大事そうに抱える。

「私は・・・FM星人よ？なんで地球人の心配なんてしてるのよ？」

煙と音符をかき消すように巨大なハンマーが振るわれた。使用者の二倍はあるジャンボハンマーは攻撃だけではなく、防御にも使えるらしい。放った攻撃をことごとくかき消した。

「スバル、分かっただろ？あの女は本気だ。やらなきゃやられるぞ！？」

「でも・・・それでも、僕はできる限りあの子を傷つけたくない！」

「いい加減にしゃがれ！」

一方的に消耗している。体のあちこちに傷を負っているロックマンに対し、ハーブ・ノートはほぼ無傷だ。やられるのも時間の問題。いらだちが募る。

「お願いだよ。ロック・・・今回は違うんだ・・・」

「何がだ？」

「オックス・ファイアを倒したのも、キグナス・ウイングを倒したのも、僕・・・僕達だ」

「当たり前だろうが！それがなんだ！？」

「けど、オックスに取りつかれたゴン太君を助けたのは？  
キグナスに惑わされた宇田海さんを説得したのは？」

傲慢だが、根は友人思いな学級委員長。

心底お人好しの所長さん。

「僕は、誰も救っていない・・・誰も助けられていないんだ！」

敵を倒しただけ。暴走した本人を救ってあげたのは別の人物だ。

「僕は・・・無力だ。本当に、何もできない・・・今回だけじゃない、今まで何もできていなかったんだよ！一番大切なことを、誰かに任せきりにしてきた！」

バトルカードで召喚した武器を消し、ハーブ・ノートを見上げる。  
ウォーロックは黙ったままだ。

「でも、彼女を救えるのは誰？ミソラちゃんの母さんは、もういないんだよ？」

心の支えであったミソラの母親はもうこの世にいない。  
頼れる者もない。

だからFM星人に取りつかれ、今のような状況に陥っている。  
そんな彼女を誰が助けられるというのか？

「・・・じゃあ、お前が救うのか？できるのか？」

「分からないよ!!」

胸に渦巻くものを吐き出すように叫んだ。

「けど・・・助けになりたいんだ！あの子の気持ち、分かるから！  
だから、お願いだよロック！僕のやり方に付き合って!!」

やっと・・・あの時に、展望台で震えていたミソラの手を握った  
訳を理解した。

「ちっ！仕方ねえ・・・けどな、いよいよヤバいと言う時は・・・  
俺も好きにやらせてもらっぞ?」

頷き、ハープ・ノートと同じウェブロードへと降り立った。

「ミソラちゃん・・・僕がブラザーを結んだら、君を救えたの？」

天地の提案。あれを受け入れていたら・・・

パルスソングが飛んでくる。

対してバトルカードのモエリングを放つ。炎を纏った車輪は攻撃  
を破壊しつつウェブロード上を転がっていく。

それを弾きとばすように放たれる弦の束。

脇腹をかすめるそれに見向きもせず、続いて飛んでくる音符の群れにバスターを撃ち込んで行く。

「僕があの時・・・君に何か声をかけて上げていれば、こんなことにはならなかったの？」

屋上で話を聞いた時、少し手を伸ばしていたら。肩に手を置いて上げていれば・・・

全て撃ち落とした直後、頭上からの攻撃に身を伏せた。

召喚したアンプの上に乗る、パルスソングとシヨックノートの二重攻撃を放っていた。

モアイフォールのバトルカードをウオーロックに渡す。

ハープ・ノートの頭上に、モアイ像の様な顔を象った丸い岩が召喚される。アンプから降り、軽々とウエブロードへと着地する。

巨石に押しつぶされたアンプが爆発する。

引きずり下ろしたところにグラビティステージを使用した。

ハープ・ノートの足がウエブロードから離れない。これで、しばらくは動けない。

「どうやったら、君を助けてあげることができたの!？」

届かない、目の前にいるのに、言葉を伝えられるのに。

「私には何もいらぬ。スバル君もいらぬ!

私には、ママとの『歌の絆』があればそれでいいの!」

心は届かない。

足は動かせずとも攻撃はできる。シヨックノートが放たれる。

正面から来るそれを回避すると、後ろからの衝撃に撃ち抜かれた。

振り返ると、そちらにもアンプがある。

「一つしか召喚できないと思っていた？」

両脇から挟み込むように移動したアンプから弾きだされる音弾。痺れる体を無理に動かして正面に飛ぶと、またしてもマシンガンストリングに捕まる。弦から伝えられる衝撃と、再度放たれるシヨックノートが襲う。

もうもうと立ち上る煙を見て、アンプと弦を一旦戻す。

晴れゆく灰色の世界の中ではロックマンが倒れ込んでいた。

「僕じゃあ……君を、助けてあげられないの？」

### 第三十三話・響かぬ思い（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

ロックマンがフルボッコにされてますね？

ハーブ・ノートが強すぎる気もするでしょうが、相手から反撃が無かったらこれぐらい強気で攻めますよね？  
って言うわけでもあまり気にしないでください。

攻撃に対応するだけで防戦一方と言うバトルシーンはいかがだったでしょうか？

スバルの気持ち、ミソラの気持ち、届かない二人の心が伝わって貰えたかな？

ハーブ・ノート戦は次回で終わりです。

## 第三十四話・響く思い（前書き）

今回でハーブ・ノート戦は終わりです。  
では、どうぞご覧下さい。



### 第三十四話・響く思い

満身創痍。

倒れたスバルを4つの文字で表すならば、これがふさわしい。

「僕は・・・君を助けたいんだ・・・僕は・・・」

それでもミソラを案じる思いは変わらない。

「ウォーロック、良いの？やられちゃうわよ？」

その子の心を破壊して乗っ取っちゃったら？」

左手のウォーロックを覗き込んだ。一体化している今、彼にはスバルの体を操ることもできる。今まで戦った二人から可能性は充分にあった。

「バカか？最初に約束しただろう？俺が貸すのは力だけだ。

乗っ取ったりしねえって。それより、さっさと立て！助けるんだろっ？」

鼻で笑って見せる相棒の励みに答え、立ち上がった。

ハープは歯を食いしばった。

ミソラは優しすぎる女の子だ。その証拠に、彼女が襲った人間達には誰一人と絶命に至っていない。本気で音符攻撃を放っていれば、生身の肉体など跡形も残らないにも関わらずだ。「消えちゃえ」と言いながらも、ミソラはそんな残酷なことは望んでいない。

同様に、スバルにも全力で攻撃できないでいる。

さっきの誘惑にのせられ、ウォーロックがスバルの心に乗っ取れば……

意識が完全に乗っ取られた彼らを倒せば、消滅するのはウォーロックだけだ。スバルは助かる。それをミソラに説明すれば、全力で攻撃してもらえると考えていた。

体に乗っ取ったウォーロックが相手になれば、こちらも被害を受けるだろう。しかし、いくら戦闘能力で劣る自分達でも、ぼろぼろになった今の相手に負ける要素は無い。

「お願いだから……使わせないでよ」

最後の手段を抱きしめた。

腕や足が痺れている。体内から悲痛の声が上げられる。音という特性が体の内部にまでダメージを伝えてくる。

それ以上に心が痛い。

伝わらない

助けられない

無力さを自己嫌悪する

ヒーローになりたいわけではない

かっこ悪くても良い、ただ目の前の少女の力になりたいだから、立ち上がらなければならぬ。

彼女と向き合わなければならぬ。  
相棒の言葉を胸に、折れそうになる心を奮い立たせる。

「力に、なりたいたんだ」

「なんで、そこまでするの？」

「君の気持ち・・・分かるから・・・」

「・・・君に、私の何が分かるって言うのよ!？」

ギターを銃のように構え弦を放ち、ロックマンの体を貫く。  
途端に煙が上がり、青い体は茶色い物へと変わっていた。

「ヘンゲノジユツ!？」

バトルカードの一種だ。自分の体をとっさに茶色いぬいぐるみと入れ替え、その隙をつき相手へ攻撃するものだ。  
気が付いた時にはスバルが目の前にいた。  
両手を掴まれ、ギターごと上へと持ち上げられる。

「これで君の攻撃手段は封じたよ？」

「ミソラ、私ごと叩きつけなさい！」

ギターと一体化したハーブが叫ぶ。  
頭を殴りつけようとするが、腕が下がらない。

「僕だって男だ!女の子の腕力に負けるつもりはないよ!？」

「なら、これでどう?」

アンプが召喚される。二人の両脇にだ。

しかし、今二人は接近している。このままショックノートを撃ち込めば、ミソラもただでは済まない。

「私は耐えられるけれど、怪我だらけの君には無理だよね？  
今まで威力を抑えていたけれど・・・本気で行くよ！」

これが決まれば終わり。

直前で相手が手を離せば仕切り直した。

「ショックノート！」

掛け声とともに、白い音符が放たれる。今まで以上の速度と大きさを誇るそれが、二人に襲いかかる。

手の緩みを感じ、笑みを浮かべた。手を離れた。これで仕切り直し。

後方に下がろうとする。

「え？」

それより早く、体が後ろに飛んだ。

彼の両手が自分を突き飛ばしていた

踏ん張るように地に着けている

二つの白に挟まれようとしている今も怯えは無く、ミソラの目を捕らえていた

爆音と爆音がぶつかり合う。同じ高さと大きさを持った音は、共鳴現象を起こした。振動は互いの存在を相乗し、威力を跳ね上げる。自分の場所にまで届いてくる爆風に思わず目をつぶった。

パラパラと降りかかるオレンジ色の水晶達はウェブロードの破片。

その向こうには、ロックマンがかるうじて立っていた。ヘルメットにはヒビが走り、バイザーは一部が欠けている。左手はだらりと下がり、ひざは曲がり、いつ倒れてもおかしくは無い。ウォーロックの頬にも焼け焦げたような傷跡が付いている。

「なんで・・・私を庇ったの？」

「言ったでしょう？君には・・・これ以上傷ついてほしくないんだ。そして、君を助きたい・・・君の力になりたい・・・」

スバルの言葉がズキリとミソラに突き刺さる。

意地を張るように、胸に入ろうとしてくるものを塞ぐように言葉を吐きだす。

「偽善者ぶらないでよ！君には分からないよ、私の気持ちなんて・・・」

分かるわけが無い。

他人の気持ちを知れる人間などいないのだから。自分にしか分からない。

ミソラの気持ちは分かっている。

「分かるよ！僕だって・・・」

救えるかなんて分からない

何をすればいいのかも、今になっても分からない

だから、震える唇を必死で抑え、ただ自分の気持ちを叫んだ。

「父さんがいないんだ!!」

「……え？」

肩で息をしている。空気を求めるように、限界にまで開かれるスバルの口元には赤い筋が伝っている。今攻撃をすれば、勝てる。

なのに、できない。

スバルの声に聞き入ってしまったから。

「僕も……父さんがいないんだ。3年前に……居なくなっちゃったんだ！」

だから……大切な人を、失う辛さも……嫌なことを……無理やり、やらされようと……する辛さも……分かるんだ」

震えてくる。

スバルの全身がだ。

三年間スバルを拘束し、捕らえて離さない間。

スバル自身も振り切れず、いつしかあらがうことすらしなくなった現実は今改めて向き合う。

それが彼女の手を取った理由であり、今を救える唯一思いついた手段。

自分の心の傷口をえぐり、言葉を紡いでいく。

「……僕も、色々……辛い目に合ったんだ。

僕の場合は……学校に行くことだったけれど……誰か親しい人ができてしまって、

その人が、父さん……みたいに……居なく……なったらって。

そう思うと・・・怖くて・・・怖くて仕方ないんだ！」

今でも一番思い出したくない思い出だ。

母から伝えられた父の行方。

目の前からいなくなってしまうた大好きな背中。

絶望と喪失感。

光を奪われ、暗闇に落とされ、何も見えなくなった。

あんな思いは、二度としたくない。

「それで、誰かと関わるのが・・・すごく怖くなって・・・学校にも行けなくなつて・・・

学校の先生とかが、僕を学校に・・・登校させようとしてきて・・・それが本当に嫌で、生きることが辛くなって・・・逃げ出したいって・・・

し、死んでしまいたい・・・そう思った事もある」

一昨日の夢を思い出す。

学校に来てと言う教師達。

それが嫌で、二階から身を乗り出し、花壇へと・・・

思い出しただけで全身が冷たくなる。

瞼を全力で閉じる。現実を阻む最高の行為。

自分を戒めるように左手の二の腕を、悲鳴が上がる程掴む。

今引いてはいけない。

彼女のために

閉じたくなる目を無理やり開き、未だに座り込んだままの彼女の瞳に向き合う。

「けれど、そんな時・・・僕を救ってくれたのは・・・母さんの一

言だったんだ」

今でも覚えてる。

泣きじゃくる自分の背中をなでてくれた手の温もりも一緒に……  
3年間、あれが自分の支えだったから。

学校なんて、行かなくていいのよ

いつか、自分から行きたいと思えるようになったときに行けばいいんだから

「たったそれだけのことだったけれど、僕にはとてもうれしかったんだ！

それが無かったら……きっと僕は……自分を傷付けていた」

スバルの言葉が胸に響く。

展望台から身を乗り出した自分を思い出していた。

「……だから、母さんを失った悲しみも……

歌を歌いたくないって言う……君の気持ちも……分かるよ……

」

異星人の二人は、ただじっと成り行きを見守っていた。

ウォーロックはスバルとの約束のために。

ハープは聞きながらも両手に抱えた心を眺めていた。



「……僕は……君の……力になりたいんだ！」

何も言えない。

スバルを見れなくなってくる。

「歌わなくなつて良いんだよ？歌いたくなつたら、また歌おうよ？  
今度は、君と……君の母さんとの絆の歌を、愛してくれているフ  
アンの人達のために」

目頭が熱くなってくる。

視界がぼやけてくる。

「だから……もう……自分と、母さんとの歌を……傷付け、  
ない……で……」

右足から力を抜いたかのように、体が大きく斜めに傾き、青白く  
光った。

赤い服と藍色の半ズボンの少年が金色のペンダントを揺らす。

「っ!？」

姿が変わると同時に、倒れるという現象は電波の道をすり抜けて  
終わる。力なく閉じられた目。

彼の手は重力に逆らうそぶりも見せない。

人形が投げ捨てられたかのように、地面へと向かって行く。

「いやあああああああ!!!」

駆けた。

ウェブロードから飛び降りるミソラの目の前で、スバルは風を切

りながら真つ逆さまに落ちていく。

「届いて！お願い！！」

限界にまで、腕をちぎる思いで手を伸ばす。

届かない

眼前にいる彼が遠い

あと少しなのに届かない

地面が無情に迫ってくる。

「ミソラ、蹴りなさい！」

考えなかった。ハーブに言われるがままに足を延ばす。堅い感触があり、それを蹴飛ばした。

タイミングを合わせてハーブが召喚したアンプだ。

勢いを増し、スバルに並ぶ。

正面から抱き締めるようにスバルを抱え込み、地面にふわりと着地した。

そこは、偶然か運命か、あの展望台。

ぐったりとする彼を堅い灰色の上へと寝かせる。

横にしたスバルの目は開かない。

「ごめん・・・ごめんね・・・スバル君・・・」

スバルの頭を抱きしめていた。いつの間にか流していた涙が、彼の頬へと落ちる。

体が弾け、ピンクの粒子が渦を巻きあげる。

電波変換を解いたミソラと、意識を取り戻さないスバルを包み込む。

一瞬の絵が消えた時、少し離れた場所にハーブが姿を現していた。彼女の瞳には、肩を震わせる背中与華奢な腕に支えられる少年がいた。

二人を隠すように瞼を下ろした。

「私達……いえ、私の負けね……」

### 第三十四話・響く思い（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

逃げ続けたスバルの小さくて大きな前進。

それに感化されるミソラ。

そして、今までとは違った戦いの終わり方はいかがだったでしょう  
か？

感動・・・とまで行かなくても、楽しんでいただけたら幸いです。

### 第三十五話・歌の絆（前書き）

ユニークアクセスが50000を突破！

いつも・・・いえ、一度でも読んでくださった皆さま、本当にありがとうございます

皆さまへの感謝と詫びの思いでいっぱいです。

最近は更新が遅くなってしまつて申し訳ありません。

多くの方々がご覧になってくださっているのに、応えられない状態です。

これからはさらに更新が遅くなります。

ですが更新は途絶えさせません。

どうぞ、これからもよろしく願います。

### 第三十五話・歌の絆

鳴り響くサイレンはコダマタウンのあちこちから聞こえてくる。おそらく、病院に搬送し切れないのだろう。乗用車から医師達が降りてくる。こちらに出向いて、被害者達を見ているらしい。幸いにも大怪我をした者はいないようで、軽い脳震盪程度ですんだようだ。入院しなければならぬような者は、頭の打ち所が悪かったミソラのマネージャーだと名乗る男を除いて、今のところは出ていない。

その騒がしさが少年の目を覚まさせる。

「・・・っん・・・あ、ミソラちゃん？」

「良かった・・・気が付いた」

「・・・ここは？」

「展望台」

「そっか・・・」

ようやく視点が合ってくると、ミソラが心配そうに上から覗きこんでいるのが分かった。上と言っても、空に向かう上ではない。寝転んだ自身の頭がある方向の上だ。そっちに目をやると、ミソラが来ているパーカーのピンク色の生地が見える。それ以外は見えない。横を確認しようとする、柔らかい感触に当たる。押しつけた頬を温もりがふわりと包み込んでくる。気持ちよさに目を細め、再び眠りへと誘なってくる。狭まってくる視界がきめ細かい白い物を確認した。

「って、うわー！」

振り返ったエビが跳ねる様に飛び起きた。自身の頭があった場所

はミソラの膝の上だと気づいたからだ。膝枕と言っちゃつた。  
当の本人はスバルの動揺する理由が分かかっていないらしい。あたふたするスバルに謝罪した。

「ごめんね？」

「え？」

「こんな騒ぎを起こしちゃって・・・スバル君に怪我させて」

「・・・気にしないで。言ったでしょ？君の力になりたいって」

「・・・ありがとう」

以前もこの場所で見せてくれた笑顔をだった。

もっと見ていたはずなのに、ミソラを視界の隅へと追いやってしまっ。

「あ！？君に取りついていたFM星人は！！？」

途端に曇るミソラの視線が示す先に、ウォーロックとハーブが居た。手すりのそばで何かを話している。

「なんで、止めを刺さないの？」

「言っただろ。女相手に本気を出す趣味は無い」

「・・・はあ・・・任務失敗か・・・」

ミソラは黙ってハーブを見ていた。

両手を絡めるように合わせていたミソラの手。堅く繋がったそれを解くように、スバルは片方の手を握る。目を合わせると、彼女も頷いた。

逃げてはならない存在に足を向ける。

近づいてくるスバルとミソラに気付き、ハーブが振り返った。

「安心して、もうあなたには近づかないわ。さようなら」

立ち去ろうとするハーブに手を伸ばす。声は出ない。喉が麻痺したように。難しい歌う時でも簡単に出るのに、単純な言葉がつかかって出てこない。

変わりに口を開いたのはウォーロックだった。

「待て」

「あいた！痛いじゃない！」

逃げるようにその場を去ろうとするハーブの頭を掴む。

「何で最期にミソラを操らなかった？」

電波変換が解けた直後、ミソラの心を破壊して乗っ取ってしまった。スバルを失ったウォーロックになす術は無かった。

しかし、彼女が取った行動は逆だ。

「ミソラちゃんの心を壊すのが嫌だったの？」

「・・・もう、どうだっていいでしょ？」

スバルに凶星を突かれた。

気まずそうにミソラを見て、ウォーロックの手を振りほどき、再びウェブロードへ上がろうとする。

「ハーブはこれからどうするの？」

また足が止まる。どうしても、ミソラとは話したくないようで沈黙を保っている。

何も答えてくれないハーブの態度に、ミソラが下唇をギョツと噛



むと、手を強く握られた。スバルの目はハーブへと向いているが、意識はこっちに向いている。励ましてくれる彼の手を握り返す。

そんな二人を横目で確認し、ようやく観念した。

「・・・任務はもうどうだっていいし。この星で、一人でのんびり暮らすわ」

「一人なの？他の人達は？」

「他のFM星人に見つかったら、ウォーロックみたいに狙われるはずだわ。あいつらはみくんな働き者だからね？」

自分と同じだ。

周りに怯え、隠れるように暮らす日々を送ることになる。のんびりなんてできる訳がない。

「じゃあ、私と一緒にいようよ？」

誰も声が出せなかった。ミソラの発言の意味をそれぞれの知識と言つ名の辞書に当てはめる。それだけの行為がとても長い。三人の答えが「え？」という一文字になって重なる。

「ミソラちゃん？」

「女、本気か？」

「うん！」

男二人の反応に笑って返し、未だにキョトンと目を見開いているハーブへと駆けよる。

「ミソラ？私はあなたを・・・」

「根っからの悪人なら、最初に私の心を壊していたでしょ？」

スバル君を助けるのにも協力してくれたし、あなたは悪い人じゃ

ないわ。

それに、音楽を愛する人に悪い人なんかいないんだから！」

ギョツとハープを抱きしめる。ぬいぐるみを抱きしめる無邪気な子供のようだ。

「音楽好き同士で、仲良くなれそうだしね!？」

「えっと……えっと……」

返答に困っている。

しかし、汚れの一切無いミソラの笑みには敵わない。

「なら、お言葉に甘えようかしら?」

「やった!よろしくね、ハープ!」

「ええ、ミソラ!ポロン!」

キヤツキヤツと手を取り合っている。打ち解け合っている。

そんな二人をスバルとウォーロックは見守っていた。

近づけない。

女の子が放つ特有のオーラがバリアのように張られている。

「ねえ、女の子ってあんなにすぐに仲良くなれるものなの?」

「俺に聞くな」

「って言うか、これで良いのかな?」

さっきまで敵だったハープを見る。が、すぐにその考えは変わる。ミソラを見たからだ。

笑っている。自分の前で見せてくれたものとはまた違ったものだ。仲間を、友人を得たそれは、ゴン太や宇田海が見せたものと似ている。

やっぱり、自分はルナや天地の様にはいかなかった。けれど、それをハープが代わりになしてくれるのなら・・・  
この結果で良いと確信できた。

「って言うわけで、私とハープも戦うね？」

「・・・今なんて？」

ハープと肩を寄せ合って宣言するミソラにスバルは5本の指と手のひらを向ける。

「スバル君とロック君は、FM星人から地球を守っているんでしょ？」

「守ってるって言うか・・・ロック？」

戸惑うにスバルを無視し、ウォーロックはそっぽを向いて口笛を吹いている。スバルが寝ている間に、色々と都合が良いようにしゃべったらしい。

「地球の危機なんて、ほっとけないもん！」

戦えるのは、スバル君達を除いたら、私達だけなんですよ？  
だったら、戦うよ!？」

スバル君に助けてもらったし、今度は私の番なんだから！」

燃える闘志の中でガッツポーズをして見せる。

「それに・・・こんなことしちゃったからね？」

コダマタウンを見下ろす。

救出作業は大分進んだようで、サテラポリスが救急隊の仕事を手伝っている。目覚めた五陽田警部が指揮を取っているようだ。

「ミソラ、これは私のせいよ？」

「連帯責任ってことにしとこ？」

「・・・そうね。分かったわ」

断るのは遠慮ではない。彼女の決意を否定する事だ。

「なら・・・よろしくね？」

「うん、よろしくね!？」

地球に襲い来るFM星人を撃退してきた二人にとって初めての味方。祝福するように傾いた日が4人を照らす。

「それとね、スバル君。私、決めたよ・・・」

「なにを？」

「一番大事なこと。スバル君に言われて、決心付いたよ」

今回の騒動の一番の元凶。

11年間のミソラの人生。その中で一番大きい決意を下した。

その日は歓喜と悲愴が満ちていた。

この場だけは春の爽やかさではなく、むわつとした熱気と湿気で満たされている。展望台の出入り口にかけられた看板が響きミソラの引退ライブを宣伝している。涙ながらに応援する委員長の腰巾着二人が違和感無く雰囲気溶け込んでいた。

その中で、一人だけついて行けていないのがスバルだ。乾かない汗にハンカチを当てて、ギュッと絞る。拒絶するように降り注ぐ水を弾く広場の土を踏みつけ、舞台となっている見晴らし台を見上げ

る。

ミソラが最期の曲を歌うところだ。

今日で終わりだ。目的を無くし、嫌々続けていた歌手活動もこれで終わる。無理やり出していた歌声も、今日から自分と母のためだけに使えば良い。

そう思うと、ほっと笑みがこぼれた。気付かれる前に、さっとファン達に向ける作り笑いへと変える。

「皆、今日はありがとう。」

そして・・・今までありがとう。

次の歌を最後に、私は引退します」

歡喜が無くなり、その分だけ悲愴が増えた。

泣きわめく会場を見下ろし、最期の曲名を口にした。

「グツナイママ」

ギターを持ち直す。弾いた音が静まり返った会場を包み込む。連なり、空気を作り出していく。

病弱だった母のために作った子守唄は集まった一人一人に温もりを与えていく。

一人のファンがリズムに合わせて手を振りだす。同じように隣の女性が、それを見ていた老人が真似をする。

気づけば、波が出来上がっていた。

会場の大きなうねりは、ミソラへと向けられる。

自分が傷付けた人達だ。事件の犯人を知らないとはいえ、自分を応援してくれている表情を見ていく。顔のパーツは違うが、皆同じだ。歌を聞き、笑みを送ってくる。

あなたの歌は、人を元気づけてくれる力があるわ

ミソラの歌が、母さん以外の人にも届くと、嬉しいわ

バカだ。

大好きだった母の思いを忘れていた。

ようやく思い出した。静かに大きく盛り上がるファン達。

湧き上がる。

向けられるこの期待に応えたいと言う思い。無理やり行っていた喉の動きが自然になる。清らかな小川のように声が流れてくる。一度は逃げ出した舞台の上で思いのままに飛び跳ねたくなる衝動を抑える。

自身のリズムが最高潮に達しようとする。

そこで指の動きを止めた。曲が終わった証だ。拍手の中でギターを下ろす。

熱い雫が頬を伝った。

「ごめんね、皆・・・」

拍手が収束していく。

皆と共に、泣いているミソラに戸惑いながらもスバルは耳を傾けていた。

「私・・・バカだった・・・気付けなかったの。ママが居なくなつて、一人だと思つてた。」

「こんなに・・・こんなに私を応援してくれる人がいる・・・皆がいる。」

「今、やっと気づけたの・・・」

会場を埋め尽くす目を見つめ返す。

「私が弱かつたせいで、皆にたくさん迷惑かけちゃつたよね？本当に・・・ごめんなさい。」

「私は今日で引退します。けど、それは今までの弱かつた私からの卒業です」

ギターについたマイクを下ろして涙を拭う。

「戻ってくるから・・・」

震える唇をもう一度開いた。

「私・・・きつと！戻ってくるから！私、もっと歌いたい！」

「また、皆の前で歌いたい！」

「だって私、やっぱり歌が大好きだから！」

「無我夢中で叫ぶミソラの思い。」

「着飾らず、まっすぐ打ち明けた言葉。」

「だから・・・その時は、また応援してください！」

それにファン達もまっすぐに応えた。

応援を誓う声が飛び交い、拍手が鳴る。

展望台を揺るがす喝采の中を、ミソラは止まらぬ涙を残して後にした。

それでも舞台から去った少女に向ける思いは、一向に収まる気配を見せなかった。



### 第三十五話・歌の絆（後書き）

ライブの雰囲気書くのって難しいですね？  
これでも頑張った方です。

一番頑張ったのはミソラが涙ながらに叫ぶシーンだったのは内緒です。

次回は流星のロックマン一作品目のあの名シーン・・・いや、神シーンです！

神と銘うった理由は、

「あのシーン無くしてゲーム版流星のロックマンはあり得ない！」  
と私は考えているからです。

感動そのまま、より感動できるように頑張ります！

### 第三十六話・初めてのブラザー（前書き）

原作の神シーンであり、スバルの新たな出発点とも言えるシーンです。

・・・同時にスバミソが始まる場所でもある。

これでも頑張ったんですよ？

これが限界でした・・・

### 第三十六話・初めてのブラザー

コダマタウンの一大イベントが終わった。静けさを取り戻した、会場だった展望台でスバルとミソラは共に眼下の光景を見下ろしていた。家族や友人へ、今日味わった感動を自慢しようと家路につく者達が見える。

「色々とありがとう」

「僕は何もしてないよ。それより歌は良いの？」

「良いの。ただがむしやらに歌っても駄目だって分かったから。何のために歌うのか、もう一度考え直して・・・答えを出してからまた歌いたい」

強い子だなと感じた。

もう前を向いている。追い詰められ、挫折したミソラはもういない。手すりから身を乗り出し、風を受けて微笑んでいる姿を素直に美しいと感じた。

「これから大丈夫？」

「大丈夫だって！」

元氣いっぱいウィンクして見せる。

「決めたんだよ！強くなるって！これからはなんだって一人で頑張っていくんだから！」

「・・・そっか」

「そう、一人で・・・」

気付いた。

見落としてしまいそんな小さな光をスバルは見逃さなかった。

「ミソラちゃん!？」

スバルの手が示す場所に手をやる。

ピチャリとした感触。

指先が濡れていた。

「あれ?おつかしいな?なんで・・・なんで・・・」

陽気に振舞おうとする言葉と違い、声は萎んでいく。

「あ・・・あ・・・」

今更湧いてきた感情は止まらない。

ブレーキの効かない車のように。

「うわあああああん!!」

溢れた。

ミソラの思いがそのまま形になって、ミソラの熱を奪っていく。

「なん、で・・・ウツウウ・・・私・・・頑張ら、なきや・・・頑  
張らなきや、いけないのに・・・ツウ、グス・・・な、んで?・・・  
ヒゲツ、アツ、アウウ・・・」

一人という言葉を理解していた。しかし、今になってようやく孤独を理解した。今のミソラには母も、ファンも、歌すら無い。本当

の意味での一人ぼっち。

今初めてミソラの心は孤独を理解した。

押しつぶす。

孤独と喪失感。それらが誘<sup>こゝろ</sup>う不安。

ミソラの小さくて華奢な体を押しつぶす。

自分を責めた

強くなんてない

元気なわけがない

平気でいられるわけがない

誤認していた自分自身を殴りつけたかった

俯くミソラに手を伸ばし、声をかけようとする。

「あ……」

なんて言えはいんだらう？

手を止めた。伸ばそうとした手を途中で戻し、半歩踏み出した足を下げる。

何も変わって無い。

結局、自分は何もしてあげられない。

アマケンの屋上の時と同じだ。何も声をかけられない。触れてあげることができない。一步にも満たない距離を進むことすらできない。

弱い自分をさらけ出して、説得した気になって、彼女が踏み出した姿を見て自分も強くなったと誤解していたにすぎなかった。

彼女の泣きじゃくる姿を見ていることしかできない。

「励ましてやれよ？」

「ロック？」

「お前が望んでいたことだろ？」

トランサーから語りかけるウォーロックの言葉受けて、もう一度ミソラを見る。ハープが側に出てきているが、慰めの言葉が見つからないのだろう。背中を摩ひすることしかできない。

たくさんの本を読んだ。

宇宙の知識を詰め込んだ。

11年間で得られたあらゆる文字を検索する。けど、何も引っかからない。

一人だけど頑張れ？

応援するよ？

無責任な言葉だ。

無力と言う単語が心臓を握りつぶす。

もう一度、頭をひっくり返して情報の大河に足を踏み入れる。見つからない。

どんな立派な言葉を探しても、彼女の力になれそうな言葉は見つからない。

あきらめまいと歯を食いしばる。

ブラザーだ

その中で見つけた小さな石。

拾い上げたそれは夜空に浮かぶ星の様に小さく、何よりも輝いていた。

「……父さん……」

一人じゃ解決できない問題も誰かと繋がれば乗り越えられる

誰かが自分を強くしてくれるし、自分も誰かの力になれる

そうやってできていった絆はどんなものよりも勇気をくれるんだよ

夢にも出て来た、父に教わった言葉。

ミソラの足元に滴り落ちる雫から視線を上げる。両手を握るようにして目を覆い隠している。その隙間からは直も涙なみが流れている。

「僕にできる？」

たった一言で、この子の涙を止めることができるのなら。

一人じゃ解決できない問題も誰かと繋がれば乗り越えられる

乗り越えられる？僕も？彼女も？

誰かが自分を強くしてくれるし、自分も誰かの力になれる

僕でも、この子の・・・力になれる？

そうやってできていった絆はどんなものよりも勇気をくれるんだ  
よ

この子の生きる勇気になれる？

どんなものよりも勇気をくれるんだよ

「でも・・・」

それは誰かと繋がると言うこと

親しい大切な人ができると言うこと

絆を持つと言うこと



得られた絆を失うかもしれないと言ったこと

父を失った時のように

勇気をくれるんだよ

「怖い……」

手足がブルブルと震えてくる。  
父を失った時に学んだはずだ。  
失うことの恐ろしさを。

勇気を

胸に刻まれた深い傷が悲鳴を上げてくる。  
ギョツと瞼を閉じ、痛む胸を力が入らない指で掴む。

「怖いよ……父さん」

勇気を出せ！スバル！！

「っ!!」

はつきりと聞こえた。

夢には無かった父の声。

星を握りしめた

「僕は……」

足を持ち上げた。

重い。

今ままに感じたことのないずっしりとした重さだった。

けど、引きずるうとは思わない。

地から離し、前へと突き出した。

伸ばした手はゆっくりと、しかし行き先に迷うことなく肩へと向かう。折れてしまいそうな薄い肩を、めいっばいに広げた手で覆うように掴んだ。

覗き込んでくる碧色の瞳。嗚咽は止まっていないが、驚いたように見つめてくる。

「僕の……」

今度は吸い込まれない。

一度目をつぶり、震える自身の体を食いしばる。手から伝わる柔らかな生地感触と、その下から伝わってくる鉄のように冷たい体温。

辛いのは、自分だけじゃない。

勇気を・・・ください

もう片方の手で父の形見のペンダントを握りしめ、閉じていた瞼を今までにないほど力強く開き、ミソラの瞳を見た。

そこに映る自分の顔は自分でも嫌になるほど情けない。今にも泣き出しそうだ。

かつこ悪い。

でも、それでいい。かつこ悪くても良い。

ただ、この一言を言えるのなら・・・

震える唇で、ミソラに思いの限りの言葉を伝えた。

「僕の、ブラザーになってください!」

ミソラを見つめる

後ろの木々

隣にいるハーブ

肩に置いた自分の手

縞模様のミソラの袖  
見えない

拭ってあげたい涙にまみれた瞳だけを見る

それが細められた

「……うん」

トランサーのブラザー一覧を開く。誰一人としてそこには記されていない。生涯無縁と思っていた新規登録の項目を選ぶ。

「じゃあ、行くよ?」

こくりと頷き、スバルの左手へトランサーの機能を持ったギターを向ける。

ピピツと言う音がなり、表示されていた文字が変わる。

画面を確認するとミソラがいた。

「よろしくね、スバル君」  
「うん。よろしく」

ミソラの涙は無くなっていた。目を閉じ、ギターを両手で抱きしめる。

「温かいんだね？ブラザーって・・・」

「大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ？だって、私達繋がっているから！

広い世界の中で私は一人じゃないって確信が持てるから！」

そこにあつたのは新しいものだった。

楽しさ、悲しみ、そのどれとも違う。

力の籠った目を開いた。

「私、新しい一步を踏み出せる気がする。

ううん、絶対に踏み出せる！」

私もスバル君も新しい自分になれるはずだよ？」

町を見下ろせる場所まで行き、手に持っていたギターを構える。

演奏が始まる。

今日聞いたものとも、作っている途中だと言っていた物とも違う。始めて聞く曲だった。

そよそよと耳をくすぐるだけの風に力強さを与えていく。

耳を澄ます暇もなく、ミソラは曲を終了させた。

「また新しい曲？」

「うん！今の気持ちを曲にしたの！テーマはスバル君だよ！」

「ぼ、僕〜？」

照れくさくなり、頬に爪を立てた。

「もちろんまだ未完成だよ？出来上がったら一番に聞かせてあげるね！？」

にっこりと笑って見せた。

彼女は何度も笑顔を向けてくれた。始めて会った時も、母の話をしてくれた時も、舞台の上でもだ。

そのどれよりも、今のミソラは一段と輝いていた。

心臓がこれでもかどと血液を送り出す。

頭が沸騰したように熱くなる。

ミソラも、その周りの物も赤で塗りつぶされる。

目は一点にとどまらず、それぞれが別の方向へ向けられ、グルグルと動き回る。

口がからからに渴く。

飲み込もうとした唾がつかかる。

肺がまともに機能してくれない。

パクパクと口を開いても酸素が取り入れられない。

呼吸が速くなる。

「どうしたの？」

「ふえ！？あ、ななな何でもないよ！？」

「？」

拳動不審なスバルに何も気づいていな様子だった。

スバルは大きく息を吸い込む。高鳴る心臓は収まらず、言葉にできない感情が湧きあがる。

この空気を読まずに、割って入ったのがあの男である。

「御用だ〜！Z波大量感知！どこだ〜！？」

桃色だった世界があつという間にむさくなる。

見下ろした広場で五陽田刑事がアンテナをぐらぐらと揺らしていた。FM星人を相棒に持つ二人は急いで逃げなければならない。しかし、この展望台の出入り口は一つ。逃げ道も一つだ。その進路上に居座っている。

様々な意味で邪魔だ。

「行くよ、ハープ！」

「ええ！」

ギターを五陽田に向けて構えると、中にいるハープに合図を送る。

「え？」

「おい・・・」

「パルスソング！」

中年親父はひでぶつと叫び、横たえた体から煙をたち上げ始めた。

「やったね？」

惨劇を背景にミソラは満面のブイサインを向けてくる。

スバルも同じく返しておくが、同じと呼べるか微妙なラインだ。ヒクつく指でかるうじてVを形作る。

「ロック・・・ブラザーってこんなに効果あるものなの？」

「俺に聞くな」

広場が騒がしくなってくる。駆けつけてくる数人の影は五陽田の部下達のものだ。

「あっちゃ。あれは無理だね・・・」

「逃げようか、ミソラちゃん？」

「うん！」

差し出されたスバルの手を取り、合言葉を叫ぶ。

「電波変換 星河スバル！」

「響ミソラ！」

オン・エア！

二人の声が重なり、響き渡る。

青とピンクが寄り添うように空へと飛んでいく。良く見ると、青がちよつとだけ先行している。

倒れた五陽田と、彼に駆け寄るサテラポリス達がグングンと小さくなっていく。彼らにいたずらっぽく笑い、スバルの手と重ねられた自分の手を見つめた。

強く握りしめ、引っ張ってくれる彼の手を、優しく・・・けれど力強く握り返した。



第三十六話・初めてのブラザー（後書き）

これが限界でした！

絆を失って傷つき、絆を持つことを恐れ、避け続けて来たスバル。  
そんな彼が自らの意思でミソラと絆を結ぶという大切なシーンです。  
もっとうまく書きたかったのですが、今の私ではこれが限界でした。

感動してもらえましたか？

第三十七話・絆、響き合う（前書き）

今回で四章はおしまいです。

またもやオリジナルな終わり方です。

### 第三十七話・絆、響き合う

望遠鏡から目を離して戸棚の上に置いたトランサーを見る。寝るには良い時間だ。ウォーロックにテレビを消すように促すと、しびしびと消して戻ってくる。何か良い番組があったのかと尋ねながらトランサーの別のページを開いた。そこには、一人の女の子が映っている。

「うれしいのか？」

「・・・複雑かな？でも、後悔はしていないよ？」

「そうか」

涙を止め、笑ってくれたミソラを思い出す。ミソラを救ったのは自分だ。誇って良いことだと思つと、自然と笑みが零れた。あの時、勇気と手段をくれたのは・・・

「僕も、少しは強くなれたのかな？父さん」

側に置いてあつた父の形見のペンダントにそつと触れる。

「え？」

手の隙間から黄色が溢れてくる。さつと手を引つ込めると、星を象つたペンダントが光り輝いていた。意志を持つかのように宙に浮き始める。

「な・・・なに？」

「スバル、こいつは!？」

「僕も知らないよ!」

恐る恐ると、宙を漂うそれに手を伸ばす。ふっとペンダントの光が消え、糸が切れたかのように落ちる。とっさにそれを掴み取り、マジマジと見つめた。  
いつものペンダントだ。

「なんだったんだろう、今の・・・？」

ウォーロックに視線を送るが、彼も首をかしげるだけだった。

週明けの初日。二人は朝早くから家を空け、ロックマンとなってウェブロードの端に腰かけていた。

眼前に広がるのは学校だ。しかし、スバルが在籍しているコダマ小学校ではない。もちろん、これからこの校門をくぐるわけでもない。今日からこの小学校に復学をする人がいる。それを見届けに来ただけだ。ウォーロックがその人物に気づいて、スバルに声をかけた。

来た。

あの子だ。昨日のメールで言っていた通りだ。身構えるように立ち上がる。敵が来たわけでもないし、彼女が側に来たわけでもない。電波体になっている自分に気づくわけもなく、足の下を通り過ぎていく。そもそも、彼女に気づかれないために電波変換しているのだ。心配になって来たのは良いものの、直接顔を合わせると彼女にとっても迷惑になりかねない上に、余計な気を使わせてしまうからだ。彼女が向かう先は、スバルが見ていた校舎だ。少女にとっては大変な挑戦がこれから始まる。そう思うと、彼も座つてのんびりしているなんてできなかつた。彼女を取り囲む人々の動きとざわめきに煮えくりかえるものを感じつつ、それを拳にして紛らわす。

見せものだ。

まるで動物園にやってきたパンダだ。そっくりなお団子がついたフードを被り、黄色いギターを背負った姿。アイドルとして活動していた時と同じ格好だ。話題のあの子だと言うことは素人ですら、一目で分かる。それに加えて、ご丁寧にマスコミが駆け付けている。アイドルを辞めたあの大人気歌手が復学するとか、お昼のニュースにもならないような取材をしに来ているらしい。彼らの程度の低さに呆れかえりそうだ。学校へと向かう者達だけでなく、会社に遅刻する事を伝えたサラリーマン達がトランサーを開いて写真を取っている。

それを視界から拒絶し、タンタンと歩みを進める。

集中する視線。指差すヤジウマ達。現役だったころとは違う、非難と中傷も含んだ人込みを分け、校門へとたどり着いた。中には風紀を取り締まる教職員がいるが、彼もファンなのだろう。仕事よりも己の好奇心を優先しているようだ。

誰もいない。

自分に味方をしてくれる者は誰もいない。物として、アイドルとして、壁一枚向こうから眺める奴しかいない。醸し出される空気が肺を冷たくする。徐々に足が重くなり、校門を前にして立ち止まる。それを、先日パートナーとなった相棒は見逃さなかった。ギターの中から、トランサーを開くように促す。

言われるがままに、ギターを下ろし、ディスプレイを見る。

ブラザーの写真が映っていた。無表情で、ムスツとしている。笑いかけてくれるわけでもないし、声をかけてくれるわけでもない。ただ、彼を見ているだけで良かった。朝起きてからずっと笑わなかった彼女の足取りが軽くなる。

それを見て、FM星人はディスプレイ内で笑い返して見せた。

校舎に消えていく姿を見届け、彼は背を向けた。彼女ならばもう大丈夫だろう。そして、もうひとつの理由が彼をそうさせた。

「学校に入る時にね、スバル君の事を思い出したの。そしたら、怖くなくなっただよ」

「ほんと？良かった。僕でも力になれたんだね？学校はどう？」

「久々の学校生活で忘れてることばかり。給食の存在忘れて、お弁当持つて行っていたよ」

「あはは、やつちゃったね？それは晩御飯にしたの？」

「うっん。両方食べたよ？」

「よく入ったね？」

「まあね？授業も一年遅れだから、さっぱりわかんないよ！」

「何が苦手なの？メール越しだけど、教えてあげられるよ？」

「スバル君は勉強できるの？」

「自宅で勉強しているよ」

「そうなんだ！すごい！私、英語は得意なの。曲に使うからね。国

語もまあまあかな？

苦手なのは算数だね？全然分からないよ！」

「算数は積み重ねだからね？無理もないよ」

「じゃあ、今日の宿題代わりにやって！」

「それはダメだよ。自分でやらなきゃ」

「きゃは！だよね？」

私ね、スバル君とブラザーになれたことで少し強くなれた気がするの。

これから色々大変だと思う。でも、逃げずに、前を向いて歩こうと思うの。

お互いに頑張って行こう！」

「うん。頑張ろうね」

「やった！スバル君と一緒になら私も怖くないよ！

じゃあ、私はそろそろ宿題するね？」

「うん。じゃあ、お休み」

「お休み」

パタンとトランサーを閉じた。文章メールはこれで終わりだ。

「ミソラの奴、これからも学校に行くんだな？」

「そうだね」

トランサーから出ていた相棒に応える。しかし、スバルの目は一向に動く気配を見せない。頬を緩め、ブラザー一覽に映っているミソラの顔をじつと見ている。以前言っていた、複雑な気持ちは嬉しみに変わったみたいだ。

「ところでよ。俺は最近刑事ドラマにはまっているわけだが・・・」  
「刑事ドラマ？それがどうしたの？」

「今日のお前の行為って、ストーカーって言っんじやないのか？」

今日の行動を振り返る。

ミソラに何も告げずに、見つからないように注意を払い、行動をずっと観察する。

犯罪行為そのものだ。

スバルの顔がサーツと青くなる。

「ち、違うよ！あれは・・・ミソラちゃんが心配で！」

「犯人の変態野郎は大抵そう言ってるぜ？それに、今まで他の奴らにはそんなことしなかつただろうが？」

「そ、それは・・・ミソラちゃんは、ブラザーだし！か弱い女の子だし・・・」

「電波変換できるぜ？」

「いや、だから・・・その・・・」

「ああ、やっぱりあれか？」

ぱちりと指を鳴らした。その後の発言が止めだった。

「惚れたのか？」

消えかかっているろうそくのような、ゆらゆらと揺らいでいた火に、大量の油を流し込んでしまった。



「ロツクー！！！！」

獣のような吠え声。歯をむき出し、立ち上がっている髪がさらに逆立ち、両手を拳骨に固めている。異星人に目の錯覚というものが無いと仮定すると、今のスバルは炎を纏っている。

危険を身に知らせる野生の本能に従い、ウォーロツクはさっと寝床に逃げ込んだ。

「悪い、ほんとすまねえ！」

「まったく……」

ウォーロツクの素直な謝罪を受け、怒りの矛を鞘に収めた。ふうと大きく息をついてベランダへと身を乗り出した。

地球人の少年に怒られた異星人もトランサーからスツと抜け出して、そろそろと後ろに続く。てっきり星空を見上げると思っていたが、スバルが見ているのは町の風景だ。彼の目はほんのりと光る町の灯も、店のシャッターを下ろす南国の姿も、ここからでも見える展望台も捕らえてはいなかった。茶色い瞳が捕らえているのかここからでは見えないとあるものだとウォーロツクは気付いた。

「行きたいのか？」

「え？」

「学校だ」

あり得ない答えを出した相棒におどけるように返した。

「まさか」

「……嘘だな」

スバルは意外そうに、ウォーロックがいるであろう何もない窓のそばを見る。

「お前は本当に興味が無いのなら、見向きもしないはずだぜ？」

見抜かれていた。

「そう・・・だね？けど、行きたいってわけじゃないんだ・・・」

もう一度さっきの方角に視線を移す。

「ミソラちゃんはもう学校に行き始めている。僕は、3年間も行けていない・・・」

先ほど行つた、ミソラとのメールを思い出す。

強くなれた

逃げずに

前を向いて

怖くない

頑張ろう

一つ一つの言葉が、痛かった。鋭利な針を心臓に突き刺される気分だった。顔も声も使わない文章メールだから『頑張ろうね』なんて誤魔化せた。

自分の顔を掴み、歪ませ、見えない校舎に目をやる。

「学校・・・か・・・」

第四章・響き合う（完）

### 第三十七話・絆、響き合う（後書き）

これにて四章はおしまいです。

この章はスバルが本当の意味で一步を踏み出すお話でしたね？そのため、今章のスバルを描くのは大変でした。ブラザーを申し込む一歩とか特に・・・

ミソラが頻繁に笑ったり泣いたりするため、笑うと泣くをしっかりと描写して、メリハリをつけることが今回の目標でした。

そこら辺を楽しんでいただけたら幸いです。

## お詫びと今後の活動について（前書き）

活動報告の方にも書いていますが、こちらにも書いておこうと考え、掲載させていただきました。

## お詫びと今後の活動について

私は一月から忙しい日々が始まる予定でした。しかし、その予定がずれ込み、十二月から動かなくてはならなくなりました。

そのため、現在執筆が進まない状況です。

よって、今後の活動は遅滞することになります。

読んでくださっている皆様、申し訳ありません。

しかし、更新は途絶えさせません。

実は、五章が途中まで書きあがっています。

これらを二週間に一話間隔で掲載しようと考えています。

三月～五月の間に活動が再開できると考えていますが、それでも活動は今までのようにはできなくなると思います。

ただでさえ遅い更新ですが、必ず書いていきます。

途絶えさせないように努力します。

どうか、見守ってやってください。

よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5860w/>

---

流星のロックマン Arrange The Original

2011年12月11日15時45分発行